

大内青巖居士校閱
加藤咄堂居士立案

鴻盟社編輯局編纂

曹洞宗說教大全



東京

鴻盟社藏版

凡例

一 本書は社會の進運と時代の要求に應じ、本宗の教義を可成穩健に述べ、以て布教者の参考に資せんとするにあり

一 既に前項の目的を以て編述せしものなれば、本宗の根本教義に背反せざる限りは他の科學哲學の原理をも容認して、まゝ引用せり

一 本書に引用せる事例は、從來慣用せられたる奇怪なる事實を避け、可成歴史に記憶せられる東西の事例を以てせり、然れども中には専門史家の眼より見れば多少疑問に屬すべき事實なきにあらざれども、そは多く從來の説に隨へり

一 本書は從來行はれたる法譬因の定則に依りて講述したるも、中には法譬のみを述べて因を談ぜず、或は譬因を前に述べて法を後に説くもの無きにあらず、是れ編者が從來の如く法譬因の三を順次

に説き若しくは此の三者を必ず具備せざるべからざるの必要を認めざればなり

一 本書編述中高祖太祖に關する事實は多く從來の説に隨つて講述せる所尠からず故に兩祖に關する事實を述べんと欲せば弘津説三氏の『承陽大師御傳記』故法雲普蓋禪師御親撰の『總持開祖御傳抄』を參考すべし

一 本書の校正は編者自ら此を爲すの餘暇なかりしを以て多少の誤植あるを免れず特に高祖の遺偈中の渾身無覓とあるべきを渾身無着とせしは編者の遺憾とする所なり

明治三十五年十月

編者識

曹洞宗教說大全目次

總説

- 第一 曹洞宗說教の心得……………一
- 第二 曹洞宗布教沿革……………一〇
- 第三 曹洞宗の大意……………一四

御教諭說教

- 第一 宗教の必要……………三一
- 第二 曹洞宗の特色……………三九
- 第三 曹洞宗の信仰……………四六

修證義說教

- 第一 生死を論ず……………六四
- 第二 人間の價値……………七〇
- 第三 人生の無常……………七七
- 第四 因果の理法……………八五

第五	善因善果	九二
第六	邪見を破す	九九
第七	懺悔の功德	一一三
第八	廣大の慈門	一一九
第九	淨信を論ず	一二六
第十	懺悔の主旨	一三三
第十一	懺悔の儀式	一四二
第十二	曹洞宗の戒法	一五二
第十三	佛教の根本思想	一五九
第十四	正信と迷信	一六九
第十五	一心の歸着	一七九
第十六	積功累徳	一八六
第十七	戒法大意	一九三
第十八	佛子とは何んぞ	二〇三
第十九	發菩提心	二〇八

第二十	社會事業と佛教	二一〇
第二十一	社會改良家の任務	二一六
第二十二	佛教と女子	二二四
第二十三	價值ある生活	二四〇
第二十四	慈善の本義	二四八
第二十五	言語の用法	二五四
第二十六	處世の要道	二六〇
第二十七	同情	二六五
第二十八	吾人の行爲	二七三
第二十九	日本と佛教	二七八
第三十	聞法の心得	二八四
第三十一	佛祖の大恩	二八九
第三十二	處世の大道	二九四
第三十三	日々の義務	二九九
第三十四	即心是佛	三〇四

十戒說教

目次

四

第一	十戒	三二一
第二	不殺生戒	三二七
第三	不偷盜戒	三三三
第四	不邪淫戒	三三九
第五	不妄語戒	三四五
第六	不酤酒戒	三五九
第七	不說過戒	三四九
第八	不自讚毀他戒	三五二
第九	不慳法財戒	三五六
第十	不瞋恚戒	三六一
第十一	不謗三寶戒	三六五
佛降誕會說教		
第一		四〇二
第二		四〇九

達磨忌說教

第一	四一九
第二	四二四

高祖御遠忌說教

第一	四三二
第二	四三九

御教義說教

第一	教外別傳	四四七
第二	法性衆生	四五三
第三	一大藏經	四五八
第四	這個田地	四六五
第五	貪瞋痴等	四七一
第六	君父恩重	四七七
第七	轉迷開悟	四八二

太祖法要法語

目次

五

第一 四九一

第二 四九五

坐禪說教

第一 五〇六

第二 五二〇

附 録

布教錦囊

曹洞宗說教大全目次終

曹洞宗說教大全

大内青巒居士校閱
 加藤咄堂居士立案
 鴻盟社編輯局編輯



第一、曹洞宗說教の心得

說教といふものは、如何様なものであるかといふに、これは云ふまでもなく、法義を人に開かしめ解せしめ信ぜしめ、やがて行はしむるので其聽衆は何者たるを撰ばむのでありますから言語は成る可く解し易いのを第一とします、如何に高尚な説でも解し難かつた其時は說教の目的には背くのであります、ソコで說教者の第一は如何なる言語を以て法義を言ひあらはさうかといふことを考へるのにあります、例へば真如とか法性とか云ふことは、佛者では平常に使つてをりまするが、世間の人はその意味を知りませぬで、分り兼ねます、然ら

は此真如といふことをいふ代りには、如何な言語を使はねばならぬか、法性といふことをいふにはどのやうな言語がよいかといふことを工夫せねばなりません、それを工夫する前に説教者の避けねばならぬ言語があります、それを一々申しませう、

- (イ) 専門語を避け、
- (ロ) 地方語を避け、
- (ハ) 外國語を避け、
- (ニ) 古代語を避け、

これらは皆な説教をむつかしくするものでありますから避けねばなりません、専門語は専門の人ばかりに分つて其他に分らぬのでありますから説教の目的には適ひませぬ、前さにいふた眞女とか法性とかいふた佛教の専門語は勿論、哲學者の専門に使ふ抽象とか具象とかいふ語であるとか、科學者の専門に使ふ延長性であるとか、化合であるとか、細胞であるとかいふ語も成る可く避けねばなりません、それから地方語です、これは一地方に限つて行はれる語で日本全國普通でありませぬから使つても分らぬところでは、少しも分らぬのでありますから、断然避けねばなりません、例へば佐賀の「アバカン(充滿の義)とか煮根のナイ(諸の義)とかいふやうな類です、それまで甚しくなく

とも、國々には訛といふものがありますから、それは充分に注意せなければなりません、殊に九州、奥羽、北國の人々は自分では訛でないと思ふてをること、他國では少しも解せぬことがあるのでありますからよく注意せられたい、外國語は日本人全体にわかるのであります、得意然とこれを使ふ人があります、これは生意氣に見ゆるのみかは、説教の目的にも背くのであります、古代語といふのは昔し使つて今まつかはぬ、おんなといへばわかるのを、ワザトおみなといふたり、おとこといへばわかるのを、おといふの類であります、説教者の避くべきはこれらの語だけではありません、

- (ホ) 野卑なる語を避け、
- (ヘ) 猥褻なる語を避け、

て説教の尊嚴を保たねばなりません、随分説教師の中には好んで野卑な言語を使ふて、べらんめい口調で話す人がありますが、これはどうもよろしくありません、下等なことをも高尚にいひなして美しく感ぜしむるのが説教師の心得であります、八兵衛といふもの、後家が、

ほととぎすそちや冥途の鳥じやげなこちの八兵衛どんに逢やせなんだか

といふたのを、千種中納言は

ほととぎすよみぢの鳥ときくからは、わがなきつきにあひやしぬらん

と改められた、これらは同じ意味ぢやが、野卑な言語を避けて高尚に優美にせられたのである、説教師も此心得がなければならぬ、それから猥褻ぢや、これはいふまでもなく避けねばならぬ、よし因縁の話をするにつけて男女の關係が必要であつても、それは成る可く美しく話すといふことに注意してほしいのです、これで先づ説教師の避けねばならぬ言語は御話し申しましたが、然らば如何なる言語を用ふるか、それは以上

の言語に反對なる、
解し易くして、しかも、優美なる言語を用ふるのにあります、

さて言語を解し易くしやうとするに説くは、是非譬喩を以て云はなければ、わかるものでありませぬ、その譬喩にも、いろ／＼あります、

(甲) 言語上の譬喩

(乙) 組織上の譬喩

とす、言語上の譬喩といふのは、

真如の月、心の鏡、

煩惱の雲、

無常の風、

輪廻の絆

といふやうなもので、其言語を説明するのに用ふる譬喩で、修辭學でいふフュキユア

「オフ、スピーチといふものです、これにも言語を解し易からしむるために用ゆるのと、優美にするが爲めに用ゆるのと二つあります、前きに掲げたのは、この二つを兼ねてをるのでありますが、

明日ありと思ふ心の仇櫻夜半に嵐の吹かぬものかは

といふやうに喩へてゆくのは、優美にするのですが、「真如は月のやうなものです」とか「心は鏡のやうです」といふてゆくのは主として解し易からしむるのにあります、さて組織上の譬喩といふのは、一席の説教其主意を解せしむるに必要なため引用するので、

人の一生は旅宿に泊つてをるやうなものぢや、いつまでも居りたいとて時節がくれは出立して未來へゆかねばならぬ、さて旅宿のやうなものであるならば人が此の世の中で働くのは旅籠賃を拂ふやうなものぢや

といふやうなのであります、一席の説教にはどうしても、この譬喩がないと充分に解し易からしむることは出来ぬのであります、譬喩の心得は

(1) 譬喩は及ぶ可き丈け手近いところのものを取れ、

(2) 同一の譬喩をしばしば繰り返すことなかれ、
 (3) 一席の説教に多くの譬喩を用ふるなかれ、
 といふ位なものです、佛法といふものは結構なものでこれを説くには何んでもかんでも譬喩となりませぬ、一本の扇でも、茶碗でも、水でも、よろしい、さて此譬喩をして實際今ま一層有力ならしめ、聴者をしてこれを聴いて成る程と合點せしむるには、事實談が必要である、昔の所謂因縁のことで、法説、譬喩、因縁の三は説教には必ず要するものとなつてをる、これは當然のことであると思ふ、併し昔流に譬喩といふものは必ず經論の中にあるのを用ひねばならぬなどといふのは、頑固者流の僻論で、何んでもよい、わかればよいのである、サテ又因縁も昔流の因縁は到底現今の時勢に適せぬ、これは其法説に適合したる事實談を用ゆるがよい、如堂道心の因縁だとか、三十三間棟の由來だとか又は殺生石の由來などは全然廢してもらはねば、却て迷妄の信仰を鼓吹することゝなる、曹洞宗に縁ある話でも、太田道灌、上杉謙信、細川頼之、大石良雄などの話もあるし、歴世の高僧方の逸話でもよい、それでなくとも、史上の事實悉く佛説を確めるに足るぢや、何を苦んでか荒唐不稽の因縁話を要しやラソコ、私は説教師に曹洞宗史は勿論世界の歴史にも通じてをつてもらいたいと思ふのです、

殊に内地雜居に相成つてをります今日のとてあるから、西洋の例なども却て面白いと思ひます、こゝに注意してをくのは、如何に西洋の話が面白いからとて、知りもせぬことをいふたり、生物知りのとを喋つたりすると大笑ひの本となるのであるから、これは注意せねばならぬ、兎角知りもせぬことを知つた顔していひたがるもので、或る説教師が其法談は非常に有難かつたが、農業の例を引て間違つてをつたとか、ナポレオンをナポレタンといふたとかいふことは能くある例であるから御注意をしてをくぢや、哲學者スベンサーの語になぞといふてをりますから、其スベンサーは何國の人、いつごろの人だと聞くと、知らぬ人がある、それでは困るのであるから此點は注意に注意を加へんと、ドンナ聴衆が居るかも知れませぬから思はぬ耻をかくものです、さて説教は右の如く法醫因の三つを材料とするのであるがこれを組立てるのは、どうするのであるかといふと、正式といふべきは、法説を第一とし譬喩を設け、それから因縁で結ぶのであるが、都合によつては譬喩より因縁に入り法説を以て結ぶものもある、それは其時の場合と聴衆の都合によるのであるから、一定の順序を株守するには及ばぬ、されども一座の説教の主眼は法説にあるのであるから、これに話を集中するやうにせねばならぬ、如何なる話をしても皆な其法説に集中し、さて其法説は自分の宗旨

の安心に集中するといふのが説教の主眼であります。従来のやうに賛題とは何の關係もない因縁話を述べて、殆んど賛題を讀むといふことが形式のやうになつてゐるのは面白くない。で、説教の組立は

法説を中心として譬喩、因縁もこれに集注せしむるを目的とせねばなりません。これを忘れては一座の説教終に統一するところがなく、面白い因縁ばかりを話をしてれば、それは全く祭文語りのやうになつてしまひます。説教の材料はいろいろの書物から取るのですが、また日常の事がそのまゝに説教の材料となるのもありますから注意して集めるがよろしい。この材料は法説をするのに適當なるものばかりでなく、又反對なものでもよい。反對なものは又反面から其眞理を證明することが出来るのであるから何によらず、集め得る丈け集めるがよい。古人は香舟の魚を逸せりぢや、フツしたことから其材料を得ぬとは云はれぬ。ソコで説教師に離してならぬのは

(甲) 備忘録

です。これに其材料を記入して置くがよい。即ち書物を讀めばこれを抄記して置くとか、人に話を聞けばそれを書きつけて置くとかいふのがされてゐる。如何に覺えても

と思ふても、人間の脳髓であるから、どんなことでも忘れぬとは云はれぬ。其時に必要でもあり如何なる時にどのやうな材料を得るかも知れぬから、これを所持して置く。と頗る便である。それから今一つは

(乙) 布教日誌

である。これは極く簡単に、何日何所に於て如何様な説教をしたといふことを記して置くので、これには忘れぬやうに如何なる譬喩を用いたといふことを書いて置かねばならぬ。如何なる趣意で話した位は記憶して置くか如何なる譬喩を用いたといふことはツイ忘れるものであるが聴衆の方は趣意を忘れても却て譬喩だけ覚えて置くのであるから此點は注意せねば、あの説教師はいつでも同じことをいふなぞと云はれるのである。

以上説教師の心得べき大要を御話し申したが、其言語は平易と優美、組立は統一といふことが必要であるといふ二つに過ぎない。ソコで此統一といふことさや、これは如何に統一するか、一坐の説教は法説に統一し、其法説は宗意安心に統一するのである。抑も曹洞宗の宗意安心はどのやうなものであらう、それはこゝに改めていふまでもない。受戒中心である、こゝに其事を解し易からしむるやうに、曹洞宗の説教中心の變

第二 曹洞宗布教の沿革

曹洞宗は高祖大師の遺風を慕ふて一箇半箇を接得するの旨として一般布教といふことは、從來頗る不行届てあつたのでありますが、明治維新のかたそれではならぬといふので時勢に適應するやうに布教することゝなつたのであります、この事を詳しく御調べになつたのが、布教で有名な芳川雄悟師です、同師の區分によりますると、

第一期 政教混淆時代

これは明治五年四月より明治八年の五月に至るまでの間て丁度教部省といふものが置かれて教導職といふものを設け、三條の教憲といふものを出して、これを弘通せしむるを以て目的とした、それは

- 一 敬神愛國の旨を聳すべきこと、
 - 一 天理人道を明にすべきこと、
 - 一 皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべきこと、
- て、此年東京に大教院といふものが設置せられ、其十一月には

天下大小神社及び神官教職、各其の社頭説教所を小教院と心得、

又 自今各宗寺院を以て凡て小教院と心得、各檀家の者を集めて勸學爲致候義可爲専務候

と達せられ、各府縣には中教院といふものが置かれて、此大教院や中教院には天御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神、天照大神の四神を祀つたので、全く神佛混淆、政教も亦混淆してつたのであるから、宗義安心を説くといふやうなことは夢にも見ることが出来ぬ、サテ其次きは

第二期 隨意説教時代

かゝる中に神佛分離の説は行はれ各宗は別に學林を立て、生徒を教授するとなり、漸く宗意を説くことが行はるゝやうになつたが、一定の標準がないので、殆んど戰國の如く各勝手氣儘な説教をして布教の統一といふものはなかつたので、其時代の著書としては、能仁柏巖師の洞曹宗問題十説といふものがある、それは、

鎮護國家説、 六趣輪廻説、 靈魂中有説、 年忌葬祭説、 眞俗二諦説、
生死邊脱、 教外別傳、 異類中行、 大悟却迷、 佛祖歸處、

といふやうなので、布教に應用するには、頗る困難であつた、それから辻頭高師の曹洞教會説教大意、寶山梵成師の説教落草談、といふやうなものがあつたが布教の中心は一定してをらぬ、此時には吉岡信行といふ人は釋迦彌陀の兩尊を立て、他力往生を説き、栖川興嚴なる人は他力往生にもあらず、見性成佛にもあらざる一種の念佛を唱へ、全く隨意説教にして本宗の安心は見るこゝが出来ぬ状態でありました、これが明治八年の五月から明治十七年八月まで、此終りの月に太政官は教導職を廢して神佛各宗管長に委任することゝなつた、さて其次きは

第三期 教會制度時代

明治十八年五月廿八日内務卿山縣伯の認可を得て此麻の如く亂れたる布教を統一せんとて宗制第四號を以て我が曹洞宗は曹洞宗々教大意なるものを頒布しました其末文に曹洞宗教は出家の僧侶若くは上根の機に對して單純自力即心成佛を説き在家の男女又は下根の機に對して專修他力一念往生を説く之を宗教の大意と爲す

とありて同時に曹洞教會條例なるものを出して布教の統一を計らうとしました、これ抑も曹洞宗の本意を得たものでござりませうか、曹洞宗の特色は面授口訣にあります、此面授口訣、室内相承によつて繼續し來たのです、それに其相承のない、專修他力一

念往生を説くのは異なるものではありませぬか、こゝに於てこれが改善を主張するものが出来て終に曹洞扶宗會といふものが出来ました、此扶宗會に於きましては大内青巖居士の手に成りました、洞上在家修證義といふものを採用しましたこれが抑も曹洞宗安心統一の初め在家化導の標準です

第四期 受戒中心時代

それから明治二十三年十二月一日を以て曹洞教會修證義といふものを出しました、これは在家化導修證義を根本とし、更らに訂正したもので、今日われわれの日常用いてゐる修證義です、これが發布の時の兩本山貫首猊下の告諭は左の如くです、

曹洞宗ノ依止シテ以テ今古ニ貫通セルハ唯佛祖單傳ノ正法眼藏ノミ稍等欽ンテ

高祖承陽大師正法眼藏ノ中ニ就テ宗教ノ大意安心正依ノ標準ヲ選出シテコレヲ曹洞教會修證義ト名クタリ夫レ生テ明ラメ死テ明ラメ即心是佛ヲ承當スルヲ宗教ノ大意トス本文首尾ニ於テ之ヲ標示ス中間ニ其準則ヲ開演セリ凡ソ五章三千七百零四字悉ク高祖ノ金言ニシテ皮肉骨髄今尙暖ナルモノニ非サルハナシ況ヤ廣大ノ文字ハ萬像ニアマリテ猶豊カナリ轉大法輪マター一塵ニオサマレリ生モ一時ノ位ナリ死モ一時ノ位ナリ然レハ則チ即心是佛ノ言猶是水中ノ月ナリ生死透脱ノ旨更ヲニ鏡裡ノ影ナル

コトヲ認得センヲ要ス自今以後一般ニ此修證義ヲ用テ布教ノ標準トナシ自カラ信シ人ヲシテ信セシメテ吾宗教ヲ顯揚セヨ

これが曹洞宗の安心確立で、こゝに統一してゆくのが尤も必要なものであります、修證義の頒布は曹洞宗の布教をして統一せしむるものであります、サテ曹洞宗安心の如何なるかは、次ぎに掲げ出します御教諭説教や、修證義の説教でわかりますが、其前に一席此修證義編纂に功のあつた大内青巒居士の曹洞宗の大意を演説せられた筆記を掲げます、

第三、曹洞宗の大意

曹洞宗の宗義の教へる所は如何なることであるかといふことを話して見様と思ます、夫に就いても佛法の總躰の中より撰んで曹洞宗の宗旨が立つのでございます、一般の佛法の上より云ふて見れば、何時も繰返して話する如く、佛法は外の事柄ではない我々も互が折角結構な人間に生れて出たのでございます、其結構な人間に生れて出た以上は之を空しくしないのが佛法の大躰の意趣でございます、夫から我々が結構な人間に生れた甲斐のある様にすることはどうである、其人間と云ふ人間の中に最上等の

人間になると云ふことでございます、然れば一番善い人間はどう云ふ事である一番人間の中に善い人間はどんな事である、皆さんに問ふて見たなれば種々様々あるてせうが、其中で一番多く答の出来るのは何である、大相なまゝ富貴な身分になつて権力もあり、金力もある、總ての事に不自由のない人になるのが上等な人間かの様に思ふ人が多いのでございませうが、夫は人間の價値を間違へたのであります、人間の最上等の價値は富貴や、高位に昇るのが最上等と云ふのではない、人間の人間たる價値は佛迦様は云ふ迄もなく、支那の孔子と云ふ方が仰つた詞に「朝に道を聞いて夕べに死すとも可なり」と云ふ、朝と云ふことは朝の内、午前のこととでございます、其午前に道と云ふものを聞くことが出来てあつたなれば其夕方は死んでも妙しも遣り惜しいことはない則ち道と云ふものが聞けるか聞けないかと云ふことになる、道はどうか同じ孔子様の流義の方で云ふた詞に「性に従ふ之れを道と云ふ」性に順ふ性は生れ付きであります人の生れ付き天然自然に生れない、前に具つて居るもの則ち性質がある、其性質其儘に現れて出るのが道であるぞと云ふのが孔子のお詞でございます、然れば生れ付き性はどつから出た孔子の流義で、之を「天の命之を性と云ふ」と云ふ、天は一體どう云ふものである、お講釋はないけれども、向から此世の中の種々様々の物

は出来る、誰か此大元だいげん締ひになる者がありさうなものだが、耶穌教は之を「エホバ」の神と云ふ、神が天地萬物ばんぶつを造ると云ふ、夫を孔子は神と云はない天の命めいずる處と云ふ命は云ひ付けてあります、天から云ひ付けられたのであります、山が高くなつて居るのも天が高くなれと云ふたから、高くなる水が物を濡す天が物を濡せと云ひ付かつたから濡す性と云ふこと、天と云ふことの講釋かうしやくになれば假りに天と云ふ名稱を拵こしらいて於いて云ひ付け通り現れるのが性と云ふ、生れ付き具つた所のもの人間には人間の生れ付き具つた所がなけにやならん等てございませう、夫が性てございませう、其人の性は一體何處から出たのである孔子の方のお話は濟んだが耶穌教は神と云ふ名稱がある、佛敎はどうかと云ふに眞如縁起しんじゆえんぎと云ふ、この眞如とはどう云ふものかといふに世の中にありとあらゆる物柄事柄一切萬物の則ち大元になる所のものがある、其大元になるものは別にあるのか別にあるぢやない、眞如法性にしてあらゆる物柄事柄が其儘其中に自然に含まれて居る處の大元の中央にある本体てございませう、其事に就いては別に話する考てございませう、眞如法性が縁起する因縁次第で現れると釋迦様は仰しやる譬へを云ふて見れば大海の水が浪になる様なものだと云ふ大海の水は限りもなく澤山ある其水が風に吹かれると云ふと驚々として風次第で浪が立つ、大い風が吹き出せ

は大きな浪が立つ、風か小さければ小さい浪が立つ、浪は唯女浪男浪が立つ斗りである種々様々の形は別にない、形は別であるけれども、夫は唯風と云ふ縁よりして色々に波が立つ水の中に浪があるぢやない波其儘の本體を見れば水である、水其儘が波立てば波でございませう、我々お互も富貴の者もあり貧乏な者もある智愚賢不肖もある夫は別であるが別のものながらも假りの姿であつて、其元は水の如く皆な同じ水でなけにやならぬ、種々様々に姿は分れて居るのに之に執着をすべきものぢやない、偏頗の心を以て己れがの我れのと云ふて騒ぐべきものぢやないのであらうぞよと云ふ、佛法ではものゝ性生れ付きと云ふものゝ大元は一つなものだと定める故に一味平等にして差別のなき性を棄けて我々は居ることになれば富貴な人でも貧乏な者でも利巧な者でも馬鹿な者でも其自分の富貴貧賤利巧馬鹿と云ふことは別々な姿に見る、暫らくさう見なして置いて元とを申せば皆な一つでなけにやならぬ、元を認めて置いて夫から始めて末が働いて出ることになれば元を忘れないで働く其別々の働く儘が一つの元との働きて別の姿が現れるのでございませう、茲に酒屋がある、餅屋がある、百姓がある、商人がある、其酒屋に見ても内には亭主も女房も居る、又番頭も丁稚小僧も「オサンドン」もある、夫で内に座つて居て帳面も附け、算盤を弾いて居る者あり、外に

出て樽拾いをする者もある、臺所で働いて居る又奥を掃除する者もあつて、皆別々でございませけれども、夫は何の爲にする座敷に座つて居つて帳面を付け、算盤を弾くも酒屋の仕事、奥の間の掃除をする者も、臺所に働いて居る者も、酒屋の仕事外に出て樽拾いをする小僧も丁稚も皆な酒屋の仕事、又御亭主も女房も同じく酒屋の仕事をして居る、酒屋の一つの元を云へば、別なものぢやない、別ではないがする仕事は別々にして居らにやならん其元を忘れて別々な仕事をすれば間違ひはない、然るに之れが元とを忘れて仕舞つて自分は酒屋の亭主か女房かを忘れて仕舞つて、さうして各手に仕事をすれば、自分々々で思い思ひの仕事をして居る様では酒屋の仕事にはならない、是れ此通り働いて居ると云ふても、夫は働いて居る計りのこととて酒屋の仕事にはならない、夫なれば皆な同じことをするかと云ふに家の商賣になれば別々に仕事をせにやならむ故に元を忘れない様に押へ付けて置いて別々に働くことが出来にや、何事も本當のものにやならない、其又ならんと云ふことも自分の身體で分ります、此身體に付いても各々仕事がある、鼻は鼻、口は口、目は目、耳は耳、手は手、足は足で別々な仕事をして居るのでございませ、夫れがどんなに工夫をしても、足で物を持つ譯に往かない手で運歩く譯に往かない、目で音を聞く譯に往かん、鼻が口の代りを

する譯に往かん、別々であつて自然の働きとして目で物を見る耳で音を聞く自分に見自分に聞く、手で物を持つ足で運歩く皆な己れの仕事になるのでございませ別々な儘二つの物の儘別々に働くさうして世の中になけにやならんことが分ります、然るにどうも我々互は別々な方に傾いて居りますが、親子兄弟夫婦朋友別々ではない、別體同心、體は別でも、心は一つに相なつて居るが、動もすれば兄弟喧嘩、夫婦喧嘩親子の間に於いて争をなし、互に「オレ」が「オレ」がと云ふて「オレ」が打つかり合つて治りが付かない、家内不和合になつて裁判所の庭に權利義務を争論するのも元とは「己れ」がと云ふが打つかり合つたのでございませ、大海の水も、其の水は一つでも波の立つた時に別々になつて居る、「オレ」がと云ふて喧嘩をすればどうしたものであります、大海の水から見れば誠に困つたものであります、水や波は喧嘩をしない、しななければ人間は喧嘩をする、夫は元を忘れて居るからでございませ、其處で元が定つて眞如法性の外にないことが能く得心が入つて、夫から立戻つて朝な夕な親子兄弟夫婦朋友も働いて居る斯う云ふことになりませが佛法の教へ曹洞宗の宗義でございませ、茲に於いて道に適ふた處の最上の人間になる、然れば其處に往かれるのはどうするかと云へば宗旨々々に依つて色々なことになる、其處に往く人々は智慧のあ

る人、知恵のない人もある、或は又聞いて分る人もあり、直くに分らん人もある、故に種々様々に説き様が違ふ、千年前に奈良に都を定めた時代の心もある夫から五六百年も過ぎて、鎌倉時代になれば世の中は戦争の世の中になつて人の心も違ふて總ての氣風も違います、夫には千年前の奈良の教へちやゆかないのでございます、夫故に鎌倉時代は浄土宗禪宗真宗日蓮宗と云ふ宗旨が出来て来る、又今日になれば世の中の氣風が違つて来て、お宗旨の上に於いても之より先きの人の氣風にちやんと合つた、お宗旨が出来ることがないとも云はれない、今迄の例に依ればあるべき筈になる今日世の中の教育を受けた人は八百年前のお宗旨では受取れない、中學以上の教育を受けた者ではあたりまへのお説教は聞きに往かない、爺さん婆さんの受持の様になる、残念なことでございます、又斯う云ふ世の中の人の耳に這入る様に説くことも出来る、一鉢八百年前に説かれたる佛法と三千年前に於ける佛法と、又今日の佛法とは別なものであるか決して別なものぢやない、昔な同じ佛法でございます、例令ば同じ料理とすると云つて豆腐にしても、八杯豆腐もあり、湯豆腐もあり、乃至安掛にもする料理の仕方に依つて豆腐の切様もあり味の付け様もある同じ豆腐でも「ロヤ、ヤツ」が宜い、之は熱くして湯豆腐にして食べ様と云ふ、人の好き／＼故、同じ豆腐であつても夫は

味噌を着けて田樂にしたら宜い、おつゆにしたら宜いと云ふ皆な各々好む所が違ふ、従つて味も形も違つて来る、料理の仕方が違ふ、佛法のお話も之と全じてでございます、其處で大變話は仕悪くいのでございませうが、丸出しに云ふて見れば……曹洞宗はどう教へると申して見れば極簡単に申しますれば唯四字しかない、詞で云つて見れば二つ、一つは本證一つは妙修本は「モト」證は證文だの證據だのと云ふ證の字、公證役場の證の字である其證と云ふことは、どう云ふことである、夫に違いないと云ふことを確めた詞でございます、物を認めたとてでございます、其證の字は佛法の平生の詞で云ふと「サトリ」と云ふ意味になる、今更に我々が悟るのぢやない元より夫に違ひなかつたと云ふとが得心が往くのであるから本の字がくつ付いて本證と云ふ、何が我々が違ひなかつたと云ふに我々今日自分々は凡夫でございます浅間しい姿の「ヤクザ」者であると思つた時、……どうもさう詰らんものと云ふ心を起す氣が出る、夫が分らんから自分は「エライ」者だと思ふて居る之を互に聞いて見れば又皆さんが聴く計りぢやない此の相談をすれば分ります、人間はまゝ一體何故に生きて居る何處から生れて來た何處に行く、之を相談すれば譯の分らないことになる、何處から來たか自分分らない又何しに生れて來た親も分らん親に問ふても分らん、どうかした拍子で

生れて来たと言ふより外に仕方はない、欲しいと思ふても出来ない、要らんと思ふても出来る、どうして生れて来たか分らない、死んで何處に往く先きが分らない、ちつとも分らん、死んだ迄で自分の死んだことも分らん能く人が死んで見れば分らんと云ふことを云ふが死んで分りさうもない、焚かれても分らん埋められても分らん、さうであるから死んでからのとは兎ても分らん、来た所が全體分らん分らんながらも五十年の間生きて居る中は何をして居る食つて着て寝て起きる丈でございませう、其外に何か仕事があるか、子を拵える仕事がある、其外に食ふ物を澤山持つて上等の着物を着ることを上手に遣る奴を利巧と云ふ下手な奴を馬鹿と云ふ、骨を折つて取れない者は運が悪いと云ふ、其食べて着るのは何の爲にする、生きて居るから食はにやならむ、又着にやならむ若し食はずに生きて居れば食はずも宜い、食ふものが目的ぢやない、若るのが目的ぢやない、生きて居るのが目的、死ぬ迄生きて居るより外に仕方はない、人間の一身目的は何かと云ふに一生の間死ぬのを待つより仕方はない、食て着る又結構な住居をしたいは何の爲かと云ふに生きて居る爲め然れば生きて居るのは何時迄生きて居る、死ぬ迄生きて居る、死ぬば着る物も食べる物も入らない、さうすれば死ぬのを待つ丈でございませう、夫が仕事であれば詰り死ぬのが目的である、死ぬ迄生きて

居るのなれば草木も死ぬ迄生きて居る、草木も同じとてございませう、人は松の木にも及ばないことになる、人間はたつた五十年、其間に親子の争ひ夫婦の喧嘩で、馬鹿騒ぎをして死ぬ迄生きて居る、さうして甘い物を食べたい、美しい着物を着たい、結構な住居をしたいと云ふ奴は上等の「エライ」人間とは云はれない、ねつから價値のないことになつて仕舞いますから、人間の價値を茲で搜して見れば我々互ひはもとくは凡夫ぢやないと云ふことが能く分らにやならん、價値が分つて来れば價値は何處にあるかを知らにやならむ、我々今日は此の如き淺ましい犬猫同様なものと歸めて仕舞うべきか、自分から自分を嫌ふべきものぢやない、人間は萬物の靈長と云ふ、則ち尊いことを知らにやならむ、其尊い人は何處に居る、我々は此の如き淺ましい詰らん者でないのではありません、熱々と考ふれば元より確かな悟りを開いて居る、釋迦如來と寸分も違ひのない、如來様である、自分は其如來と同一であると言ふ得心が出来る時節がなけにやならん、得心の出来た有様を本證と云ふ元より之に違ひがない、今更に茲でさうであるぞと云ふ迄もない我々が忘れて居るのでございませう、法華經の譬喩品にある長者の一人息子が流浪して乞食になり、自分ながら全くの乞食と思ふて居た所が、或時實家の長者の家に立戻つて来て、實に我が家である、我が父である長者は

「オレ」の一人息子で家督相續をすべきものであると云はれて、私は生れ付きの乞食でなかつた長者の一子であつたと氣が付いたと違ひない華嚴經も其通り、佛が曉の明星の昇るを見て宇宙の眞理總ての物の本体となるべき所の誠の姿をあり／＼と御覽なされた時、有情非情同時成道と唱へて不思議なことである世界中を見直せば生きとし生けるもの如來の知恵も徳相も、ちやんと具へて居るけれども如何にせん、自分と自分の妄想煩惱の爲に掩ひ隠くされて現れないのは月が空に澄み亘つて居るが、途中の雲霧の爲に其月が見へない様なものでございます、途中の煩惱妄念の雲霧を拂つてから月が出たぢやない月は元より澄み亘つて居る、我々も生れながらに心の中に眞如の月が澄み亘つて居るが、其光りを顯すことが出来ない、一番心を轉じて見れば成程我々は元より長者の一子に違ひない、此家の家督相續をすべき者であつた、生れながら天然自然の佛であつた、迷はない身分であつたと云ふことが心の中にずつと得心が入つたことがあつて夫から再び跡戻りをする事がなくさいすれば宜い、其處に往かせやうと云ふ爲に佛は御説きなされたのです、外の例を以て来れば分ります、外の例は眞宗が茲に往けば一番に能くぎり／＼迄論じ詰めてある、本願寺の御開山が云はれたことが宜い、我々は煩惱場裏の淺間しい凡夫である、其事が得心が入つて見ればど

うして見ても成佛往生が出来さうもない、どうなるかと云ふに、地獄より外に往場はない如何にも淺間しい身分であると云ふとが能く得心が入つた其得心が入つた場合を指して本願と云ふ、曹洞宗は懺悔滅罪と云ふ、是迄惡かつたと自分の心の中に一念發起する所に、ある時に自分と自分の罪過が自ら滅へるぞと云ふのか、懺悔滅罪でございます、眞宗の方では自分の信心と自分の機根とが兎ても應じない、地獄より外に往き場がないと云ふ得心が入つた時に諦めが付く、其時阿彌陀如來の本願に違がる例令は船と陸を往く様なもので、存覺上人が歩船鈔と云ふ本を書いたが自分の力で歩いて往けるならば、面白くなる京都に往くにしても、東海道を下るに路費も澤山持つて居り足も達者であれば伊勢參宮もし、近江八景も見物して往ふものなれば面白いけれども、兎ても小遣もない足も達者でないなれば何とも仕方はないから夫ぢや歩いてはど

うも京都に往くことけ出来ない、漕車とか馬車に乗つて往くより仕方はない、或は船に乗つて往かふと思ふ處にお救船が出て夫て諦めが付いて、此船に乗れば世話なしに往ける、其時は自分の機根で「おれ」の足で往かうと云ふことは奇麗に乗りにやならん、片足は船に頼るが又片足は陸を往つて見様かと云ふ夫ては兎ても駄目でございませ、兩天秤に懸けて遣ふことは出来ない、夫はどうでも諦めにやならん、法然上人の

話に可笑な坊さんがあつて浄土と眞言と兩天秤を懸け持と云ふて、死んで極樂に往く時臨終の目を眠る時に阿彌陀の浄土に往生をすることを承つて居る死際である生きて居る間は、さて眞言の方ではお加持があつて夫を唱へて居れば生きて居る間は七難即滅で大變現在に利益がある、往生の未來のことは臨終の際に一へん遣つ付けりや宜いと云ふ考である、即ち念佛は死際に極めて於きまたした、さうして尊勝陀羅尼を繰返して讀て居つた、其人が或る山路を通ふると一本の橋がある、其一本橋を渡ると云ふに「ハット」引つ繰り返つて落ちて仕舞つた、一返臨終には念佛を唱へ様と思つて居つたが出来なかつたと云ふ兩天秤だから往かない、片足陸に於いて片足船に置くことは出来ない、己れので往かんものは能く自分を諦めた時は船頭に身を任せにやならんと云ふ心を起さにやならん、船頭を疑つて居れば駄目である、此時は一心に信ずる念がなけにやならん、一念歸命の信心、此時はどうする船頭任せにして「オレ」と云ふことはない「オレ」と云ふ心は動しもない、向ふに任せる夫は何である阿彌陀如來に頼り付いたのであります、「オレ」と云ふことはない「オレ」が全體ない、若しある間は船に乗ることは出来ない「オレ」がと云ふ心を捨てにやならん、「オレ」がと云ふこと

があれば阿彌陀の本願を信ずることは出来ない、「オレ」がと云ふから雲霧の爲めに、眞如の月が蔽れて居る立派なる眞如の月を之れが爲に蔽隠す故に其「オレ」がと云ふ心を取捨てた時、自分の儘月々儘自分と本を悟る本願の通り聞分けて信の一念の上に見れるのでございます、之れが眞宗の側であります、曹洞宗はどう往く阿彌陀如來の本願を信ずるとは違ふ事柄は同じでございます、眞宗には本願と云ひ、佛願と云ふ、曹洞宗は佛戒と云ふ、戒は何かと云ふにお掟の義であります、規則のことになる、三世の諸佛方が護り保たれた所のお定がある、總ての佛か護りなされお示し下された御規則がある、之を名付けて佛戒と云ふ、眞宗の方で阿彌陀如來のお立てなされる願て佛願と云ふ、願は願ふと云ふ字が書いてある、是非斯うしたいと云ふ心にお誓ひを立てるのが佛願であります、誓願である、誓は「チカイ」と云ふ字でございます、曹洞宗は毘盧舍那如來のお定其儘を釋迦如來がお説なされたから、其佛戒を説いた時は釋迦牟尼佛とは云はない、「我今盧舍那方に蓮華臺に坐す周布せる千華上に復千の釋迦を現す」と梵網經の始めにございます、其講釋をすれば宜いが六ヶしい、夫は役いてお譲りなされる所の御規則戒法、夫を釋迦牟尼佛が迦葉尊者にお授けなされ、迦葉が阿難尊者に授け、阿難が商那和修尊者に授け、段々傳つて二十八代迄授かり傳つて來た支

那の高祖に達磨大師があつて夫から二十二代も傳つて來天童山の如淨禪師、其の方より曹洞宗の越前永平寺の承陽大師が、支那の五十一代の佛心を傳へて、日本へ歸りになりました、直々相承して其戒法を皆さんが受けるのでございます、授戒入位をした時には釋迦牟尼佛になる三千年の昔時と今日と差別のない、戒法を我々も互が受けました時、三世の諸佛の仲間入りをした、其時分になれば此儘直ぐに佛になつたのでございます、故に「衆生佛戒を受ければ即ち諸佛の位に入り位大覺に同ふし了る」と戒師様から證明を受ける、其所で始めて我々が佛の御規則を謹りませうと云ふ約束をしたから佛の仲間に入つたのでございます、車夫は車夫の仲間の約束がある、酒屋は酒屋の約束がある、皆其の仲間の守るべき規則がある、佛は佛同志の約束がある、佛同志の約束を確かに守る其時は仲間入りをしたのであるから、凡夫ぢやない、夫から先きする事なす事、皆な何事も直様佛の行ひ、朝な夕な親子兄弟夫婦の間に於ける行ひも、百性のすることなす事も、町人のする仕事も、其儘佛の仕事にならにやならん、自分が佛の仲間入をしたからする事なす事が佛にならにやならん、佛になつたからと云ふて、別にするとなす事が遠ふ譯てはない、昨日迄は「オレ」がと云ふ自分の欲であつたが、今日は己れかと云ふ自分の仕事でない、佛の仕事をする夫が直に衆生濟度

てでございます、己れ一人の利益ぢやない己れの欲ではない世の中の多くの人を安心快樂になさせたいものだと云ふ心の上より道るのでございます昨日迄も飯は三杯喫つたが授戒入位をして佛の境界になつた今日も矢張り同じこととて少しも變りはない、昨日の通り飯も食はにやならん着にやならん己れ一人の爲でない佛祖の御用を勤め世の中の大勢のお世話をせにやならん、君に忠義を盡さにやならん、親には孝行を盡さにやならん、又自分の妻や兒を養ふて往かにやならんと云ふのが、自分の五尺の體でございませう、之を破れば君に不忠、親には不孝、夫に任へる道でない、腹が減つてもならん風一つ引いても親に心配を掛けることになる斯ふ云ふ意味合で往く、妙しも昨日と違ひない、昨日は己れ一人の爲であつたが今日は一切衆生を濟度の爲である、之れが本證で妙修と云ふことは修行のことになる、其修行と云ふとは仕事をすることをするものは何か、夫から後に目的がある、然るに今のはさうぢやない妙修は本證の悟りの現れて仕舞うた上より起る、修行則ち仕事でございます、何故に妙の字が付けてある、夫は何共云ふべからざる面白い云ひ様のない仕事になる故に妙修と云ふ、妙修と云ふことを實行するに就ては本證が始めて發願利生、行持報恩と云ふ二ヶ條が現れる、前に懺悔滅罪、授戒入位後に妙修が現れる爲に發願利生行持報恩と云ふ、四ヶ條が現れて

本證妙修の二つに收まる本證の外に妙修なく、妙修の外に本證はない、其時になれば衆生済度の外に仕事はない、是丈が曹洞宗に於いての安心起行の大體でございます、之を精しくお話すれば四ヶ條に分けてお話せにやならん夫は孰れ後日申上ることに致します、

御教諭説教

第一席 (宗教の必要)

謹んで御教諭を明讀いたします、
惟ふに夫れ、我が教主釋迦牟尼佛の、始めて無上正覺を成したまへるに廣りては、先づ波羅提木又を結して、父母師僧三寶に孝順せしめ、孝順は至道の法なり、孝を名けて戒と爲すとのたまひ、又其の全般涅槃に入りたまふに臨みては、汝等が滅後に於て、當に波羅提木又を尊重し珍敬すべし、是れ則ち汝等が大師なりとのたまひ、謂ゆる波羅提木又とは、今我が直指の宗乘に於て、佛祖正傳の佛戒と稱するもの世出世の一切の眞理、一切の道德、皆此の一法に包容せざるはなし、されば如来一代の垂教甚だ多端にして、諸宗諸祖の傳唱する所、また區々なりと雖も、普ねく一切衆生をして、速かに成佛得道せしむる無上法門は、只此の佛々祖々の面授相承したまへと授戒の一法に過ぎたるはなし、我等たましく生を人界に受け、まのあた

り佛世に遭ひたてまつらざるの憾なきにあらざと雖も、幸ひに滅後の大師に遭ひたてまつりて親しく單傳の戒脈に與かることを得たる、何の喜びか復た之に過ぎんや、されば未だ受戒せざる者は速かに至心懺悔の一念に無量劫來の罪障を消滅し、疾く即入佛位の大戒を受けたてまつりて、真に諸佛の嫡子たらんことを願ふべし、既に受戒したてまつりぬれば、其位大覺に同じふし己るを以て、貴賤貧富を問はず、智愚老少を擇ぶことなく心に思ふ所に利生の發願となり、身に行ふ所は都べて報恩の行持となるなり、謂ゆる利生の發願とは、諸の人類は更にも言はず、凡そ生きとし生けるものを見るは皆其の苦惱をのぞき之を安樂ならしめんと心に願ふなり、謂ゆる報恩の行持とは、凡そ日夜の行住坐臥云爲動作する所、皆以て君父友等の洪恩に報酬したてまつらんが爲めにするなり、苟くも是の如くにして世に處し生を度らんには、入ては家庭に孝貞敦厚の美風あり、出ては國家に忠誠に、社會に信實なることを得て、戒往ますく生々世々に庶轉増長して願行いよく在々處々に充滿彌綸するに故に現當二世の安穩快樂、何事か復た之に如くものあらんや、抑も今是の如く最尊無上なる正法に遭ひたてまつると、是れ偏へに高祖承陽大師および太祖弘徳圓明國師の傳承弘通したまへる恩徳と、歷朝敎聖なる 天皇陛下の外護深厚なる

仁澤とに由るものなれば、別して一系萬世の皇運を天壤無究に扶翼したてまつり、又兩祖の遺法ますく光輝を宇内に發物せんことを冀がふべきものなり。これは、此の度、我が兩大本山の貫主勅特賜性海慈船禪師、勅特賜直心淨國禪師の兩親下より御下し遊ばした御教諭で、われく曹洞宗信者たる者の心得ねばならぬ安心起行の大方針を示されたのであります、元來我が曹洞宗と申すは、十三宗四十幾派とありまする佛教の中でも、釋迦如來から代々傳はつた正しい宗旨でありますから如來の正宗、佛法の總府と申して佛教中の總本家ぢやといはれてゐるのであります、從來あまり布教をいたしませんで、葬祭の一方にばかり傾いてゐたのと、一つは其教義が高尙で普通の人には解し難いものでありますから學問のある人々には非常に喜ばれてをりましたが、通俗の人には全くわからぬものとしてをられたので、實際は曹洞宗の道中でありながら曹洞といふのは如何なる宗旨であるや知る知らぬ人も少くないやうてござりまする、併しこれは曹洞宗だけではござりませぬ、佛教の行き届いてをりまする眞宗や日蓮宗の外はいづれの宗旨もこのやうなもので、甚しきは佛教といふものは單に死人を取扱ふものゝやうに思ひ、僧侶といへば御經を讀む人のことだと考へ終に佛教といふものは此世の中には無用のものぢやなそといふ人がないではない、

これは其末を見て其本を知らぬので、たゞ佛法の形式を見て其根柢を忘れてゐるので、
 丁度、昔話に蠅蠅のない國の人が蠅蠅を見て、これは蒲鋒やはんべんのやうな肴であ
 らうといふたり、イヤ大根や蕪のやうな野菜ぢやといふて闇を照らすの光明であると
 いふことを知らなかつたやうなものである。佛教といふものは決して死んだ人と
 取扱ふばかりのものではない、われ／＼の一生を安樂に送らすには是非必要なもので、
 これがなければ如何なる人でも安樂に送することは出来ぬのである、なぜかといふにこ
 のわれ／＼も互の住んでゐる世界には樂みがあれば苦があり、喜びがあれば悲みがあ
 り、生れたと思へば死なねばならぬ、この生死の道理を明らめて、苦樂の爲めに心を
 騒がされず、喜びや悲みの爲めに心をまどはされぬやうに、安らげく世を渡るやうに
 教へ導くのが此佛法であります、これがあつてこそ、われ／＼も互は安らげく世を渡
 ることが出来るのですが、若し心に此落着がなかつたならば、どうでござりませう、
 死ぬるといふことを屈托してごらんさい外を一つ歩くにしてもどこから屋根の瓦が
 落ちてこまゐるものでもなく、何時地震が揺らないものでもない、起つても、居ても心
 配だらけて少しも心にちかつかね、花が咲いたといふて喜べば、散つたといふて悲ま
 ねばならず、それ苦、それ樂、それ喜びそれ悲みに心は狂ふ駒の如く飛びまわらねば

ならぬ、まことにわれ／＼も互の心はその通り、風のまに／＼飛びゆく紙片や、思ふ
 がまゝに匆ね廻る駒のやうなものであります、されば、昔の人の歌にも

うつりゆく、初め終を、白雲の、あやしきものは、心なりけり

て、いづれへでも参ります、その紙片のやうな心をヒシと大磐石につけて動かぬやう
 にするのが佛法で、これあつてこそ、初めて安樂に、平和に此世を送ることが出来る
 のです、これは佛法には限りませぬ、宗教といふ宗教は皆なこれが目的で、シライ
 マッヘルといふ西洋の學者は宗教とは無限に依頼の念なりといふてをります、抑もわ
 れ／＼も互の見てをることには限りがあり、われ／＼も互の聞くところにも限りが
 あります、此限りあるわれ／＼が無限り限りのない大磐石に心のおちつきをつけるの
 で、人は一日も此宗教といふものがなくては生活してをることの出来るものではあり
 ませぬ、成る程食物さへあれば身體は養ふことは出来ませうが、心の養ひは如何にし
 てするのでござりませう、たゞ身體の養ひたる食物だけでよいといふなれば、人はど
 うして萬物の靈長といふことが出来ませう、空飛ぶ鳥も野を驅る獸もこの食物はあり
 ます、飽食煖衣逸居して教なきは禽獸に近して、食物ばかりで教がなければ、人の人
 たる道も知らず、親の大切なども主人の大事なども知らず、鳥や獸と何の異るとこ

ろがござりませう、今日は開明の世の中で、ソナナことはござりませぬが、昔、水戸の御領分に一人の百姓がをりました、其者の父といふのが大の酒飲で、飲むと亂暴を働いて近所に迷惑をかけることが少くござりませぬ、子はこれを心配してをりました、酒はなか／＼止まず、亂暴はます／＼甚しくなります、近所からはいろ／＼小首をいはれるし大に困りまして終に斧を以て其親を殺しました、それは大變なことをしたと近隣のものが申しますると、ナアニ他人様の害をするから私が殺したのぢや、私しの親を私が殺したからとて何が悪いと、平氣でをりまするが、何にいたせ大罪人てござりまするから早速召捕りまして奉行所へ連れて参りますると、私は何にも悪いことをしたのでないのにソナナところへ連れて來られる譯はない、早く歸らせて下さい、と申しまするから、奉行が歸らすことは出來ぬ、貴様は親殺の大罪人ぢやと云ひますると、「それは他人様の親を殺せば悪うござりませうが、私の親を私が殺したのが何故悪い、「イヤ如何様に申しても歸すことは出來ぬ、「私が歸らねば爺の葬式を出すことが出來ぬ早く歸らせてくれよと申しまするで、奉行も全く其の行ひの悪いといふことを知らぬのであるから不憫に思ひまして、そのことを領主徳川光圀卿に申上げました、光圀卿も御持餘しになつて、御自身の御歸依になつてをる曹洞宗の東阜心越禪師に御

相談あらせられると、禪師がそれは學校の門番になさるがよいとの事でありましたから、假りに罪を免して學校の門番にさせてをさました、其頃の學校でござりまするからは、讀む書物は皆な忠孝仁義の書で、四書や五經でござりまするで、門前の子供、習はぬ經を讀むの聲で、門番をしてをりまする中に、いつとはなく忠孝の道を聞き、さては我が犯せし罪は大罪なりしと氣が付きました、奉行所へ御仕置を願ひ出ましたと、罪一等を減じて遠島にせられたといふことであります、教なければ禽獸に近して、此世は教かなくつたか爲め其大罪たるとも知らなくつたのであります、これらの話から考へましても人生に教といふものゝ必要なことはおはかりになります、かく申しまするとナニそれは宗教といふものでなくとも、學問さへ進めばよいといふ御方があるかも知れませぬ、併しこゝで考へねばならぬのは學問の力でこの世の中のこと知ることが出来るか、どうかといふことです、成る程此世の中の道理を知るには學問の力には相違ござりませぬが學問といふものは、何から成立つてをるかといへば、人間の知識が基礎となつてをります、此人間の知識といふものは、どうして得たのであるかといへば、皆われ／＼お互が見たり聞たりしたことが基礎となつてをるのであります、ソナデわれ／＼お互の見たり聞たりすることには限りがあります、如

何に遠い所が見えるといふても、如何に遠い所のことか聞えるといふても、それには限りがあります、肉眼では一町二町の先きも見えぬが、望遠鏡を以てすれば数百里の先きが見え、この耳では一町二町先きの聲も聞えぬが、電話ではよく数百里の遠い所のことか聞こえるにした所が、それには限りがあります、即ちわれ／＼互の見聞は限りのあるものです、限りのある見聞で得た知識で済むものこれに限りがないとは云はれませぬ、この限りのある知識が基礎となつた學問で済むもの、どうして限りがないと云はれませう、されば此限りのある學問では到底限りのない宇宙全体的のことを知り得るとは申せませぬ、知り得ることが出来ぬとすればこゝに疑ひが出来て、疑ひ疑ふて見れば人間の一生も頗る不安心なものとなります、これに心の落着きをつけるのが宗教でありますから、これかなくては到底教の根本の立つものではありませぬ、この教の根本を立て、世の中の道理を説き示し、人の人たる道を教へられたのが釋迦牟尼佛で、その法を正しく傳へたのが我が曹洞宗であるに、それを知らずにたゞなむからたんのうを唱へるから禪宗ぢや位のこととて、此無上の有難い教を受くる身でありながら知らずに一生を送るものが少くないのを慨かせられて兩禪師か御教示し下されたのが、此御教諭で、僅かに一千文字に足るが足らぬの御教諭ぢやが、此中には云はれぬ有難

いことをお説きなされてあるのであるから心を凝めて御聞下されねばならぬのであります、……下座、

第二席 (曹洞宗の特色)

(御教諭全文明讀)

サテ引續いて此御教諭に就て御話しをいたすのであるが、抑もわれ／＼互が信仰いたしてをる佛教と申すのは、今より三千年の昔、中印度の迦毘羅國と申す大國の國王ストダナ(淨飯と稱す)と申す御方の御子に生れさせられた悉達太子といふ方が、金枝玉葉の御身をも打忘れ一切衆生を憐れと思し召したまひて、王位をも御捨てなされ花の如き御妃にも、愛らしき御子にも別れられて其出家遊ばされ、難行苦行をつませられて最後には端座六年の御修行とて、菩提樹の下にデット御座りなされて、もろもろの妄想邪念の起るのを御拂ひなされ、丁度六年目の十二月八日の晩に豁然として御悟りを開かせられ、それから四十九年の其間、横説堅説にてさまざまに法門を御説き下され、醫師が病に應じて薬を與ふるか如く、其の人々の機根に随ふていろ／＼の御説法がありました、靈山會上で御説法のありました時、釋尊はたゞ花を拈してござ

つて一語をも御説きなされなかつてことがある、其時に八萬の大宮とへ多くの御弟子達が聴いてをつたが、それは何のことであるやら少しもわからぬ、其中に第一番の御弟子である摩訶迦葉といふのが、たゞ獨りニツコリ微笑した、それを釋迦牟尼佛御覽になつて、我れに正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙の法門あり、汝迦葉に付属すと仰せられた、これは釋迦牟尼如來が悟を開かれた佛法の極意を今、迦葉にゆづるぞとの御言であります、これが即ち我が宗の以心傳心で、心を以て心に傳へるので有語や文字によるのではない、心から心に傳へるのであります、凡そ眞理といふものは口で傳へやうとて傳へられるものでない、語ていひ聞かそうとてわかるものでない、火か燠いといふも水が冷たいといふも、燠いとはどんなことか、未だ火の燠いのを知らぬものは、如何に説明してもわからぬ、マア觸つて見ろといふより外はない、觸つて見て成程これが燠いのかと自得するより仕方がないのである、水の冷たいのも其通り、口では云へぬが、一旦これを知つたものには直にわかる、それと同じこととて佛法の極意は云はうとしても云はれぬが、その境涯に到つたものには直にわかるのである、これに就て一つの話がある、昔し伊豫の宇和島の藩に弓の名人があつた、其人の弟子に充分に出来る人があつたが、マダ一息といふ所がどうも工合がわるい、ソコマ許さ

ず、これは自得さすより外はないと、其人が或る雪の朝に弟子を招いて、色々弓の話をしてをつたが、其時庭前の竹が雪の重りて曲つてをつたが、雪が解けてピチンと剣ねかへつた、弟子は其竹の剣ねかへるのを見てハタと横手を打て弓の妙所を悟たといふこととて劍術にしても柔術にしても馬術にしても文章を書くにも詩を作るにも職人が其職をするにも名人上手と云はれるものが皆なこの妙所を悟らねばならぬのであるこれは心を以て心に傳へるより外はない、今釋迦牟尼佛は心を以て心に傳へられ、迦葉尊者はこれを受けられたので、迦葉はこれを阿難陀に阿難陀はこれを商那和修にといふやうに一人の師匠より一人の弟子に一杯の水を器から器に移すやうに傳へ給へと廿八代目が達摩大師、この御方が印度から支那に渡られて初めて佛法の極意を此國に傳へられた、此達摩大師から五代目が弘忍といふので此御方の御弟子にエライのが二人あつて一人を神秀といひ一人を惠能といふたが、見識は一段惠能の方が高い、そこで此惠能といふ方に極意は傳へられ、曹溪といふ所にござつた、此御方から五代目、達摩大師から十一代目が洞山の悟本大師で、それから十二代目が天台如淨禪師で、此御方の法を傳へられたのが、我が大日本に初めて此法を傳へられた承陽大師道元大和尚である、それから我が日本にも此佛法の極意が行けれ、大師の次ぎが孤雲懷奘、その

次ぎが徹通義介、その次ぎが大に此法を弘通せられた大祖弘徳圓明國師竺山大和尚で、それから今日までマツト傳はつて参いたのが此曹洞宗であります、かく申すと、曹洞宗といふのはなかくむづかしい宗旨のやうに御考へになり、到底われ／＼凡俗の身では解し兼ねると御思ひになるかも知れぬが、決してさうではない、成る程、佛々祖々相傳へて参いた此法を嗣法相續といふことは容易なことではないが、本宗の相續には二通りあつて、一つを嗣法相續といひ、今一つを傳戒相承といひます、此嗣法相續の方は釋迦牟尼佛より迦葉、迦葉より阿難と嗣いできたので、これは出家だけの相續で、在家衆はあづかることの出来ぬ、むづかしいこととありますが、傳戒相承といふ方は、出家在家の兩方に通じ誰れでも承けることが出来、其功德によつて直に佛様や祖師方と同じ位に入ることの出来る容易なこととあります、かく云ふと何んだか都合のよいことをいふやうであるが、物に喩へて申させうならば、一本のマツチを使ふにいたしましても、此のマツチは如何にして造るのであるといふことは、マツチ製造の専門家でなければわからぬし、またこれは其職のものから其職のものに教へ傳へるのであります、これを磨れば火が出るといふことは誰にでも出来る容易な仕事であります、傳戒相承はこの通りでかうやつて磨れと教へられた通りに守つてゆけば、何のむづか

しいことはない如何にしてマツチを製造するかを知つたものでも知らぬものでも同じく出来る、今こゝに御教證下されるのは此傳戒相承の方で、出家在家誰にも通じた容易なこととて、釋迦牟尼佛が衆生化導の御本懐も亦こゝにあるのであります、されば、御教證の初めにも、

惟ふに夫れ、我が教主釋迦牟尼佛の、初めて無上正覺を成したまへるに磨りては、先づ波羅提木叉を結して父母師僧三寶に孝順せしめ、孝順は至道の法なり、孝を名けて戒と爲すとのたまひ、又其の大概涅槃に入りたまふに臨みしは汝等我が滅後に於て當に波羅提木叉を尊重し珍敬すべし、是れ則ち汝等が大師なりとのたまへり、謂ゆる波羅提木叉とは、今我が直指の宗乘に於て佛祖正傳の佛戒と稱するもの世出世の一切の眞理、一切の道往、皆此の一法に包含せざるはなし

と仰せられてある、これは釋迦牟尼佛が無上正覺とて此上もない悟りを御開きなされた時にも、御かくれなさる時にも此戒法のことを仰せられて我が滅後もこの戒法を大切にせよこれこそ汝等が師匠であるぞと教へられたといふことを御説き示しになつたのである、波羅提木叉とあるのは天竺の語で支那に譯して別解脱といふことで、これは此佛祖の大戒を一つ持ては一つの解脱を得、各々の戒法に就て各の解脱を得るから

別解脱にいふので、解脱といふのは煩惱の繫縛を離れて佛と同じやうになることをいふたのであります、これらのこともくわしく申せばいろ／＼むつかしい話になるで、今は畧しておくこととする、サテ此大戒の中には世間出世間に通ずる一切の真理、一切の道徳皆なこの中に含まれてをるのであるからこれが我が宗安心の根本となつてをるのである、されば御教諭の次ぎの文句には、

されば如來一代の垂教甚だ多端にして諸宗諸祖の傳唱する所、また區々なりと雖も、普ねく一切衆生をして速かに成佛得道せしむるの無上法門は只此の佛々祖々面授相承したまへる授戒の一法に過ぎたるはなし、

と仰せられて、御釋迦様の御説きなされた御經もいろ／＼あり、各宗の祖師方の唱へられるところもまち／＼ちやが、普ねく一切の衆生をして佛とならしむる無上の法門はこの外にはないとのとである、御存じの通り佛教にはいろ／＼な宗旨があり、佛の御説きなされた法門も八萬四千、御經の數も五千餘卷であるが、其八萬四千の法門、五千餘卷の經卷は皆な其機根／＼に應じて説かれたので、風邪のものにはアンチヘブリン(かぜぐすり)と興へたとか、瘧疾のものにはキナエ(瘧の藥)と興へるとか、其病々に應じての藥であるが、普ねく一切衆生に通ずる萬病に功能のあるのはこの授戒の外

はない、そこで天台宗でも眞言宗でも淨土宗でも皆なこの戒法といふことを云はぬのはない、諸宗無得道を唱へる日蓮宗でも三秘の中には本門の戒壇といふてこの戒のことを説てをるし、たゞ南無阿彌陀佛といふてをる眞宗でも、三歸だけは受けさせる、さればいつれの宗祖も無戒の成佛が出来ると説かれたのは一つもない、たゞ受戒のみで成佛が決定すると説くか、外に色々の儀式が要るかだけの相違である、今ま我が曹洞宗は此佛々祖々面授相承したまへる受戒の一法によつて普ねく一切の衆生を通じて、速に成佛せしむる最も簡易なる宗旨で、誰れでも彼れでもたゞこの受戒の一法によつて佛と同じ位に入ることが出来るのである、この受戒こそ佛滅後の大師として頼むべきものである、されば兩禪師は御教諭に於てこれを勧められて、

我等たま／＼生を人界に受け、まのあたり佛世に遭ひたてまづらざるの憾なきにあらずと雖も、幸ひに滅後の大師に遭ひたてまつりて、親しく單傳の戒臘に與かることを得たる、何の喜びか復たこれに過ぎんや

と仰せられた、これけわれ／＼お互は末世に生れて目前に釋迦牟尼佛の御説法を聞くことの出来なかつたのは遺憾であるが、幸ひに釋迦牟尼佛入滅の後は、大師と仰げと仰せられた戒法の傳はつてをるのであるからたゞこれにさへすれば、われ／＼は直に

佛と同じ位に入ることには出来るのである、マツチの製法はよし知らずとも遣しおかれし仕方によれ何時でも火は出るのである何んと有難い宗旨ではないか、これは即ち我が曹洞宗の特色である、さればそれほど有難い戒法は如何にして受けることが出来るのであるか抑も其戒法とは如何なるものであるかといふことを御話し申さねば、充分に御會得が参るまいが、だいぶん話がむづがしくなつて御退屈の向もあるやうであるから、次ぎの席で御話し申すことしやう……

第三席 (曹洞宗の信仰)

(御教證全文朗讀)

鏡といふものは明皎々たる光りがあるから鏡の用をするのぢやが、これが曇りに曇つて何一つ映らぬやうになれば瓦や礫と同じ何の役にも立つものではない、何の役にも立つものではないが、またこれを磨き磨けばもとの光りが出て立派に鏡の用を爲すこととて出来る、それを曇つたからこれは到底役には立たぬと捨てしまへば、何時まで立つても明皎々たる光りは出ず、終に錆に錆に錆て本の姿がないやうになつてしまつてある、今われ／＼互の心もそのやうなもので、我も佛も變りはない明皎々たる佛性の

光を以てをるのであるが、迷ひに迷ひ惑ひに惑ふて其光は曇つてしまひ、本の姿がないやうになつてをるのである、されば佛も、汝は是れ當成の佛、吾は已成の佛にて、御釋迦様などは己に佛に成られた御方で、われ／＼衆生はこれから佛になるもので今は其姿が異つてをるが、もと／＼同じ位に入るべきもので、ただ明皎々たる鏡と、錆びに錆びた瓦礫同様の鏡との違ひで、如何に錆びに錆びて瓦礫同様になつてをるからとて磨けば明皎々たる光の出ぬのではない、一切衆生悉有佛性で、誰れも彼れも佛となることか出来るのぢや、佛ぢやとて木佛金佛石佛と思ふては違ひますぞ、佛は梵語で佛陀耶といふので支那に譯して覺者といひます、覺はサトルで夢のさめたる姿ぢや、これまで瓦礫同様に思ふてをつたが、磨けば明皎々たる鏡となることが出来るのぢやと思へばこれまで打捨てて置たことが口惜しくなる、我々も迷ひに迷ふた凡夫ぢやと思ふて疎末にしておつたがこれが釋迦牟尼如來も同等の位に入ることが出来るのであると思へば、無暗に打捨てて置くことは出来ぬ、或る人の句に「夢さめて見れば口惜し夢小便」あゝかう疎末にするのではなかつたと氣が付く、己に氣が付けばその穢れたる塵垢を洗ひ去つて清らかにせねばならぬ、これを懺悔といふのぢや、懺悔といふのはあゝ悪かつたと思ふ心の起るのをいふので、あゝ悪かつたと思ふ心が起ると共に、

これからは悪いことをせまいといふ心が起らねばならぬ、今一つ嘘へて見れば、家重代の寶物がある、それを寶物と思はなかつたから臺所の棚の隅にはうり上げて置たが、さてこれが家重代の寶物だと知つたならば、その塵垢を奇麗に洗つて錦の袋にでも入れて大切にしまつて二度塵垢の染まぬやうにせねばならぬやうなものである、われわれも佛と同体だと知らなかつたから疎末にしてをつたが佛と同体だと知れば、これまでしてをつたことは夢のやうに覺めて、これから佛と同じ行ひをしやうといふ心が起らねばならぬ、これが即ち戒身發得で、こゝで受戒のすがたとなるのであります、このことを御教諭の内に、

さればまだ受戒せざるものは速かに至心懺悔の一念に無量劫來の罪障を消滅し、疾く連入佛位の大戒を受けたてまつりて、眞に諸佛の嫡子たらんことを願ふべし、と仰せられて、未だ此受戒をせぬものは、心から悪かつたと悔い改めて、無量劫とて限りない昔より積み重ねて來た煩悩の塵垢煩惱を拭去りて佛と同體の位に入らねばならぬとのことでありませぬ、華嚴經にも衆罪は草露の如く惠日よくこれを除くとあつておゝ悪かつたと悔い改むる心の起りましたときは、もろくの罪は草の葉に置く露の朝日に向つて消え去るが如く、奇麗に除かるるのであります、已に錆びに錆びて來

た、心の鏡、この錆びを拭ひ去りますれば佛と同體の明皎々たる鏡であります、この磨きやうが悪ければ鏡に傷がつくばかりでまことの光は出ませぬ、ソコ我が宗には此懺悔と受戒に就てもそれく儀式かあるのでござりまするが、それは他日御話し申すとして、今はたゞこのア、悪かつたと悔い改める懺悔とさてこれからは悪いことをすまいと誓ふ受戒とによつて佛と同體になることが出来るのであると心得下されて差支はない、されば釋迦牟尼佛は梵網經の中にも「衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る、位大覺に同ふし已に、眞に是れ諸佛の子なり」と説せられて、この佛戒を受けて悪いといふ悪いことは誓てせまい、といふ心が起ると共に佛同體の位に入るのぢや、已に佛同體の位に入れば佛と同じ御心になり、佛と同じ行ひをしやうといふ心が起り、また實際かくせねばならぬのである、それを御教諭の中に、

既に受戒したてまつりぬれば、其位大覺に同しふしたるを以て貴賤貧富を問はず、智愚老少を擇ぶことなく、心に思ふ所は利生の發願となり、身に行ふ所は都べて報恩の行持となるなり、

と仰せられ、更らに其の利生の發願といふことを説いて、

謂ゆる利生の發願とは、諸の人類は更にも言はず、凡そ生きとし生けるものを見て

は、皆其の苦惱を除きこれを安樂ならしめんと心に願ふなりとあり、報恩の行持を説いては、

謂ゆる報恩の行持とは、凡そ日夜の行住座臥云爲動作する所、皆以て君父師友等の洪恩に報謝したてまつらんとするなり

と云はれてある、これはくどくしく御話するにも及ばぬことで、利生の發願といふのは凡そ生きとし生けるものを見ては、其苦を除き樂を與へてやらうと心に願ふので、これが大乘佛教の特色であります、自分ばかりの利益を思ふて、自分さへよければ他人はどうしてもよいなどといふ利己主義は、我が宗の尤も厭み嫌ふところてあります、佛様は三界の衆生を皆な我が子ぞと思し召してこれを助け救はうとの御願ひて之を御説き下されたのであります、今その佛と同じ位に入つたのでありますから、佛同様に人の爲め世の中の爲めを思ふといふ心を起さねばなりません、人をのみわたしくてものが身はさしにのぼらぬ渡守かな

て、さて自分は佛の彼の岸に上らずとも、人を渡してやらうといふのが、あれく互の心掛けでなければなりません、それに今の世の中の連中は、自分の爲めばかりを思ふて人のことをかまはず、自分さへ樂になれば、少々位は他人に迷惑をかけてもよ

いなぞといふ考の人ばかり多いのは慨はしい次第でございます、世の中は平等一枚で、決して他人に迷惑をかけて自分だけの利益を得ることの出来るものではござりませぬ、自分に利益を得やうとするには、先づ他人に迷惑をかけぬやうにせねばなりません、商賣一つするにも、自分さへ利益があればよいといふので、悪い品物を高く賣れば、目の前では利益になるやうぢやが、終には買ひに来るものがなくなるのと同じ道理で、何事をするにつけても人の爲めと思へば、それがそのまま佛の御心であります、されば御經の中にも佛心とは大慈悲心なりとある、慈悲と申すことは拔苦與樂とて、一切衆生の苦を拔き樂を與へるのであります、即ち利生の發願であります、さて又報恩の行持といふのは何事をするにつけても、恩に報ゆるといふことを第一とするので、われく迷ひに迷ふた凡夫、佛の御教に遇ひたればこそ、懺悔受戒して佛と同じ位に入ることが出来たので、これ偏へに佛の御恩であります、此御恩に報ゆるといふのは別なことではない、佛の心を以て佛の行ひをするので、起つにも坐るにも佛作佛行として佛と同じ行ひをして此佛の御恩に報ゆるといふことを一日一時も忘れてはならぬのであります、佛といふて釋迦牟尼佛だけの御恩ではないわれくは此宇宙のすべてに於ていろくの恩を受けてをるのである、赫々と輝く太陽はわれくは光と熱とを施

してくれる、これがなければわれ／＼は死んでしまふのであるし、漏々たる水はわれ／＼に濕ぬひを與へてくれるこれがなければ一日も生きてゐることは出来ぬ、呼吸するには空氣がある、これがなければ死ぬより外はない、其又空氣の中でも、植物は炭酸たんさんを吸ふて酸素さんそを吐き出しわれ／＼は其の酸素を吸ふて炭酸を吐くので、實際生活には一日も植物がなくてはならぬ、こればかりではない、われ／＼が今日枕まくらを高く眠ることの出来て自由と財産と生命とを保護せられて安全に世を渡るのは天皇陛下の御恩であるし、われ／＼に衣食住いしょくじゆの道を教へ、ことに人の人たる道をも示されたのは、師友の恩である、そればかりかは、東西知らぬ我が身を、抱きつ負ひつ養ひ育て下さつたのは親の御恩であり何不自由なく暮らすことの出来るには、米屋呉服屋さま／＼の恩を受けてゐるのでありますから何事をするにも、此恩に報ゆるといふことを忘れてはなりません、此恩を知るといふことが人の人たる道で、これを忘れてしまへば禽獸と同じこととあります、サア此利生發願の心と、報恩行持の行ひとを以て、御教諭の中に

苟も是の如くにして世に處し生を度らんには入ては家庭に孝貞教厚の美風あり、出ては國家に忠誠に、社會に信實なることを得て、戒徳ます／＼生々世々に展轉増

長して、願行いよ／＼在々處々に充滿彌綸するが故に、現當二世の安穩氣樂、何事か復た之に如くものあらんや

と仰せられてある通り、利生發願の心は「おもひやり」となつて父は子を、子は父を、夫は妻を、妻は夫を、兄は弟を、弟は兄をおもひやりて一家に波風なく子は孝となり妻は貞となり、其行ひは報恩を旨として、家庭はいふまでもなく、國家に於ては君恩の萬分の一に報ひんと思ひ、社會に於ては衆生を互の恩に報ひんとし、佛戒の功德こゝに現れて世間に應用して充分なる功を擧げることが出来るのであります、佛法と云へば、何か世間とかけ離れたものゝやうに思ふてゐるのは、未だ眞正の佛法を知らぬので、法華經にも、治生産業皆な是れ實相とあつて、百姓は百姓で田を耕しながら、商人は商人で算盤を手にしながら佛祖正傳の大戒の功德は現はれるのであります、さあかうして世を渡つてゆけば、何の苦もなくまして一生を送ることが出来るのであります、否な言に現在一世に於て安穩であるばかりでなく、當來とてこれから後も安穩で、人生わづか五十年、夢のやうな浮世ですが、佛と同じ位に入り生死の迷ひを離れたのでありますから、この夢もさめて安らげく世に處し生を渡ることが出来る、これ偏に此教法の御かけてあります、ソコデ、

抑も今是の如く最尊無上なる正法に遭ひたてまつれること、是れ偏へに高祖承陽大師および大祖弘徳圓明國師の傳承弘通したまへる恩徳と、歴朝叙聖なる天皇陛下の外護深厚なる仁澤とに由るものなれば、別して一系萬世の皇運を、天壤無窮に扶翼したてまつり、又兩祖の遺法ますく光輝を宇内に發揚せんことを冀がふべき者なり、

とある、まことに其通りて若し此最高無上の正法に遭ふことが出来なかつたならば、われくも互はまとの宗教を知らずに、ホツテントヤブツシユメンといふ野蠻の人民のやうに蛇を祭つたり、猫を祈つたりして居つたかも知れませぬ、よし、それほどでなくともありませぬ天帝などに歸依してをつたかも知れませぬそれがこの正しき法に遭たればこそ、迷ひに迷へる凡夫の此身そのまゝに佛同昧の位に入ることの出来る教に遭ひ、安らげく、世を渡ることが出来るので、これ實に御釋迦様より正しく傳はつたる正法を、高祖承陽大師へ傳へさせられ、大祖弘徳圓明國師が弘通せられたからであります、また一つには我が國の御歴代の天皇様方がこれに御歸依下されたからであります、それでありませぬから、われくは此萬世一系の皇運を天壤無窮に扶翼したてまつらねばなりませぬ、われくは歸依する曹洞宗は御釋迦様より少しのまじり氣

なく嬌々相承した宗旨であり、其受けまする戒法は佛々祖々の正しく傳へられたのであり、其居りまする國は、皇祖皇宗より萬世一系天壤と窮りなく傳はつたる皇室を戴いてをるのであります、何んと幸ひなことではありませぬが、さうでありますから、われくは此法に歸依して此法の如くに行ひ、上、皇運を扶翼し奉り、下、一身の行ひを正して、國の爲め世の爲めに利生の心を以て報恩の行ひをせねばなりませぬ、それを示されたのが此御教諭でありますから苟くも、曹洞宗の信者たる人達は日々拜讀して自ら省みるやうにしてもらいたいものであります、長々と堅くろしい話で、サソ御退屈でござりませう、今日はこれで……

(一般の心得) その説教は簡單に曹洞宗の安心起行を知らしめるのであるから、むづかしく云へば如何程にもむづかしく説け、さて平易に云はうとすれば誤り易いのであるが、講義でないから一字づゝの解釋をするには及ばぬ、大略のところを取て、所々に御教諭の文句を挿みて云へばよい、これでは三席にわけてあるが、一席に話すときには第一席の話をして第三席に重きを置くがよい、第二席だけをするときには、第三席の終りの萬世一系の皇室と佛祖正傳の曹洞宗とか相合することを詳しくいふがよい、又自力の宗旨や他力の宗旨と比較して我が宗がこの二つを兼ねてし

かも超然たるところがあるといふことを説くもよい、總體に於て此説教の材料は多く修證義の説教の方から取るがよろしい、御承知の通り此御教諭文は修證義の大意と見てもよいのであるから修證義各節の説教を御参考下されたい、
(御教諭の文段) 修證義との参考の爲めに御教諭の文段を切つて見れば、左の通りである、

惟ふに夫れ我が教主釋迦牟尼佛の始めて無上正覺を成したまへるに磨りては先づ波羅提木叉を結して、父母師僧三寶に孝順せしめ、孝順は至道の法なり、孝を名けて戒と爲すとのたまひ、(戒法ヲ説カレタルノ始梵網經ニ出ゾ又其の大般涅槃に入りたまふに臨みては、汝等我が滅後に於て當に波羅提木叉を尊重し珍敬すべし、是れ則ち汝等が大師なりとのたまへり(戒法ヲ説カレタルノ終ヲ示シ、佛一代四十九年ノ説法一代始終ヲ通ジテ此事ヲ示サレタルヲ云フ、遺教經ニ出ゾ)以上第一節(即ゆる波羅提木叉とは、今我が直指の宗乘に於て佛祖正位の佛戒と稱するもの世出世の一切の道徳、皆此の一法に包容せざるはなし以上波羅提木叉ヲ説明シテ其功徳ニ及ブ前段ノ註脚)されば如來一代の垂教甚だ多端にして、諸宗諸祖の傳唱する所、また區々なりと雖、普ねく一切衆生をして速かに成佛得道せしむる無上法門は只此の佛々

祖々の面授相承したまへる授戒の一法に過ぎたるはなし(更テニ詳細ニ戒法ノ功徳ヲ説ク普クト速カノ二字字眼ナリ)以上第二節(我等たましく生を人界に受け、まのあたり佛世に遭ひたてまつらざるの憾なきにあらずと雖も、幸ひに滅後の大師に遭ひたてまつりて親しく單傳の戒脈に與かることを得たる何の喜びか復たこれに過ぎんや(戒法ニ遇ヘルヲ喜ズ)以上第三節是レテ第一段トス)第一段ハ戒法ノ尊重ナルコトヲ示ス(即)序か

されば未だ受戒せざるものは速かに至心懺悔の一念に無量劫來の罪障を消滅し(懺悔滅罪ノ大旨ヲ示ス)疾く即入佛位の大戒を受けたてまつりて、真に諸佛の嫡子たらんことを願ふべし(受戒入位ノ大旨ヲ示ス)既に受戒したてまつりぬれば其位大覺に同じふしたるを以て貴賤貧富を問はず、智愚老少を擇ぶことなく(戒徳ノ普ク一切衆生ヲ接スルヲ示ス)心に思ふ所は利生の發願となり、身に行ふ所は都べて報恩の行持となるなり(畧シテ發願利生、行持報恩ヲ明ス、懺悔、受戒、發願、行持ヲ修證義ノ四大原別トス始メノ二ハコレ本證、終リノ二ハ是レ妙修)以上第二段第一節トス(即ゆる利生の發願とは諸の人類は更にも言はず、凡そ生きたし生けるものを見ては、皆其苦惱をのぞき之を安樂ならしめんと心に願ふなり(發願利生ヲ明ス)即ゆる報恩の

行持とは、凡そ日夜の行住座臥云爲動作する所、皆以て君父師友等の洪恩に報謝したてまつらんが爲めにするあり行持報恩ヲ明ス。以上第二節。苟くも世に處し生を度らんには、入ては家庭に孝貞敦厚の美風あり家庭。出ては國家に忠誠に(國家社會に信實なる)とを得て(社會)戒徒(本證)ます。生々世々(無限ノ時間)に展轉增長して(行妙修いよ)在々處々(無限ノ空間)に充滿彌綸するが故に現當二世の安穩快樂、何事か復た之に如く者あらむや(戒法ノ應用)ヲ示シ其功德ノ絶大ナルコトヲ説ク。以上第三節。是レヲ第二段トス。修證義ノ四大原則ヲ示ス。正宗が抑も今是の如く最尊無上なる正法に遭ひたてまつること、是れ偏へに高祖承陽大師および大祖弘徳圓明國師の傳承弘通したまへる恩徳と祖師ノ恩徳ヲ示ス。歷朝敎聖なる 天皇陛下の外護深厚なる仁澤と國王ノ恩徳ヲ示スに由るものなれば以上通テ世出世ノ恩徳ヲ説キ(別して一系萬世の皇運を天壤無窮に扶翼したてまつり)別シテ皇國民ノ義務ヲ説キ(又兩祖の遺法ます)光輝を宇内に發揚せんことを冀ふべきものなり(宗徒タルモノ、義務ヲ示ス)以上第三段。流通分。

(典據) 波羅提叉のこと、梵網經に「釋迦牟尼佛初め菩提樹下に座して無上正覺を成したる、初めて菩薩波羅提叉を結して、父母師僧三寶に孝順せしむ、孝順は至道

の法なり、孝を名けて戒となす、亦た制止と名く」とあり、遺教經に、「汝等比丘、我が滅後に於て當に波羅提木叉を尊重し珍敬し、闇に明に遇ひ貧人の寶を得るか如くすべし、當に知るべし、此れ則ち是れ汝等が大師なり、若し我れ世に住するとも此れに異なることなけん」とあるのによられたのである。

(譬喩) 此説教の材料は多く修證義の説教を參酌するがよい第一席に心を紙片に譬へたが、又別に辻堂の譬もある、それは心は辻堂のやうなものぢや、辻堂には大名も入れば乞食も入る、商人も入れば農夫も入る、善人も入れば悪人も入る、われわれお互の心には善念も起れば惡念も起る、立派な心ともなれば醜い心ともなる、何故辻堂にはいろ／＼な人が入ることが出来るのであらう、これは辻堂には主人公がなからである若し九尺二間の裏長屋でも、これといふ定まつた主人があれば無暗に入る事が出来ぬ、われわれの心にも、これといふ立派な信念があり、それが動かねば外のものには勝手に入ることが出来なくなる、これが宗教の必要なところぢや、學問といふものはたゞ有限界のことのみで無限に亘りて知ることが出来ぬ、丁度伊豆の大島の人が太陽は海から出て海に入ると心得、飛彈の高山の人が、山から出て山に入ると心得たのと同じこととて自分の見た限りを標準として事を議論してをる、

或る時の事この兩人が東京で出合つて其事を話しをしてをると、宿屋の丁雅はそれを聞いて馬鹿なことを仰しやい、太陽は山から出るのでもなければ海から出るのでもない、屋根から出て屋根へ入るのちや、といふたやなもので、未だ地球が太陽を廻るのであるといふ一大真理を會得することが出来ぬのであります、

第二席のマツチの譬は、何に例を取てもよい、初めて種痘を發明したゼンナは非常な苦心でやつたのであるが、ゼンナがこれを發明した其法を傳へさへすれば、如何様な救世者でも相違なく天然痘の害を未然に防ぐことが出来るのちや、われくも釋尊より佛々祖々傳へられた戒をさへ受ければ、必らず佛同躰の位に入ることが出来るのである、

第三席の鏡の譬へは我が宗の本意からいへば、適當ではないのである、それは御存じの通り、五祖の弘忍の門下に神秀上座といふのがあつて、悟りの偈を作られた、それが、

身是菩提樹

心如明鏡臺

時々勤拂拭

勿使惹塵埃

といふたのを、六祖惠能大師は、これを未だ悟りの域に入らぬものとして

菩提本非樹

明鏡亦非臺

本來無一物

何處惹塵埃

とやられたのであつてをる、併しそれは第一義の上のこと、今は下つて説くのであるから鏡の譬へを用ゆるのちやから其心得かなければならぬ、鏡々といふてこれに執着すると大なる間違となるぞ、

(和歌、金言)

心こそ心まよはす心なれ心に心、こゝろゆるすな

心とは墨繪にかきし松風の音

(二休)

雪降らば積らぬ中に拂へかし風ある枝に雪折はなし、

世を治め民を助くる心こそやがて御法のまことなりけり

あざみ草その身の針を知らずして花とおもひしけふのいまして、

我はたゞ佛にいつかあふひ草心のつまにかけぬ日ぞなき (源空)

はねははねおどらばおどれ春駒ののりのしるべはしる人ぞしる (空也)

我こころ池水にこそ似たりけれにこりすむこと定めなくして (源空)

出づる日と同じ年なり福壽草 (兎州)

昨日までおそろしき野に若菜哉 (湖十)

マクスミュラー曰く、人間の生命ある所には何處にも宗教あり、

ヘーゲル曰く、宗教は完全なる自由なり、

孔子曰く、民信なくひば立たず、

華嚴經に曰く、信は道元、功德の母、能く諸の善法を生ず

心地觀經に曰く、我が佛法中、心を以て主と爲す、一切諸法心に由らざるはなし、

涅槃經に曰く、心の師となるを願ひ、心を師とせざれ、

遺教經に曰く、五根は心を主と爲す、是故に汝等當に好く心を制すべし、心の畏る

べきことは毒蛇惡獸怨賊大火の越逸するよりも甚し、

五苦章句經に曰く、能く心を伏するものを最も多力と爲す、吾、心と闘て其切無數

なり、今乃ち佛たることを得て獨り三界に歩す、

圓覺經に曰く、一切諸法皆な眞如の相にして、男女の相なく、自他の相なく、犯な

く、持なきを眞の持戒と名く

金光明經に曰く、國の正法を壞れば姦詐に熾なり

(參照) 御教説教に引用すべき和歌金言等は次ぎの修證義説教を參照せらるゝがよい、

それから釋迦牟尼佛のことを話すには、佛誕生會の説教高祖の御傳記は御遺説

教、太祖の御傳記も其御遺説教の部を參照して、これに加へるがよろしい、遺

摩大師のことは達磨忌の説教がある、それこれを應用して自在に新に組立て、や

るが説教者の伎倆である、鶺鴒のやうに、これをそのままに繰返しては面白くな

いのであります

修證義說教

第一席 (生死を論ず)

生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因縁なり、生死の中に佛あれば生死なし、但生死即ち涅槃と心得て生死として厭ふべきもなく、涅槃として欣ぶべきもなし、是時初めて生死を離るゝ分あり、唯一大事因縁と究盡すべし

今日から引續いて修證義の御話をいたすことであるが此修證義と申すは五章、三十一節に分れてをるので一節毎に有難い高祖大師の御教、佛教甚深微妙の道理が現れてをるのであるから、充分に注意して御聴文下されたい、それで唯今讀上げたのは、佛教の眼目ともいふべきで、われ／＼互の初めはといへば生れて來たのである、さて終りはといへば死ぬるのであるが、それがキントウの始めてあり、又終りであるであらうか生れる前はどんなものであつたであらう、死んでから先きはどんなものであらう、生れて來た先きもわからねば、死んで行く先きも知らぬとして見れば、われ／＼は道

を歩きながら何處から來て、何處へ行くのか知らず、たゞウロ／＼としてをる馬鹿や氣狂ひと同じやうなものとなつてしまいます、「オイ貴様ドコから來た」「知らぬ」「何處へ行く」「知らぬては萬物の靈長とは申すことが出來ませぬ、それで生を明め死を明むるは佛家一大事因縁なりとあつて、此生きる死ぬるを明めるのが佛教の眼目となつてをるのであります、かく申しますと、中には縁起でもない、死ぬるなどといふことは云はなくともよいといふ人があるかも知れぬが、如何に云ふまいと思へど、無常の風は時を撰ばず、死なねばならぬのであるどうせ死ななければならぬものなれば、チャンと此生死の道理を明めて安全に世を渡るがよいではありませんまいか、御維新の折に功勞のあつた木戸孝允といふ人の養子に木戸正次郎といふ人があつた、其人が宮城時助といふ人と或る時、死後のことに就て議論をせられたことがある、木戸の正次郎さんの言はつしやるには、人間は死んだら、それてしまひである、死んでから後に未來があるとか、何とかいふのは坊主達が人をだますが爲めにいふので死んでしまへば何にもあるのでないとのことである、それを聞て宮城時助か、決して／＼さうてはない、死んでから後は必らずあるものぢや、「イヤないものぢや」「イヤあるものぢや」と議論をしてをると、木戸孝允さんがこれを聞かれて、「正次郎、そんなら汝はキント無

いといふことが出来るか、と問はれるとこれはキツトとは言ひ難い、ソコデ「先づな
いだらうと思ひますと答へた、スルト宮城の方に向つて「宮城、汝はキツトあるとい
ふことが出来るかと問はれた、キツトと答へたいが、まだ行つたことがない、それで
キツトとは云はれぬ、ソコデ「先づあるだらうと思ひますと答へた、木戸公は笑はれ
て、汝はないだらう、汝はあるだらう、どちらもだらう議論ぢやな、シテ見ると、丁
度今外へ出やうとするのに空が曇つてをる雨が降るだらうか、降らぬだらうかといふ
議論のやうなものではないか「ハイマア左様でござりまする、「然らばその時は如何が
いたす、「それは雨が降るだらうと傘の用意をして参ります、「そこぢやて、雨が降るだ
らう、降らぬだらうといふときには傘の用意をしてゆくなら、死んでから後があるだ
らう、ないだらう、どちらもだらう議論であるならば、あるだらうときめて宗教の用
意をして行つた方が安心ではないかと云はれたといふことであります、併し佛教では
あるだらうなぞといふだらう議論ではない、人間の死といふことは、丁度一杯のコッ
プの水を大地に捨てばなくなつたやうに見えるやうなもので素人の目からは無くなつ
たやうであるが、實際は大地に捨てたる水は太陽の赫々たる光に照らされて水蒸氣と
いふものになつて立ち上り、それがまた空中の寒冷なる空氣に遇ふて雨となり、雪と

なり、更らに下つて谷川の水ともなる、姿かたちはさまざまに變るけれども、水その
ものは、未だ會て消滅することのない様なもので生といひ、死といふのは一時の姿で、
高祖大師も、生より死に遷ると心得るはこれ誤なり、生は一時の位にて已に前あり後
あり、故に佛法の中には生即不生といふ、滅も一時の位にて亦前あり後あり、これに
よりて滅即不滅といふ、生といふ時には生より外に物なく滅といふ時には滅の外に物
なし」と仰せられてある、生死は大海の波、大海には波か寄せては返してゆく、波が
寄せたからとて大海の水は一滴も増もせず波が返したからとて大海の水は一滴も減じ
はせぬ、増しもせず、減じもせぬ、不増不減の大海に生死の波を立て、をるのか、わ
れく凡夫の有様ではないか、波を離れて水なく、水を離れて波はないと知るのを、
生死即ち涅槃と心得るといふので、涅槃といふのは天竺の語ていろくな譯かあるが
不生不滅といふとてある、不生不滅の涅槃の大海に生死の波を立て、をるのぢやから
別に波が寄せたからとて喜ぶべきものなく、波が返したからとて厭ふべきもない、能
くこの道理を悟れば生死に執着するものがなくなる、何故かといふに生死の波の此身を
のまゝに不生不滅の涅槃と其日く行ひをしてゆくのか肝要であるのぢや、此道理
「かよく心に落ち着けば、寂然不動の膽力を養ひ、何事につけても、騒ぎ廻るやうな輕

佻なことはなくなるのであります、此生死は即ち涅槃と心得てゆくのが我が宗の有難いところで、心をこゝに落ちつければ、三尺の秋水抜きつれて切つてかゝつても少しも驚くことはない、昔し佛光國師といふ御方は大元の兵が刀を以て斬りかゝつた其時にも、平然として、

乾坤無地卓孤筇、喜得人空法又空、珍重大元三尺劍、電光影裏斬春風、とやられた、これは佛法によつて人も空なり、法も空なり本来空の道理を悟つて見れば、此天地に筇を立つるところもない、それを今ま切らうとかゝつたからとて、ヒカリと電の光るまに春風を斬るやうなものぢやと、スマンして居られたといふことである、我が宗の信者である、太田道灌も、槍て突かれる其時に

かゝるときこそ命の惜からめかねてなき身と思ひ知らずばといふて、少しも騒がなかつたといふことである、これ皆な生死即ち涅槃と心得てをつたからであります、如何に大人でも豪傑でも、心に此の落ちつきがないと、大事出來の其時は周章狼狽するものであります、彼の有名な大石良雄が、主君淺野内匠頭切腹と相成り、城を明渡さねばならぬ時に、菩提所たる赤穂の花岳寺に詣てました、和尚の惠光といふ御方に面會いたしまして、いろ／＼此度のとを話し、私も實に當惑い

たしましたといふと、次ぎの間にそれを聞いてをつた和尚の弟子の良雪といふのが、ハ、ハと笑ひまして、一國城代をも勤める身で、これしきのことには當惑とは何事であるといひました、惠光和尚は小僧のくせに左様なことは申すものではないと叱られますると、良雄は懇慫に唯今の御小僧さんの御語、如何にも御尤に存じまするて、何卒予か邸までよこし下されといふて歸りました、和尚は仕方かござりませんで、良雪を呼んで、御家老に御無禮なことをいふたのであるから訖度苛き目に遣はされるに相違ない、早く今の中に此寺を逃れ出よと申しますると、良雪は何に御心配には及びませぬ、左程恐かな大石でもござりますまいと、ノコ／＼と大石の邸へ参りました、大石は早速これを一室に招いて、さて一國の城代たるものがこれしきのことには當惑いたすは面目ないこととござるが、貴僧には何か善き御分別がござるかと申しますると、善き分別も悪き分別もござらぬ、古より君辱められて臣死すときまつてござる、何を當惑なさるのであると、云はれて大石もハツタと手を拍ち、その事とござると其心を堅めたといふとであります、これらが生死即ち涅槃と心得たる我が宗門の心の落着けと、ころだ、心がこゝに落ち着いてをれば、何の困ることがあらう、これは學問ではゆけぬ、理窟ではわからぬ、佛法の極意を極めるより外はないのでござる、併し死ぬると

申したからとて死ぬばりか、佛法ではござらぬ、唯一大事因縁と究盡すべして、死ぬるといふことに心の落着をしてをいて、さて此世の中の働きに骨を折らねばなりません、「磯までは海女も笠さる時雨かな」で、生死もと不二ですか、因縁あつて生きてをる以上は、終には大海に入るの海女でも磯までは笠きて此身を濡さぬ様にするのが肝要ぢや、さて因縁到來とて死するの時、何をか悲み何をか痛まむとの心掛けが第一でござる、この事は尙ほこれからいろ／＼と御話し申すが、今席はこれで……(下座)

第二席 (人間の價値)

人身得ること難し、佛法値ふこと希なり、今我等宿善の助くるに依りて、已に受け難き人身を受けたるのみに非ず、遇ひ難き佛法に値ひ奉れり、生死の中の善生最勝の生なるべし、最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れ、サテ、此の御聖語は、『修證義』の第二節であります、一昨吾れ／＼人間たるものが、誰しも能く／＼心得て置かねばならぬことは、お互の身の上であります、殊に佛教信者たるものに於ては猶更のこととござります、私共は、或學者の云ふ様に、他の動物に比べて何も豪い所はない、只多少身体の機關が緻密になり發達して居る丈であります

せうが、成程その位のことであるならば、何も豪いことは無い、御覽なさい、人には空飛ぶ鳥の如くに羽翼がござりませぬから、双翼能く九天の高さに上ることは出来ませぬ、人の足は野を驅ける獸に及びませぬから、能く千里の遠きを走ることには出来ませぬ、犬や猫は夜間能く物を見ることが出来しますが、人の眼は暗闇では少しの用もなしませぬ、壽命の方で見ると、鶴は千年龜は萬年と申しますが、人間は一人生七十古來稀」と申しまして、先づ大抵五十年です、これも緻密に統計して見ると、マリーヤット、三十何歳と云ふことであります、また力の方で見ると、牛や馬は重きを負ふて千里の遠きに達しますが、人間の力は到底彼等に匹敵することは出来ませぬ、サテ、思ふやうに飛べず、思ふやうに走れず、思ふやうに見えず、思ふやうに生きられず、思ふやうに持つことが出来ず、不自由千萬であるのみならず、此等の點から見ますと、彼等禽獸に餘程劣つて居ると申さなければならぬのであります、しかしながら能く考えて見ますると斯様な身體の組織や機關の外に一つ優つて居る所のものがござります、それは吾れ／＼お互の心の作用で、實に靈妙不可思議のものであります、ソコテ、此を靈智とも靈能とも申します、佛教の道理から申しますと、「一切衆生悉有佛性」と申しまして、蛇蜂蜻蛉蟹蛙に至るまで、佛性と申して、此の靈妙の本體は具へて居

りますが、それは只本跡を具へて居る丈のこと、此の靈妙不可議の作用を起すことは出来ませぬ、此の點から見ますと、鳥の翼も、獸の足も、猫の眼も、牛の力も、鶴龜の齡も、到底比較になりませぬ、此の靈智靈能の發する所は、翼なくして能く九天の高きに達する輕氣球を發明し、足を勞せずして能く千里の遠きに達する汽車汽船を發明致しまする、よし、此の眼は思ふ様に見えずとも、夜を照らすに瓦斯燈があり、電氣燈があり、遠きを見るには望遠鏡があり、小さなものを見るには顯微鏡があります、牛や馬の力は無くとも、種々の器械を使用しまして、牛や馬の十倍も二十倍もの作用をいたすことが出来ます、なほ、吾れくゝの生命は、人生僅に五十年、朝の露の様でござりまするが、一度佛陀の聖教に依りまして安心立命いたしまする時は、不生不滅と申しまして盡きせぬ生命を得ることが出来ます、斯様に能くくゝ考えて見ますると、先づ人間位幸福なものはありません、佛敎では、生きとし生けるもので、吾れくゝ實際に見ることの出来るものから、見ることの出来ないものを總べ括つて六種に分けまして、此を六道の衆生と申しますが、此の吾れくゝも互は此の中の人間道と云ふ一種類でござりまする、此の六種類の各が同じ數だと假定して見ましても、人間の種類は六の中の一でござりまして僅かものであります、先づ吾れくゝが見もし聞もし

して居る、彼の動物界に就いて見ても解り易いこととてござりまする、彼の原生動物と云はるゝ「アミーバ」「モナラ」「夜光蟲」「ユークレナ」「ザウリムシ」等の類より、海綿動物、腔腸動物、棘皮動物、蠕形動物、節足動物、軟體動物、脊推動物に至るまで、此の全世界に生存する動物の數は、實に莫大でござりまして、世上に知られたるもの、みにても四十六萬種の多きに達して居りまする、此の一種類に各數十萬のものがあるから、なかくゝその數は到底計算し盡すことは出来ませぬ、地獄や天上や修羅は計算外としても、此の通りであつて見れば、生きとし生けるものゝ中で、人身を得ると云ふことの容易でないことが解ります、ソコ、此の得難い所の人身を得たるものは幾何であるかと云ふと、吾れくゝも互が四海同胞とか、全世界の人類とか云ふて居る仲間が、先づザット十四億萬人と云ふことであります、此の中で佛敎信者と云つて佛陀の聖教に因縁を結んだものが漸く五億萬人内外と云ふことであります、して見ると、世界人類の三分の二は佛敎に縁の無い所の人でござりまする、誠に因縁と云ふものは得がたいものでござりまする、特に同じ佛敎と申しましても、小乘敎大乘敎と申しまして、一方は佛陀の權方便の敎、一方は佛陀の御本懷の敎で、先づ二つに分ちまして、その中で權方便である所の小乘敎は、錫崙島を始め、緬甸、暹羅、安南、

及び印度の一部分は、此の教であります、次に大乘教と申します佛陀の御本懐を御示しなされた方は、和蘭陀領マヤワ、英領アスナム、馬來、香港、露領オルギス、アルムク、捷報、西比利亞南部、朝鮮、ブウタン、シクヒム、カンミニラ、西藏、蒙古、滿州、支那本部、及び我日本等てござりまするが、實際にこの精華を萃めたる所は、只我國のみで古より「大乘相應地」と申して居りますが、實にその通りてござります、一昨、我國は上は萬世一系の天津日圓の君にましまして、千代に入千代に細石の巖となりて昔のむすまで榮えゆく皇室を戴いて居りまするのは、到底萬國に比類の無いこととてござります、サ、斯様に能く／＼考えて見ますると、三つの歡喜ばねばならぬことがござります、先づ一には受け難き人身を受けたること、次には遇ひ難き佛法に値ひ奉りしこと、その次には我が此の日本國に生を受けたることで、實に此は難値難遇の歡喜でござります、人身得ること難し、佛法値ふこと稀れなり」の聖語を片時も忘れずして吾れ／＼の今日の境遇を喜ばねばなりません、所が、斯様の境遇は偶然の事ではない、「宿善の助くるに依りて」と仰ふせられたる通り、夙世よりの能く／＼の善根功德に依るもので、善因善果惡因惡果の法則は寸分も感ふことはないのてござります、斯様にして得たる吾れ／＼お互の此の身の上でござりますから、「生死の中の善

生」とも、或は「最勝の善身」とも申します、何卒お互に此の難値難遇の一生を、仇野の露と消さずして、生れ甲斐のある様にいたしたいものでござります、ソ、コ、私共の大恩教主たる釋迦牟尼如來は、早や法華の御會座も濟みし後も、子と思ふ親の慈悲、末世の事が氣に掛かれて、特に「涅槃經」と云ふお經をお説きなされましたが、その中に「世に生れて人と爲ること難く、佛世に値ふこと亦難し、猶ほ大海の中に盲龜の浮孔に値ふが如し」と仰ふせられました、盲龜と申して盲目の龜で、それが、寄せては返へす女波男波の間に／＼さまようて居たのが、圖らざるも、身を寄すべき浮孔と申して浮木の孔に値ふたと云ふお話でござります、先づ斯様な事は容易に有らう事とは思へないが、お互が人間と生れて而も佛法に値ふことの出来たのも、ヤ、ハリその通りであるから、ウツカリと此の一生を過さしてはならないとの難有い縁でござります、

今は昔、源博雅朝臣と云ふ人が居られました、此のお方は、やんごとなきお方の血統で、よろづの事に通し遊されましたが、中にも管絃の道には、餘程達して居られました、然るに、その頃、逢坂の關に一人の盲人蟬丸と申すものがあつて、管絃の道に取てはその奥義を極めて居ると評判される位の名人でござりました、ソ、コ、博雅は

此の由を聞かれて、何卒その秘訣を授けたいとの希望でありましたけれども、鶴と盲人の家を尋ねて行くのも面白からず思ふて、内々人を以て蟬丸に、それ程の邊巷に居なくとも京に来て住はれよかしたと、申し遣られますと、盲人の蟬丸は、明確した返答をもなして「世中はとてもかくても過としてむ宮も葉屋もはてしなれば」と口吟ました、斯様な状態でござりますれば、強ひて勸むるも詮なきことと思ふて、還つて此の由を物語りますと、博雅痛く残念に思ひ、ツク、思を凝らされましたが、若しや此の場合躊躇して居つたならば、盲人の事あらむも計り難く、亦吾れの命の程も計り難し、萬一の事ありては、流泉噪木の曲も世に絶えぬることならむ、如何にもして此の曲を傳へたしと心に深く決し、その夜直ちに逢坂の關に行き、蟬丸の老の邊を徘徊せられますけれども、絶えてその曲を弾かない、ソコで、今宵か今宵かと月日を重ねること三年にも及びました、所が、三年と云ふ八月の十五日の夜、月少し上り風少しく吹きますと、博雅も今宵こそは、流泉噪木の曲を弾くならんと、待ちに待つて居りますと、巷の中なる盲人蟬丸いかにあわれと思ひましたが、琵琶を掻き鳴らし、「逢坂の關の嵐のはげしきに強てぞゐたる夜をすすと」と吟じ、また獨りして哀れ興有る夜かな、若し我れにあらぬ難や世に有らん、今夜心得たらむ人の来たれ

がし、物語りせん」と云ふのを聞き、博雅は嬉し涙を流しながら、巷の柴の戸を押開きて、始めて蟬丸に面會し、互に相喜んで、遂に流泉噪木の秘訣を授けられたと云ふこととあります。

サ、僅か一藝一能の上でも、その秘訣と云ふ所に至ると、なか／＼容易なことではない、よしその秘訣を授けたいと云ふ人は有つても授くる人がない、或は授くる人は有つても授かる人が無いと云ふ様な鹽梅である、況んや、此の出離解脱の法門は變更のこととあります、然るに吾れ／＼互今日の境遇は、明慧上人の申された「しめたる龜のうき木にあふなれやたま／＼得たる法のはし船」で、實に盲龜浮孔に遇ひたる好時節好機會でありますから、此の機を逸せず、生とし生けるものゝ中で、花とも云ふべき此の最勝の善身を「七重八重花は咲けども山吹の實の一つだになきぞかなしき」と云ふ様な、折節花は咲いても實ることが無く、無常の風に吹散らされない様に平素の信心が何よりの肝要とござります。

第三席 (人生の無常)

無常憑み難し知らず、露命いかなる道の草に落ちん、身已に私に非ず、命は光陰に

移されて暫くも停め難し、紅顔いづくへか去りにし、尋ねんとするに蹤跡なし、熟観する所に往事の再び逢ふべからざる多し、無常忽ちに到るときは、國主大臣、從僕妻子珍寶たすくるなし、唯獨り黄泉に越くのみなり、己れに隨ひ行くは、只是れ善惡業等のみなり、

サテ、此の聖語は、高祖様が無常迅速の狀態を告示したされたので、「修羅説」の第三節でござります、吾れく互は、皆それくに素い顔をいたして居ります、學者は學問を鼻にかけて威張り官吏は虎の威を假る狐で、頻りに役人風を吹かし、財産家は財産を以て威張り、技術家は自分の技藝を鼻に掛ける、斯様に世間を見渡して見ますれば、皆なく素い方方の揃ひきりてあります、しかしながら、翻て靜に此の世の中の狀態を考えて見ますと、なかくさやうのものではない、如何に素い人ても、夜更け人靜かなる時に、思を凝らして見ましたならば一種云ふべからざる感慨に咽ぶのでござりませう、昨日までは春の彌生の花の空、桃紅李白と咲き亂れ、いづれ劣らぬ色香でござりまするが、明日ありと思ふ心の仇櫻夜半に嵐の吹かぬものかは、早や今日は塵と化し泥と消えて居ります、非情の草木が斯様に無常迅速でござりまする様に、吾れく有情も亦實に此の通りてあります、昨日までは、年は二八

か二九からぬ花の顔露の眉、まことに美しくい處女でござりましたが、早や今日は、肉落ち頬瘦せて見る影もないのであります、所が更に進んで、此度は、もう少し大い家とか國とか云ふもの、上に就て、考へて見たらば如何でござりませう、皆さん、彼の印度と云ふ國は、過ぎにし昔を考えて見ると、北はヒマラヤの山脈を以て支那に接し、南はコモリンの海角を以て印度洋に突出して居る三角になつた半島國で、山にはヒマラヤの雪あり、水にはガンヂスの流れあり、そうして、國富み民裕かに宗教と云ひ、文學と云ひ、その他、諸種の技藝に至るまで、非常の進歩をして居りましたが、今日では、その廣漠たる土地は強國に奪はれ、その多くの人民は奴隸同様の境遇となり果て、國破山河在」で、ヒマラヤの雪は千古に清く、ガンヂスの流は今猶昔にかけりませんけれども、それは地理學上の國で眞正の國と云ふものは認むることが出来ません、誠に憐れな状態ではござりませんか、そののみならず、その地理學上の國と云ふものも、桑田變じて海となると云ふ説の通り、昨日の淵は今日の湖、天災地變で、何時如何なる事が起るやら分りませぬ、サー斯様にダンく廣く考え及ぼして見ますと、此の世の中にありとあらゆる、一切の有情非情悉く無常迅速でない所のものは、一つもござりません、して見ると、僅に渺たる滄海の一粟たる、吾れく互が今日

あつて明日ないのは、何も怪しむことも訝かる筈もないのであるが、解つた様で解らぬのは吾れ／＼お互の有様、ソコ、佛は吾經の中に、此のこと懸々とお説きくだされました、『仁王經』と云ふ經には、一念の中に九十の刹那があるが、その一刹那に九百の生滅があると示してくだされ、『婆娑論』の中には、一晝夜の間に六十四億九萬九千九百八十の刹那があつて、五蘊生滅すと説いてあります、此の刹那といふことは、佛教で極短少の時間を云ふのでござりまするが、一秒と云ふより餘程短い、尤も此の一秒と云ふのは、只時間を計る上る於て、且らく最小單位と假定したまでのこととて、精巧なる「クロームコープ、クロノグラフ」等の利器を以てすれば、一秒時間の千分の一を區分することが出来ることと云ふのであります、それは兎も角としても、如何に此の生滅遷流の迅速であるかと云ふことが解りませぬ、斯様な次第でありますから、「往事茫茫去不還」で、一返經過ぎました事は、復たと再び逢ふことは出来ない、今年の花は去年の花にあらず、洵に高祖様のお示しの通り熱觀する所に往事の再び逢ふべからざる多し」でござります、サテ／＼吾れ／＼お互の身の上、風前の灯と申しませうか、草の葉に宿る露と申しませうか、無常の風一度吹き來る時は、六道輪廻の身の上であつて見れば、何れの道に墮するやら解りませぬ、此の一息切斷の場合、生死交

謝の一刹那、吾れ／＼お互何を使りにし何を頼みにいたしませう、富四海を有つ國王も、位人臣を極むる宰相も、血肉を分けたる親子兄弟も、僧老同穴を契りし妻も、山なす珍寶財産も、畢竟する所何の用にもなりませぬ、そうして、此の殘酷なる死と云ふものは、貴賤貧富に拘はらず、老若男女を論じませぬ、死の前には、一切の生きたし生けるもの、皆な平等でござります、しかも皆な丸裸でござります、只此時に離れやうとしても、離るゝことの出来ないのは、生涯に遣り置いた所の善惡の業でござります、お互は、此の業力に轉ぜらるのみであるとしたならば、此の無常遷流の世に處して、深く佛様や祖師方のお教誡に従ひ、希望を永遠に繋ぎまして、佛教信者として、國家の一員として、また社會の一員として、清らかなる生涯を送り、生死交謝の一刹那に至りて、後悔しないやうにありたいものでござりまする、無常は宇宙萬物の真相でござりますから、これを避けやうとしても避けることは出来ない、逃れやうとしても逃れることは出来ないが、只此を善く利用することを考へねばなりません、その利用と云ふことは外でありませぬ、無常遷流であると云ふことを深く體信しまして、一刻も早く安心と申して、此の精神の落ちつき場を定めまして、一刹那も忽にせず、人々お互の本分を盡くすのでござりまする、

此の無常と云ふものは譬へば、一團の火の様なものでござります、その火は、間斷なく燃えて居りますから、少しも變りはないやうに見えますが、實はそうでない、前刹那の火は早や後刹那の火ではござりません、たゞ餘り前後の相續が接近して居りますから、何時も變らぬ様に見えるまであります、一切萬法皆な此の通りであります、前滅後生々々々と生滅しながらも、餘りその接續が早いものでありますから、始終變らぬ様に見えます、所が、此の一團の火は元來善惡はないのですが、若しこれを惡しく用ゐますと、人畜家屋を焼き盡くしてしまひまするが、サテ此を善く用ゐて行きますと、人間社會一日も欠くべからざる、至極必要なものとなります、無常も此を惡く用ゐますと、今日有つて明日なき身であるから、世の中は、太く短く渡る方がよろしいと考へますと、所有手段を用ゐて、飽食暖衣以て權花一朝の榮を望むやうになります、然るに此に反して、此を善用する人は此の一日一時一刹那は、復び得ることの出来ないものであるから、如何に短少の時間でも、此を用ゐて自分の安心を得るとか社會人類のために盡すとか云ふことにいたします、古來から、高僧とか碩徳とか云はれる方々の出家の動機を尋ねて見れば、多くは皆な此の無常の感慨に打れて、如何にもして此の淺ましい境遇を脱したいといふ、精神上の煩悶から出家をせられ、

遂に自分の精神上の安慰は勿論、後世に至るまで社會人類に利益を興へられたのであります、

中に就て、今我が高祖大師の身の上に就て、親つて見ますれば、大師は、姓は源氏村上天皇九代の裔、久我大臣通親卿の御子様で亂れし世とは申しながら、斯様な御家の柄のこととござりまするから、何に不自由なき御身分であらせられましたけれども、三歳の時には父上を喪ひ、八歳の時には母上を喪ひ玉ひ、重ね々々の御不幸、幼心にも無常の感慨身に泌みつゝ、終夜亡き母上の枕上に侍り玉ひしが、香の煙の且つ登り且つ消え行くさまを見玉ふて、世の中の所有物柄事柄、皆な悉く宛然此の香の煙に異ならず、無常遷流のものであると云ふことを悟りなされまして、十三歳の時に出家なされ、比叡の峰、深く分け入りて、良觀法眼の許に到られしより、西に東に時の高僧碩徳を訪ふのみならず、航海不便の六百年其の昔、幻身を波濤に任すと仰ふせられて、不惜身命の御決心で、遙るく、宋土に渡らせられ、佛祖單傳の法門を傳來せられ、他門の人までが「中比建仁寺の本願入唐して禪開戒律の儀傳へられしも、只狹牀にて事々しき坐禪の儀は無りけり、天台眞言などあひならへり、一向の禪院の儀式は、時至つて佛法房の上人、深草にて如大唐廣床の坐禪始めて行ず、其時は坐禪はめづらし

き事にて有信俗等拜し貴とかりけりと、其時の僧かたり侍り」と稱へましたやうに、青丹よし奈良の都に傳はりました所謂南都の六宗は申すまでもなく、天台眞言の教へ、腐敗に腐敗、墮落に墮落をいたしましたして、佛の御教は有れども無きが如き時代に、他宗他門に勝れたる最も難有法門を傳へて當時の社會を救ひくだされ、殊に時の執權北條時頼に向て、君臣の道を説いて悔悟の念を起させ玉ひ、猶ほその御教は六百五十年後の今日まで、いやましに盛んに津々浦々に至るまで、皆その恩澤に浴して居りまする、是れ偏に大師が無常に成じてこれを善用せられましたと蔭と歎ばなくてはなりません、

皆さん、若しそれ、大師が無常にも成せられず、よし成せられても、太く短く渡らうと云ふやうな自業自棄のヤクを起さるゝとか、またはたゞ世を厭うて、進んで法を求めになる志もなく、社會を救ふてやらうと云ふ様な志がなかつたならば、御自身の出離生死も無論出来ないが、吾れくも互が、今日斯様な難有法門を説きもし、聴きもすることも出来ないのでござります、何卒皆さん只今までの話を能くくも考へなされて、一刻も早く信心を獲得せられて、生死の岸頭に立つて、風吹かば吹け、雨降らば降れ、順境に處しては、順境に行ひ、逆境に處しては、逆境に行ふと云ふや

うな大安心に住して、行持報恩の道に進まれんことを、偏に希望いたしまするのでござりまする、此れが即ち無常の道理を知つて、しかも能く無常を用ゐて行くのでござりまする、

第四席 (因果の理法)

今の世に因果を知らず、業報を明らめず、三世を知らず、善惡を辨まへざる邪見の黨侶には群すべからず、大凡因果の道理歴然として私なし、造惡の者は墮ち、修善の者は墮る、毫釐も忒はざるなり、若し因果亡して虚しからんが如きは、諸佛の出世あるべからず、祖師の西來あるべからず、

サテ此のお聖語は、因果業報の信すべきことをお示しなされたので「修証義」の第四節であります、一昧、此の因果とか業報とか申しますると、僧侶の專賣特許の様に考へ、またも抹香臭いお話かなと、一言にクナ、連中もありませんが、斯様な人々は、畢竟、宗教の何物たることも、學問の何物たることも、サツパリ、御承知ない人々であるからいたしかたはありませぬ、抑、因果と云ふことは、詳しく申せば、原因結果と云ふことで、業報と申すのは、その原因の勢力に由て結果を生ずるを云ふので、決

して怪しむべきことも、疑ふべきこともないのであります。よしまた、此の因果と云ふことを、現在一世の間では認めても三世と云ふことを信せず、隨て此の因果の道理が三世に貫通して居ると云ふことも信せないものが、隨分澤山あります。また、善とか悪とか口にせないものばかりませんが、その所謂善とは如何なるものであるか、惡とは如何なるものであるかと云ふことを、眞實に辨へない人々も、是亦澤山あります。洵に淺間敷い人間の狀態と申すより外はありませんが、吾れくお互、靜に心を落付けて考えて見ますと、先づ胸中に浮ぶものは、吾れくは、何處より來りしものであるか、また何處に去るものであるかと云ふ問題であります。若しも或學者の云ふ様に、此の世に生存して居るのは、忽然として水中に泡の生じた様なもので、前も後もない、忽然として生じ、忽然として、死するものであるとしたならば、よし幸にして、百年の壽命を保ち、萬年の齡を重ねることが出來ても、決して長いとも満足だとも申されませぬ。また如何に親しき父母兄弟があり、頼母敷い妻子があり、富める朋友があつても、その數亦限りありでありますから、宇宙の永遠なると、その廣大なるとに比較いたしましたならば、實に九牛の一毛、大海の一滴で、無聊とも寂寥とも何とも形容の出來ないツマラヌ生涯と申さなくてはなりません。然らば、吾れくは、決して一

世限りでない、永遠なる過去と永遠なる未來とを有するものといたしませうか、是れも獨斷では出來ませんが、先づ實驗と推理とに依るより外はありませぬ。今日、科學々々と喧しく申します學問は、此の實驗と推理とに依りて成立して居ります。その科學では如何なることを申すかと云ふに、物質不滅勢力恒存と云ふことを申します。物質不滅と云ふのは、凡そ此の世の中にありとあらゆる一切のもの、何一つとして無くなるものはないと云ふので、宇宙萬象はいろくさまくさまに姿は變つて居るけれども、これを組織して居る物質は決して増しもせねば減りもせぬ。宇宙の永久なるが如くに一切皆永久であると云ふので、例へば、こゝに一つの蠟燭がある、これに火を點じますれば、火は燄をなして立ちのぼり、蠟燭はダンく減少して終には全く無くなるが、これは無くなつたのではないばかりでなく、蠟燭の實質はこれが爲めに少しも減少することなく、此の宇宙の中に遍滿して其の無くなつたと見えたのは形骸ばかりである如く、また、一杯のコップの水を地に棄てますれば、その水は無くなつた様であるが、これは決して無くなつたのでなく、其地面の水は、下るものは、土中に浸み込んで地下水となり、上るものは、太陽の熱によつて水蒸氣となり、水蒸氣はまた寒冷なる空氣に遇ふて雨となり、尙ほ一層寒冷なる空氣に遇ふて雪となるのであり

まず、斯様に雨となり雪となり水となり、氷となり、その姿はさまざまに變りまするが、その本質は少しも増しも減りもせねば減りもしませぬ、無一物の處無盡藏、花あり月あり樓臺あり、これが物質不滅の道理で、佛教で此の宇宙萬有を地水火風空識の六つの原素によつて、成立つと説く如く、科學者は此の宇宙萬有は六十有餘の原素によつて成立つて居ると説き、此原素の化合によつて或は水となり火となると云ひます、酸素といふ原素は、水素といふ原素が加はれば水となり、炭素といふ原素が加はれば火となる、宇宙萬有は皆なたゞ此の原素の抱合に過ぎないのである、そうして、此の原素は生じもせねば減じもせぬ不生不滅不増不減であるといふ、サテ此の原素をして諸種の作用を爲さしむる力これをエナジー、即ち勢力といふので、これも不生不滅なものであるといふ、これを勢力恒存説といふので、今日科學者が一般に認めて居る所であります、或物理學者は、此のエネルギー即ち勢力を物體の大涅槃力と譯して居る位で、まことに佛教の所謂涅槃の如く不生不滅不増不減であります、また科學者は、この動態と靜態との二つに分ちて、池中の水は靜態にして瀑布の水は動態であるといふやうに説いて、或は動態となり或は靜態となるけれども、その勢力は恒に存して居るものであるといふことを疑ひませぬ、實に科學者の云ふ通り、物質は不滅です、人が死ね

ば焼けば灰埋むれば土となりますが、灰となり土となつたからとて、人を組織した原素がなくなつたと云ふのではありませぬ、また勢力恒存で、吾れ／＼の勢力即ち精神も不滅であります、いろは四十八字の原素の中より、「ふるいけやかわずとびこむみづのおと」といふ十七文字を抱合せますれば、古今の名吟として無限の趣味を興へる勢力を持つて居る、今此の十七文字をばら／＼に離してしまつてもまたかく抱合したときには此の趣味を持つて居る、今人間もその通り、人間を組織した所の原素が不滅であるならば、またその原素と原素と抱合したときにはその精神顯れるのは、疑もない話で、煙草盆を打ち毀ちて木の板ばかりとしてしまつても、またこれを組合すれば煙草盆の作用をするので、打ち毀した木の板と煙草盆とは全く違ふのが、その木の板は煙草盆となるの資格を持てるので、今人間が死ぬるのは十七文字をばら／＼にし煙草盆を毀したやうなものです、若し因縁あつてこれを組合すれば、古池の趣味も有し、煙草盆の働きもいたします、煙草盆たる因縁が盡きて打ち毀したからとて、それで此の木は無くなつたとは云へないので、何時でも因縁さへあれば煙草盆となるのであります、吾れ／＼の生と云ひ死と云ふものは、其の精神の動態と靜態とて、動態にあるときは生、靜態にあるときは死と云ふのであります、しかし生と云ひ死と云ふ

からとて、その恒存せる勢力には少しの増減もありません、尙ほまた、此の生と死とは相離れるものではありませんから、生のある所には必ず死があり、死のある所には必ず生があります、此等の道理によりて考えて見ますれば、實に吾れくの一生涯は、限りなき過去より、限りなき未來に聯續する所の一つの縁に過ぎませぬ、一個の縁は微てありまするけれども、その繋かる所は無限であります、吾れくは此の貴重なる重要な位置に居ると云ふことが解つたならば、随つて善を修し惡を止め人を利し自己を利し、ますく社會人類の幸福を圖らねばなりません、所がその所謂善と云ひ惡と云ふものは如何なるものであるかと云ふと、解つたやうに解らぬのですが、一言で云へば、善とは此世他世を順益するので、惡とは此世他世を順益せず却つて損害するの行爲であります、ソコ、佛教の所謂善とは世間で云ふ目前の小さい事柄ではない、まして金錢利欲に關係する善とか惡とか云ふものではありませぬ、吾れくの大目的たる涅槃に一步でも近づく行爲が、即ち善と云ふので此世他世を順益するとは此の事であり、此に反して涅槃に遠かる行爲はますく吾れくを迷に引る入るゝものでありますから惡であります、即ち此世他世を損害する方であり、要するに上に述べました所の、因果を知らざるもの、業報を明らめざるもの、三世を知らざ

るもの、善惡を辨まへざるもの、是れ皆な邪見の徒黨でありまして、信心獲得に障礙になるものでありますから、平素群せざるやうに注意せねばなりません、朱に交れば丹くなる諺の通り、人は平素の交友が大事であります、猶ほまた前より述べました因果と云ふもの、實に公平無私であり、すてに公平無私でありますから、善因善果惡因果寸毫の相違はありませぬ、それを佛祖の上で例して見ますると、佛六年の娑羅の因縁が、四十九年の説法の結果となり、達磨大師九年面壁の因縁が一華開五葉の實を結んだので、因果の道理が立たないことであるならば、佛様が出世をせられて衆生に真理を悟らせることも出来ななし達磨様が西來なされても何の所詮もないことである、因縁の道理歴々分明、深く仰て信すべきことであります、こゝに一つ此の人間社會を譬へて見ますると共同の一大會社見たやうなものであります、すてに一大會社であつて見れば、その範圍もなかく廣く、その規則も嚴正であり、そうして、その會社員は各責任を負ふて會社の事業に従事し、功あれば賞せられ、失あれば罰せられますやうなもので、宇宙の大法則たる因果の理法は、實に峻嚴に行れますから、善即ち人類社會の健全なる進歩を資くるものは賞せられ、惡即ち人類社會の進歩を害するものは罰せられます、是れ實に已むを得ざる事であり、

大凡世の中に大事業をなしたる人々は、何れも皆な死後の觀念と云ふものが確立されて居りますが、彼の十九世紀の偉人として世界の賞讃を得たるビスマーックの如きもその一人であります。ビスマーックの事業の中には亂暴なこともありましたけれども、自分が此れこそ、社會のため國家のためであると信ずる所を、毀譽褒貶にかゝはらず、斷々乎として行つたのは、實に感心ですか、或時の話に、自分が斯様な大事業を成就したのは死後の觀念があつたからであるといはれたと云ふこととす、尤な事でありませぬ、人間は此の死後の觀念があつて、始めて一言一行の上にも責任を重んずる様になります、永遠の希望と云ふものは、死後の觀念に由つて生ずるものであります、人生涯の云ふべからざる趣味と云ふものは、こゝに於て始めて生ずるものであります、何卒皆さん、此の道理を深く信じて、日々の行ひに御注意あらんことを希望いたします。

第五席 (善因善果)

善惡の報に三時あり、一者順現報受、二者順次生受、三者順後次受、これを三時といふ、佛祖の道を修習するには、其最初より斯三時の業報の理を効ひ驗らむるなり、

爾わらざれば、多く錯りて邪見に墮つるなり但邪見に墮つるのみに非ず、惡道に墮ちて長時の苦を受く、

サテ、此は吾れ〱互佛教信者たるものは、業報に三時の差別あることを心得なくてはなりません、若し此の道理の心得が出来て居ないと、淺間敷い邪見に墮つることに、あるの、態々高祖が御訓誡くだされたので、即ち「修證義」の第五節であります、吾れ〱此の人間一生涯の事柄は、實に千差萬別で、種々様々であるけれども、すべ括つて云つて見れば、善惡无記の三業と云ふもの、无記と云ふ方は極く少ない、先づ善にあらざれば惡、惡にあらざれば善と云ふやうな有様で、善惡の二業と云つて宜しい、此の善と云ひ惡と云ふ業は、原因結果の道理より申しますれば、善の行には善の酬ひ、惡の行には惡の酬ひ、此は寸毫も惑ふべきものでない、所が、今日實際に見聞する所に依て見ると、善人必ずしも富まず、惡人必ずしも貧しからず、イヤ、却て惡人には富豪が多くて、善人には貧者が多いとも云ふやうな有様である、ソコ、善因善果惡因惡果の因果の道理と現實の事實とが、ゴツト矛盾するやうに見える、昔から能く申しまする盜跖の壽、顔回の夭など云ふやうな事は、矛盾の甚しいもの、やうに見えます、かやうな有様でありますからして、随分物の道理の解つた人である

と云はれた人でも、こゝに至ると天道は是か非かと歎息するやうになる、シカシ、一
 昧善の行悪の行と云ふものは、その果報を豫想して行ふ所のものではない、またその
 善悪と云ふものは、その果報の有無によるものではないのであります、善は善それ自
 身が善なる故に行ひ、悪は悪それ自身が悪なる故に行はないのです、ソコデ、善はそ
 れに對する果報を待たずとも、善それ自身が幸福で、悪は悪に對する果報を待たずし
 て、悪それ自身が不幸であります、スビノザと云ふ哲學者が「幸福は徳の報酬にあら
 ずして徳其物なり」と申しましたが、實にその通りであります、特に佛教では、報酬
 を豫想した所の善は、眞實の善とは申しません、未だ利害得失と云ふ念慮を除いて居
 りませんから、此れを汚れたる善即ち有流善と申します、孝は百行の本と申しまして
 實に善行です、しかし、子が親に孝行をなすに、かくして親の機嫌を取り、首尾克く
 家督を相續しやうと云ふな考であつたならば如何でせう、眞の孝行と云ふことが出來
 ませうか、臣たるものが君に忠をなすに、かくして爵位を得たいとか名譽を得たいと
 云ふ念があつたら、それは未だ以て眞の忠とするに足りません、
 昔下總の國に與五兵衛といふ孝子がありました、其評判があまりやかましいもので
 ありますから、近村の惣左衛門といふもの、われも一人の親があるが、如何様にすれ

ば斯様に評判高い孝子になれるであらう、何卒それを見習ひたいものであると、其家
 に参りますと、與五兵衛は茫然として別に孝行などした覚えはござりませんと申しま
 すから、惣左衛門、その老母に向ひまして、與五兵衛どの、孝行の噂あまりに高くご
 ざりますから、その徳を慕つて参りましたが、如何様に孝行せられますかと問ひます
 ると、老母は、別に申し上ぐの程のこととござりませぬが、年來我が心に忝りたるこ
 となく、他所へ行くには必ず三たび別れを告げて出ますのだ、夜は一夜なりとも外
 に泊りたることの無いのと、今年三十五歳になります、母の心に合はぬ妻を有ちて
 はならじと申して今尙ほ獨身で居るばかりでござりますといふに、惣左衛門これを聞
 て、さても難有心掛かなと、さて與五兵衛に向ひ我れも常に孝道の志のないてはござ
 りませんが、兎角親の思ひたまふやうにならず、殆んど當惑いたして居りますが、御
 身は如何様の心掛を以つて母御に事へたまふやと問ひますと、外に心掛ます程の
 事はござりませんが、唯だ父母の影を踏まじ一夜も母に離れて他所に泊るまじ、何事
 にも心に戻るまじと思て居ります丈の事ですと答へたと云ふこととでござります、是れ
 易いやうて實は六ヶ敷いが、孝行もこゝに至らなければいけません、眞孝は孝を忘る
 念々是れ孝といふのは此所であり、忠といふも、大石良雄や、楠正成が何にも報

酬を豫想したのでござりません、即ち眞忠は忠を忘る念々是れ忠といふのであります、善と云ひ、惡と云ひ、忠と云ひ、孝と云ふ、それ自身より見れば報酬の有無に關するものではござりませんが、善惡の行爲は一種の勢力として不朽なものでござりますから、必ず一度は酬ひて來るのであります、只その勢力の強いのと弱いのとに由りて、早く酬ひるものがあり、遅く酬ひるものがあります、此を大別して三時とせられたのであります、一には順現業と申して、現世の所業善にもあれ惡にもあれ、作したる原因に由て直に現世に結果の來るのであります、次には順次生受業と申して、現世の所業が現世に其の報が來らずして、次の生に顯はるゝのを云ふのであります、またその次は順後次受業で現世の所業が現世にも次の生にもその報が來らず、二生三生乃至百生千萬生を経ても必ず一度は來るのであります、此の道理は佛々祖々の道を修習する上に於ては、是非とも能く心得なくてはならぬ事柄であります、吾れくも互、動もすれば、淺基な了簡からして、種々の疑念を挟み、折節佛々祖々の大法に遇ひながら邪見とてよこしまな考に陥るものが少くないのであります、それは、此の現在一世のことは、見も聞きもし五官の感覺が解ることが出來るから信じますが、未來のことになるとなかく信じない、しかし、これは餘りに淺基な考えではござり

ますまいか、此の時間といふものは、空間の无邊際なるが如く死限であります、その無限の上にお互の生涯を標準として、過去現在未來と便宜上分つただけのことです、すてに此の時間は無限であるが、此の善をなしたる業惡をなしたる業も一種の勢力として存在すべきものです、物質が不滅だとか、勢力が恒存だとかは、早や實驗と推理を土臺として居る所の科學が證明して居りますから、疑ふ餘地は無いのであります、その勢力なるものが、恒存不朽であるとしたならば、何時か發現することは無論認めねばなりません、然るに、此の道理を心得違つて、現世一世の利害得失の上より打算して世渡りをいたしますから、人間の普通道德たる五戒十善も無視して、人の顔をしながら禽獸の行をいたしますから、惡道に墮ちて長時の苦を受くるより外はないのであります、實に憐れむべき事ではありますまいか、高祖大師の御訓誡、利那も忘れてなりません、

吾れくも互が、その日その日に善事なり惡事なりを爲すのは、譬へば、農夫が田畠にいろくゝの種子を下す様なものであるのです、その種子が種々です、三日か四日かて芽を出すものもござりませうし、一週間二週間の後に芽を出すものもござりませう、所が中には一週間や二週間ではナカく芽を出すことが出來なくて、種子

を下した農夫も忘れた頃に漸く芽を出すものがあります、かやうに遅いと速いの時間の相違はありますが、一度下した種子ですから、一度は必ず芽を出すものであります、吾れくの行爲もその通り、一度善なり悪なりをなしたならば、随て一度は酬ひるのであります、此の觀念は、佛教信者としてのみならず、人間として、此の社會に存在し、偉大なる事業をなすには、是非ともなくてはならない考です、今年死なれました彼の英國のセシル、ローソの如きも、幼少の時分に、或る老人が櫛の木を植えて居るのを見て、ローソが老人に向て、高齡の人が折角木を植えてもそれは自分の爲めになることは到底ないでせうと云つたら、老人は除に答へて、我は早や高齡のことであるから此樹の蔭に楽しむことは出来ないのであらうが、此の樹に對する觀念と、此樹の蔭影と、此樹の光榮とは長へに余と共なるであらうと申したから、ローソも此の語に非常に感服しましたさうですが、彼のローソが成長の後百難を排し身を挺して以て南阿事件に盡しましたのは、此の老人の語が與つて力あつたと云ふことです、實に人間は永遠の觀念因果應報の觀念がなくなつたならば、自然に自暴自棄となり、今日主義となりて、偉大な事業や、眞面目な事をするとは出来ないので、また如何なる危急な場合に臨んでも泰然たる事が出来るのは此の觀念あるからです、

彼の大石義雄と云へば、武士の龜鏡、人の花であります、その辭世の歌に、「極樂の道はひとすぢ君ともに阿彌陀をそへて四十八人」と詠じました、此の歌に依つて、大石が死後の觀念を有して居つたかと云ふことは、大略解りますが、此の堅固なる信仰確乎たる觀念があつてこそ、彼の大事件を首尾克く遂げたであらうと思はれます、かやうな例は、古よりの偉人哲士には随分ありますけれども、今は略しますが、何卒佛の教祖師の誠に依り、なほまた古來の偉人の言行に照し、ますく此の三世因果の道理を信じて、日々の業務に従はれんことを希望いたします、

第六席 (邪見を破す)

當に知るべし、今生の我身二つ無し三つ無し、徒らに邪見に墮ちて虚く惡業を感得せん、惜からざらめや、惡を造りながら惡に非ずと思ひ、惡の報あるべからずと邪思惟するに依りて、惡の報を感得せざるには非ず、

サテ、此の御聖語は、『修証義』の第六節で、互人身と云ふものが、非常に受けがたいと云ふことも、佛の御法と云ふものも、容易に遇ひがたいものであると云ふことは毎度申す所であります、凡夫の淺ましいことには、それ丈は承知しても正信正解と

云ふことが、ナカク出来難いので、そのまるく反對である所の、疑ひであるとか、邪解とか云ふツマラヌことのために迷つて居るものが多ひのです、此の一念の疑といふものが恐ろしいもので、人間の苦樂昇沈の原因といふてもよろしいので、てその疑が一步進で邪見となる、邪見にも種々あるが、高祖様のお示しに「今の世に因果を知らず業報を明らめず、三世を知らず、善悪を辨へざる邪見の黨侶」とあるが、その重なるものである、人間が因果の觀念や、三世業報の道理や、善悪正邪を辨へない以上は、駿馬を曠野に放つたやうなもので、恰んど底止する所がない、けれども、如何にその人が、因果を無視したからと云つて、因果は決してその人を容赦せない、如何に三世業報の道理を無視したからとて、業報は時々刻々にその人の身邊を襲ふのであります、善悪正邪もその通りです、一體、此の因果とか、三世業報とか、善悪正邪と云ふのは宇宙の大法則であるから、自分々々に理窟を捏造して威張つても何の用にも立たぬのであります、決して佛様の製造なされたものでもなければ、祖師の立案に成つたものでもない、世間には、因果とか業報とか云へば、佛や祖師の製造品で、佛敎の專賣特許であるかの如く考えて居るものが随分あるのです、かやうな事は、随分に學問もあつても可なりに物の道理の解つて居るらしい人々に却つて多い、ソコで、佛は聰明は却つ

て道を修するの障となるとも仰せられました、このお誠は、よく省みてゆかねばならぬことです、或人が因果應報は宗教敎義であると申しましたが實に尤もなことです、單に一箇の學説としてのみ考えてはなせぬ、人々皆胸に手を當て、自分の心に問てみねばならないのであります、天罰の意思は自由であると云ふ考は吾々の心に斯へて拒むべからざることでありますが、その自由は善にあれば、行動した結果は消滅しないと云ふことも吾々の心に訴へて拒むべからざることであります、然るに、世間には十人十色でありますから、數多き中には善悪を無視し因果業報の道理を自分勝手に否定して平氣で居るものがないとも云へない、イヤ、今日はかやうな連中は少からざるのです、しかし、前にも申します通り、自分勝手に因果を否定し善悪を無視した所で、宇宙の大法則は到底動すことは出来ませんからして、因果業報の制裁を受けぬ譯にはまいりませぬ、

昔より「死の字嫌ひ」と云ふ人が随分有ります、死と云ふものは嫌なものであるからとて、平素の言語の上でも、鹽と云へば「し」「死」と普通で縁起が悪るいからと云つて殊更に「浪の花」など、洒落る、かやうに一から十まで死を嫌うが、その人は死を免るゝとが出来るか云ふに、それは容易に出来ない、イヤ、決して出来ない、生物

あつてより以來の事實が歴々證明して居る、因果業報と云ふもその通りで免れやうとしても免れることは出来ないのです、ソ、ユ、デ、此れは免れやうか逃れやうかと云ふ、ツ、マ、ラ、ヌ事^{コト}は止^とめて、進んで此の道理を利用し此に順應すると云ふことをせなければなりません、人類の發達と申して、此のツ、マ、ラ、ヌ凡^ソ夫^ハ吾^レれ^ノが、佛の境界に進むことが出来るのは、此の道理を利用するからです、社會の進歩として、此の罪惡の社會を改善して完全なる社會に進め、娑婆即寂光淨土と云ふ様に進ませるのも、ヤ、ハ、リ此の道理によるのです、如來一代四十九年の御教化も、五千餘卷の經論、八萬四千の法門、此の道理が根底土臺となつて居りますから、十三宗、三十餘宗を異にし派を殊にして居りまして、此の根底に至りましては、一貫して居りますから、何れの宗派の人でも、此の點に就いては、相異はありません、^テ何卒、かへすくも此の道理を信じて、佛教信者の本分を盡したものであります、

(典據) 一大事因縁とあるのは、法華經方便品に「諸佛世尊は唯一大事因縁の爲に世に出現す」、人身得ること難しは般若經に「人身得ること難く佛世値ふこと難し」、涅槃經に世に生れて人と爲ること難し、佛世に値ふこと亦難し、猶大海の中に盲龜の浮孔に値ふが如し」、尙ほ金言の部を参考せらるゝがよい、

(金言)

涅槃經に曰く、一闍提は因果を信せず、慚愧あることなく、業報を信せず、現在及び未來世を見ず、善友に親まず、諸佛所説の教誡に隨はず、是の如きの人を一闍提と名く、諸佛世尊の治する能はざる所なり、何を以ての故に世の死屍は醫の治する能はざるが如し、

遺佛經に曰く、當に知るべし世は皆な無常なり、會ふものは必ず離るゝことあり、涅槃經に曰く、人の命の停らざることとは山の水よりも過ぎたり、今日は存ずと雖も、明日まで亦保ち難し、いかなぞ心を縦にして惡法に住せしめむ、法句經に曰く、河駛せ流往きて返らざるが如く人命も亦是の如し、西行法師曰く、人界に生まるゝことは梵天より糸を下して大海の底なる針の穴をつらぬかんよりは難く佛教にあへることは一眠の龜の浮木の穴にあひたらんが如し、大尊經に曰く、妻子珍寶及び王位命終の時に臨みて隨ふものなし、平維盛曰く、山に入り市に交りても遁れ難きは無常の使、關を固め兵を集めても防ぎ難きは生死の敵、

因果經に曰く、前世の因を知らんと欲せば、則ち今世受くる所の者是なり、後世の

果を知らんと欲せば、則ち今生に爲す所の者これなり、
涅槃經に曰く、善惡の報は影の形に従ふ如し、三世因果循環して失はず、此生空しく過ぎなば、後に悔ゆるとも追ふことなし、

永嘉大師曰く、諸行無常一切空、即是如來大圓覺

承陽大師曰く、大聖は生死を心に任ず、生死を身に任ず、生死を道に任ず、生死を生死に任ず、

又曰く、生も一時の位なり、死も一時の位なり、譬へば冬と春との如し、冬の春となると思はず、春の夏となると云はぬなり、

シモックスピヤー曰く、人生は悲の相續者なり、

ミル曰く、世人の多くは大道を知らずして醉生夢死するものなり、

コルレッチ曰く、懶惰の人は光陰を殺し、眼勉の人は光陰を活かす、

モスレー曰く、善事は善事を生ず、其増殖すること實に驚くにたえたり、善は獨りならず、惡も亦獨りならず、

(和歌)

生れ來てなむみだぶに遭ふことをねてもさめてもよろこひぬへし (親鸞)

行末をおもふに袖のぬるゝかなつひにのかれぬ道芝の露 (源高秀)

つく／＼と暮るゝ空こそ悲しけれ明日も聞へき鐘の聲かは (貫之)

世を照らす光りは人をわかねどもわか身にくらきのりの灯火 (覺圓)

手にむすぶ水にやどれる月影のあるかなさかの世にこそありけれ (貫之)

末の露もとの甲や世の中のおくれさきたつためしなるらん (遍昭)

ちとせともかきらぬ君の春秋はかゝる御法のしるしなるらん (殿中將)

みる毎に涙こぼれてはてしなし我が身に代る影とおもへは (源高秀)

火の車つくる大工はなけれどもおのか造りて己かのりゆく (源高秀)

よしあしのうつる心の水がゝみよく／＼みれば我が姿なり (源高秀)

かそへては足らぬを鳴くや友千鳥 (青林)

あすまたぬ世に折られてや菊の露 (涼僊)

やどりせよ人には百合の鬼もなし (希因)

長き日や暮にはかはる飛鳥川 (涼州)

つけたのは人の智慧なり猿回し (車起)

(譬喩)

生死を氷に譬へるは随分陳腐であるが、一番わかり易い、物理学や化学で説く物質不滅や勢力恒存の道理を以て手近い所のものに例をとるがよい、蠟燭がともつてをれば、この蠟燭はなくなつたやうだが立ちのぼつたる炭酸瓦斯はこの空中に温存してをるといふやうな話をして生死を説明するのも面白い、氷に譬へるに就て古歌に

雨霰雪や氷とへだつれどとくれば同じ谷川の水

といふのがある、雨や霰には生死あるには氷にはない、併しこれは決してとけてから同じ谷川の水となるのぢやない、生死そのままに混繋であるから、後醍醐天皇の仰せられた如く

如何なれば雪や氷とへだつらんとけぬもあなじ谷川の水

であるのぢや、よくくこの道理を呑み込めて話をせぬと本宗の宗意に背きまするぞ、

人が得ること難しといふこともたゞ昔流の荒唐なる説き方では面白くない、これは人類の此世に現はれるには、非常に多くの年月を経たことを話し、われくも植物も同じ單細胞といふ小さなものであつたが、終に此高等なる人類となるまでには、

ヘルムホルツ氏の「西洋の學者」説によると十七億萬年もかゝり、人類が出来てからも、今日のやうな便利の世になるまでには數十萬年も経てをることを話すがよい、これにはダルウイン氏の生物始原やスペンサー氏の進化論を参考するがよろしい、因果を説くにも、此進化論を應用して説明するがよい、因果といふことは決して佛教の特有ではない今日科學に於て疑ふべからざるものとしてをるのは

- 一 物は客觀的に存在する事
- 二 因果の理法の普遍なる事
- 三 現象間の關係を定むる自然法の確實なる事

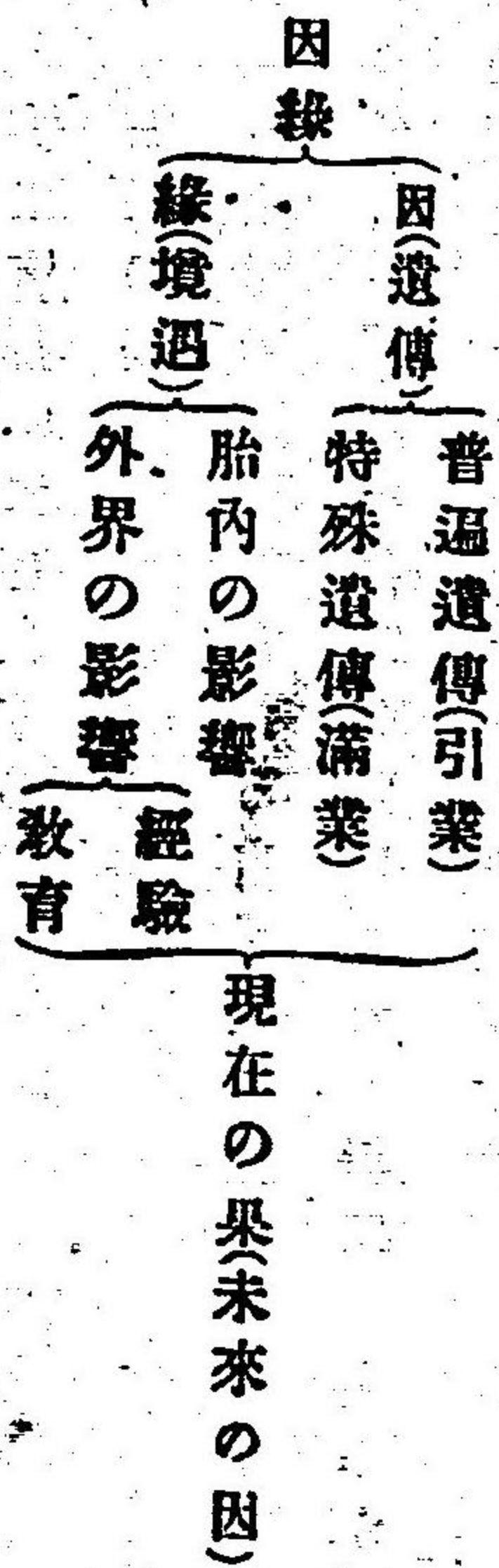
との三つである、これに疑を入れるのが哲學であるが、普通に此三つは認容せられ、如何に哲學といへども因果の普遍なることは破ることが出来ぬ、この三つはハックステー氏が科學の發送點とした所であるから、この物理学を應用して因果を説くのは尤も便利である、且つ疑ふべからざる法則であります、

善因善果のこともこれを道德的に説明するのは、昔の説教の本にいろく因縁話がわかりますから、これも進化論によつて科學的に説明するのが面白い、それは父母の精神若くは身體のよいところは子に遺傳し、よし直に子に遺傳せずとも、其孫に遺

傳することがある、孫でなくとも曾孫に遺傳することがある、のであるから、これ
て順現、順次生、順不定の三時業を説明することが出来る、進化論と佛教に應用す
ると、

父母の遺傳(因) 境遇(縁)

となつて次ぎの表が出来る、



となる、普通遺傳といふのは、人の子に人が出来るといふやうなもので、特殊遺傳と
いふのは、父祖の能力が子孫に遺傳するのをいふたので、この進化論の唱首たるチ
ヤールズダルクウィンの祖父はエラスマスとて有名なる博物學者、父は有名なる醫師、
さて此ダルクウィンの子はヨルタルウィンとて有名なる天文學者であつたやうなも
のちやこれらを適當に使用して三世因果を説くの譬喩とするがよい

(因縁) 生死の話をするのに尤も適當な因縁は、楠正成の話である、これは大内青巖
氏が、いつも話をせらるゝて其一節を抜いて参考にする、「上略」天子様より佛日饒
慧禪師と云ふ勅號まで有つた碩徳でございます、楠正成明極楚俊禪師に御目にかゝ
つて問答をいたした「生死交謝の時如何」と、是は生を謝して死と入交るの時即ち
今死ぬると云ふ時には如何云ふ心得をして居たならば宜しうございませうかと問ふた、
明極楚俊禪師答へて仰せらるゝには「兩頭共に截断して一劍天に倚て寒し」と、
答へなされた、是は生と云ふものも死と云ふものも皆切捨て仕舞へ、生と云ひ死と
云ひ苦と云ひ樂と云ふやうな兩頭が目の前にぶら付て居る様ではいけんぞ、其兩頭
すなはち、生死苦樂等を切捨て仕舞へば、生也全機現、死也全機現と云ふ事になる
がその話は六ヶしいから止めて、免に角君の爲め國の爲めに臣民の本分を全ふする
時には、生て居るとか死ぬるとか云ふ事が氣に掛る様では不可、生死を離れるとか
迷を捨て悟を開くとか云ふて、其の悟と云ふものが跡へ残てはつまらん、切てく
切り拂て仕舞はねば本當の悟と云ふものでない、味噌の味噌臭きは上味噌にあらず、
箇様に生死苦樂の兩頭を截断せは一劍天に倚て寒し、對待の邪魔物はガラリと晴れ
て其玄妙なる處は何んとも何が付かん、然るに楠正成「畢竟如何」と云て愈々の結

果は如何でございますか」と落着く處を問はれると明極楚俊禪師は前には理屈で済んだがモ一理屈ではかなはん、文字を離れて威を振つて大喝一聲この一喝と云ふことは禪宗の人達が能くやる臨濟の一喝と云ふことがあるが、昔さん今の一喝は如何解釋が出来たは是れだけは康熙字典を引いて見ても分らん、又云つた聲を調べて見ても分らん、これは理屈を離れた上の事で、愈々實地に行く」と理屈を離れて仕舞ふ、此時楠公は全身に汗を流したとある、スルト明極楚俊禪師之を御覽になつて「汝徹せり」と仰せられて公の悟られたことを證明なされた、ソコテ正成「若し来て和尙に見えずんは安んぞ向上の關捩を超出することを得ん」と云て今日貴師の許に參て此事を明めなかつたならば、如何して此自由を得られましやうぞといつて大に喜んで佛様に禮拜をいたし禪師に暇を告げて廣嚴寺より出られて其翌日尊氏の軍を相手に野戰十五回遂に舍弟正季及び麾下の士卒を引連れて無爲庵に入て切腹いたしました

た」
無常なことを示すのに、蟬丸の話をしたが、寂蓮法師にも同じやうなことがある或る時法師が二三の人と歌語りをしてとられたが、フト「ますほのすゝき」といふのは、どんなことであらうといふ疑が出た、スルト坐中の人誰れもわからぬが、たゞ

一人、此事をは攝津の渡邊あたりを知る人かありといひますると、法師は、さらばそれへ參つて教を受け來らんとて出かけまする時に雨が劇しく降りまするで、人々雨やみてから立ちたまへといふに法師はいな／＼無常定め難き人の身の、若し其人の死にたまはゞ誰れも此事を教ゆるものがなくなるであらう、明日をといふ中に、我れ死なば、聞くべきものもなくなりなんとて、雨の中をワザ／＼出かけてゆかれ

たといふことである、道に志すものはこれ位の覺悟がなくてはなりません、桑田變じて海となる、まことに世の中は浦島の玉手箱、青春の夢さめやらすして、早くも白髪の人とならねばならぬ、これに就て面白い話はアメリカのハドソン河に近い村にリップ、フハン、ウインクルといふ人があつた、或る時山に入つて仙人の飲む酒を呑んだと思ふとトロ／＼と睡氣を催して寝てしまつた、やがて目さめて見ると自分の持て來た鐵砲は新しいものであつたが、それか朽ちかけたのと代つて居る奇態なことじやと山を下りて、自分の村へ歸らうとすると、道行く人が皆な自分の髭をながめて、觸れて見ると五六寸も伸びてをるさて村に入ると村の狀態もかわつて、自分の家は舊い家のやうになつて、村には一人の知人もない向ふから自分に似た人が來るで不思議に思ふて聞くと、それか自分の子で、自分が山に一睡し

てをる間に數十年を経て、これまで英吉利の領分であつた、アメリカが今は獨立して共和政治の國となつてをるのであつた、一睡五十年は支那の塵生(ちんせい)の話ばかりでもない、アメリカにもこんな話がある、これを面白いといへば頗る笑はすことの出来るもので世の轉變(てんぺん)を説き示すことが出来る、詳しくはアービング氏の小品文にある、善因善果(ぜんいんぜんくわ)のことも歴史の上で證據立ていふと正確に聞える、昔流の怪談(かいだん)のは成(な)服せぬが、歴史上の事實によつて論ずると誰れも否定することは出来ぬ、先づ暴横(ぼうごう)なる平清盛は其の報ひとして源氏の爲めに倒されてしまつて平氏の後は全く絶えたが獨り賢明で忠孝を兼ねた平重盛の子維盛(いせい)だけは生きのこつた、サテ其維盛の子孫が終に織田信長(のぶなが)となつて天下を一統することとなつた、これらは善因善果の、よし一世に見えずともいつかは報ゆることを示すよい例ではないか、それから又初めて政權(せいけん)を武門にとつたのは源頼朝(よりのちか)と大江廣元(ひろもと)とであるといふことは、誰れも疑はぬ、サテ政權を天皇陛下に奉還せしめたのは誰れてあらう、云ふまでもなく、薩摩(さつま)と長州(ながしゅう)と、其薩摩の藩主島津家(しまづけ)は頼朝の子孫で、長州の毛利家は大江廣元の子孫ぢや、して見ると父祖が奪つた政權を子孫が返したやうにも見えるこれらも因果といふことが出来なくはないのである、かういふ例は澤山あるから、それによつて説明

するがよい

第七席 (懺悔の功德)

懺悔滅罪

サテ、此の世界中にありとあらゆる宗教と云はるべきものを調べて見ますると随分數多くござりまして、その教理の組織や、教會の儀式習慣等、まことに複雑多端(ふくさんたつたん)で、中には同じく宗教と云ふ語の中に攝めらるゝ者に、かやうなものがあるでわらうかと云ふ様に、全然反對なやうに見えるものがあります、手近い所で見ますと、此頃亞米利加(あめりか)より渡來(わたり)しましたモルモン宗と基督教とは如何です、一方は一夫多妻主義(いつふうたさいしゆぎ)を神の意であるとして申しますが、他の基督教の方では、一夫一婦主義を以て正しき道と申します、まことに面白い状態ではありませんか、その他、基督教と佛教と比較し、佛教とマハメット教とを對比(たいひ)いたしましたならば、是れ亦随分氷炭(ひょうたん)相容れ(あひま)ない所があります、所が此等種々雑多の宗教を通じて一致する所のものがある、それは種々ありますけれども、先づ見易い所のものは、何れの宗教も悔(くわい)の改めよと教へることであり、更にまた、佛教と申しても十三宗三十餘派と宗を別にし派を分つて居りますけれども、何

れも此の意味の教があります。特に我宗では、信者たるもの、安心起行の標準とすべき所のものを四ヶ條にすべ括つて、懺悔滅罪、受戒入位、發願利生、行持報恩の四大原則と申します。その中の一番最初が悔い改める即ち懺悔滅罪であります。一昨、懺悔と云ふ語は、梵語と漢語とを並へ挙げましたので、先づ懺と云ふは詳しく申しますと、梵語では懺摩と云ふので、漢語に譯すると悔過となるのです。今は懺摩の摩を略し悔過の過を略し、兩方合して懺悔と云ふのであります。此の懺悔が即ち悔い改むると云ふこととありますが、これにも、理懺事懺と云ふ二種の仕方があります。先づ理懺と申しますのは、「普賢觀經」の中に若欲懺悔者、端坐念實相、衆罪如霜露慧日能消除とあります通り、罪性畢竟不可得なりと悟り、更に我と云ふ除く方の觀念も離れ、無我無念能所を離れ、染淨を離れるを云ふのであります。まことに高尚な道理であります。しかし、かやうに申せばとて、只此の理懺だけで宜しいかと云ふに、それは決してそう云ふ譯ではない、高祖大師のお思召は、その高尚なる道理を極く手近く事實の上に現はして行く御流儀でありますから、この懺悔に就いても、理懺と云ふ道理の懺悔の上では能く解つて居ても、必ず事相の懺悔儀式の上に掛けなければ出來ないのであります。かく申せば、近來少し學問などした人達は、随分馬鹿な理窟を

云ふことがある、それは、吾れ〱人間に無始劫來罪過があると云ふのは、餘り人を輕蔑した言ひ分である、吾れ〱に耻辱を與へると云ふものである、我れ〱は此の世に生れてから、三十年五十年世の中の批難を受けたることもなく、何の罪も造つたこともない、然るに我れ〱を指して徒らものである、悪いものであると云ふのは、實に思ひもよらぬことであると云ふ、此れは一應尤もらしく聞えるが、それは此の人間と云ふものを只五尺の身體五十年の壽命のものとして見るからである、元來、吾れ〱は、無限の空間と無限の時間とを通貫し宇宙と一枚のものである、所が何時しか一念の無明の浮雲が胸中に現はるゝや、見す〱八萬四千の煩惱は一面の黒雲となりて、人々の本體は此がために覆ひ隠れたのであります、ソコで離れ教めるとなく貪瞋痴等の小さな利欲のために淺間敷い月日を暮して居る、此様の状態でありながら、自分で自分の状態に気がつかぬものであるからして、懺悔滅罪など申せば、ツマラヌ理窟を並べて耻の上塗りをするのであります、淺間敷次第ではありませんか、悔懺々々と云へば、何か他人の身の上の話のやうであるが決してそう云ふものではない、自分々々の心の洗濯である、

照へて云ふならば、こゝに一人の貧しき人があつて、早や幼い時分より賤しい仕事に

ばかり従事して居つて、頭髮は蓬の如く顔は垢の塗りもの見たやうなものが、たまたま何かの事から出身の運が開けて、此れから世間に出て、一人前の紳士として、活動せやうと云ふ時に、鏡に向つて我が姿を見て蓬の如き頭髮、垢じみたる顔を見て、これでは到底人の前に出て交際をすることは出来ない、急に入浴をする様なものであります、お互吾れとわが身を回顧れば、無始劫來六道輪廻の賤しい仕事にのみ従事して、煩惱の頭髮は實に蓬の如くに生ひ繁り、見惑思惑の垢は本來の顔姿態を隠くして居るのに、何時となく佛の慈悲の光りに照されて、ヤット、生佛不二凡聖一如の道理で、佛全様の活動をせやうと云ふ時に、古教照心で佛祖の御教訓の鏡に照して見て、自分の姿態に氣が付いて、これでは、生佛不二とか凡聖一昧とか、立派なる議論を振り廻はしても、この蓬頭垢面のまゝでは、紳士の仲間入り即ち佛様や祖師と手を携へて活動する譯にはいかな、先づ此の生ひ繁りて居る所の煩惱の頭髮を刈り、見惑思惑の垢を洗ひ落さなければならぬと、急にその方法に取り掛かるのが、此の懺悔滅罪であります、

こゝに、戸川殘花と申せば、『三百諸侯』と云ふ本を著はし、その他種々の著述のある人て世間に随分開えた人でありますが、十年許りもなりましたか、或日のことに、一

人の男が名刺を通じて面會を請ひましたが、主人の戸川先生は、その姓名が今迄覺えないので、これは若しや軒違ではあるまいかと、一應注意をせられたけれども、その男はイヤ決して軒違ではありませんから是非戸川先生に面會したいと申しますので、戸川先生もヤット面會をされて見ると、その男が涙ぐみて申しますには、私は慚かしき身の上で、犯せる罪がありまして、去る十五年の夏、北海道樺戸なる監獄署に囚人となりましたが、その時分に、先生のものされたる『白露』の一篇を拜見しまして、シミ／＼私の身の淺間敷いことを感じ、始めて懺悔の念が起りましたが、月日は早いもので、此頃満期となりまして出獄いたしました、此れからは、先生のお蔭で人間らしい生涯を送りたいと思ひますから、何卒今迄の罪過はお容るしくだされて此れからのお救ひを願ひますと申しましたから、戸川先生も非常に感動をせられて、人たる道をお説き示してかへされたことと云ふこととてありますが、その人は、今現に東京の本郷駒込と云ふ所に古道具屋をして清き生涯を送つて居ると云ふことであります、その『白露』と云ふのは、お互人間は無常變遷常なきものであるけれども、天地の一大法則は嚴然と行はれて居ることを詠ふたのであります、その一節を擧げて見ますれば、

葉守りの神の勾玉か、

木鑿のつなぐ管玉か、

誰がつくりしか露の玉、

誰がよそひしか露の玉、

朝日の影にながむれば、

七ツの色のうるはしや、

此方よりつくくみれば色はなし、

彼方よりしみくみれば色はあり、

朝の手よりもれいでし、

珠はたちまちくたれど、

日影の袖に包みたる、

露ははらくきゆれども、

水と光はかはりなく、

千代も八千代も極みなし、

能力こそいと尊とけれいぶかしや、

天則こそいとも妙なれいぶかしや、

と云ふのです、これを浮つかり讀みましたならば、たゞ文字が婉麗で口調が面白いと云ひ過ぎませんが、近く自分の身に引き當てて見ますれば、その人一生の教訓となるのです、一篇の詩さへも此の通りですから、佛や祖師の大慈悲より溢れ出てたる所の御訓誡は、一言一句が皆な吾れ々の罪過の霜露を消してゆく旭日の光りでありませ、所が、只惜いことには、自分の財産や、爵位や、學問や、我見我慢が障りとなつて、折角のお慈悲の光を受くことが出来ないのは、かへすくも残念なことで、これは只一生の遺憾ではない、千生萬劫の憾みてありますから、我見、我慢、増上慢を抛つて一刻も早く懺悔滅罪で自分の身心を浄め、進んで受戒入位と佛の仲間入をして、國のため、社會人類のために自利利他二利圓滿の行持をいたして、難値難遇の生涯を甲斐あるやうに送りたいものであります、

第八席 (廣大の慈門)

佛祖憐みの餘り、廣大の慈門を開き置けり、是れ一切衆生を證入せしめんが爲めなり、人天誰か入らざらん、彼の三時の惡業報必ず感ずべしと雖も、懺悔するが如きは重き

を轉じて輕受せしむ、又滅罪消淨ならしむるなり、
此れは、『修證義』の第七節に示した所の聖語でありますが一體、
佛様や祖師方のお心と云ふものは如何なるものでありませう、佛教信者たる所のものは、特に此の點を能く心得て居ないと、折角の佛様や祖師のお思召も、無駄にすることがあります、サテ、そんならば、如何なるものが佛様や祖師方のお心であるかと云ふに、これは外ではありません、お經の中に「佛心とは大慈悲是れなり」とあります通り、大慈大悲の心がすなはち佛の御心であります、慈と云ふのは興樂と申して、樂みを與へること、悲と云ふのは拔苦と申して苦を抜いてやるのであります、語を換へて申しますと、苦るしい境界を出て、樂しい境界に轉じさせてやります、のお思召でありまして、或る人の歌に佛とは何をいゝまのこけむしろ慈悲より外にくものはなし、とあるが、實にその通りであります、所で、此慈悲と申すのは、語を換へて申せば、佛性とも本性とも云ふのでありますから、是れは誰しも無いものはありませぬ、世間の諺に鬼の眼にも涙だと申します通りに、如何に殘酷な人でも、何かの場合には涙に咽じて同情の念を起すことが無いと云へませんが、なべて吾れ々互は、我見我慢等の狭い量見て居りますから、その同情の範圍がまことに狭いが、こ

こにザツ、廣いと狭いと次第を申して見ますと、三種に分ちます、第一には衆生縁の慈と申します、一切衆生即ち生きとし生けるものは、皆な是れ親子兄弟の關係ある如くに觀じて慈悲を行するのであります、第二には法縁の慈と申します、これは觀念が一層進んで一切衆生所有諸法は因縁より生じたる所のものであると觀するのであります、第三には法縁の慈と申します、これは、更に一層高尚な考を以て、我と云ひ彼と云ふて、慈悲を行するもの、慈悲を行せらるゝもの、あるやうにあらねども、看れば能所一枚であるとなつて觀するのであります、佛様方は、此の無縁の念に住して慈悲を行されますから、從切至切衆生を濟度遊はしますけれども、少しも誇る心も高慢の心もない、それに比べると、人間と云ふものは淺間敷いもので、同情の範圍がまことに狭い、僅か自分の親子兄弟夫婦位に過ぎない、一家の中に衣食住をして居る奴婢にも同情の光りが及ばない、況んや、禽獸草木は無論であります、何卒佛教信者たる者は、佛様の御慈悲を信ずると同時に自分も幾分かづ、同情の範圍を擴めないで、佛教信者の面目が立ちませぬ、話しが少し横道に這入りましたが、翻て前に申しました通り、大慈悲の御心より廣大なる慈悲の門を開いて、吾れ々衆生の入り来るを待たなつて居る、その廣大の門とは、何であるかと云ふに外ではない、即ち此の懺悔

の門であります、吾れくが無始劫來迷ひに迷ひ狂ひに狂ふて居るのが、一刻も早く、あゝ、今までは淺間敷い境遇に陥つて居た、久しき塵垢の中に埋れて光りを失つて居つた玉が、忽ちに自から光りを放つて自身を照すがやうに、廻光返照させたいものであるとの思召であります、今「佛祖憐みの餘り、廣大の慈門を開き置けり、是れ一切衆生を照入せしめんか爲めなり」とあるのは、ツマツかやうな思召を申されましたのであります、サ、此迄佛祖のお慈悲に預りながら、この門に這入らないと云ふ者はあるべき筈がない、「人天誰か入らざらん」と仰せられたのは、尤もな事であり、然るに、お互は無始以來よりの悪業が積み重りて、順現業と申して現在現世に受くべきもの、順次業と申して次生に受くべきもの、順後次受業と申して二生三生乃至百萬生を経て受くべきもの、此等の業報は、必ず感ずべきものなれども轉重輕受と申して普通佛教で申す如く重い業報も軽く受ける位ではない、滅罪清淨と申して、「普賢觀經」の中に、數限りも無い罪過も、一念廻光返照するときは、譬へて見れば、冬の夜に積みに積りし霜が、朝日の光りに照らされて、痕なく消え果つるがやうに、サツパリと消除することが出来るのであります、頓教と申しませうか、圓教と申しませうか、若しかやうな名目を設けるとしたならば、極頓極内の教と申すより外はありませぬ、

仰て信すべきこととてあります、試みに、吾れくお互の今日の狀態を譬へて見ましたならば、自分の着物の中に縫ひ込んで居る所の寶玉を打ち忘れて、諸國に流浪遍歴して風に掃り雨に沐して、非常に辛酸を嘗め、自分も自暴自棄てヤクになり、他人も人間並の待遇をせない、まことに淺間敷い状態で彷徨して居つたのが、不圖、親切なる人に助けられて、久しい以前に衣の中に縫ひ込んで居た所の寶玉を教へられて、驚きながらその寶玉を取り出すやうなものでもあります、本來佛性の寶玉は、火に入つても焼けるものでもなければ、水に入つて溺れるものでもない、百年千年、風に掃りたからとて、雨に沐したからとて、増すことも無ければ減することも無い、しかし、その寶玉を持つて居ることゝ氣が附かぬ間は、自暴自棄でヤクになれば、道ならぬこともするが、一旦寶玉を持つて居ることを、人に教へられて氣が附いてみれば、以前が慚しくて堪えられぬ、かやうになれば、人から依頼されても悪るい事は決してせぬことになる、所が、此れまでに、なるには、まことに口先や筆先では到底現はす事の出来ない程に佛様や祖師方の御難題になつて居るのです、世間でいたづらな子ほど親は可愛と申しまして、或人の歌にも人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかなとある通り、他人から見

ると慈悲やなさける程があるに餘りの事であるとして、評判せられても、子のためには我身を忘れて盡す、今佛様や祖師方の吾れくのためにも慈悲を垂れて下さるのも、それと同様で、何れの祖師方も不惜身命と申して、自分の身も命も捨てる積りて盡し下されましたが、今こゝに、その中の一人の事柄を述べてみませう、それは奈良朝の時代です、鑿真和尚と申す方であり、此の方より往きました榮叡とか普照とか云て専ら戒律の法門を弘めて居られました、此方より往きました榮叡とか普照とか云ふ人達の話によりまして、何卒日本に戒律の法門を弘めて人民を救済したいと云ふを思召で、唐の玄宗皇の天寶元年に舟を醸して出發の途に就かんとする間に故障が起りました、その故障と云ふのが冤罪のために獄に投ぜられましたので、それから、翌年の天寶二年十二月に、佛像や經論佛具書師等、八十餘名を率ゐて出發せられました、今度は非常激風のために遮ぎられて、飛んでもない所に漂着せられました、それから猶未だ屈せず、翌三年に出發せやうとせられましたが、その間に故障が出來て出發することが出來なかつた、それから、天寶七年にまたく舟を醸して出發せられました、今度も風波のために他の所に漂着せられました、鑿真和尚が最初出發をせやうとせられてよりこれにて五回です、大抵の人であるならば、最早志も

屈して仕舞ふべき所であるのに、和尚は決して中止するやうことはなされませぬ、殊にかやうに兎や角する間に、自分の杖とも柱ともなるべき弟子方も、或は病死をなし或は袂を分つと云ふやうな事があり、そのみならず、和尚も多年の辛苦艱難のため眼病を患はれまして、憐れ盲目となられました、それでも最初の法を傳へて救つてやらうと云ふ志は、依然として堅く、遂に天寶十二年十一月、遣唐副使胡塵と同船して出發せられました、今度もまたく風波の難に遇はれましたけれども、幸に覆船丈は免れ、孝謙天皇の天平勝寶五年の冬、ヤット、薩摩の國に着せられ翌六年都に上り、戒壇を設けて授戒會を行ひ、先づ聖武上皇を登壇せしめて菩薩戒を授け、次に皇后様皇太子様より公卿百官等、授戒するものが百三十餘人であつたと云ふことであります、それより次第に評判が高くなり、後に天下の三戒壇と申して、大い戒壇を三ヶ所に置き、全國の授戒者を司らしめられました、今日後世からその當時の事を考えて見ますと悲喜交至るのであります、今日から、ザット千二百年以前、まことに交通の不便な時代に、しかも、齡七十を超へたる盲目の身でありながら、言語も通せぬ外國に渡來して、上は一天萬乘の陛下より下は百官の歸依を受けられたと云ふものは、弘法救濟の情が溢れく、かやうな始末となつたのであります、畢竟する所は、吾れ

吾れに大慈悲の門戸を開かんがためてあります。その他、時代は異なり人は別てあ
ますけれども、何れの祖師方も、吾れに法門を聞かせやうとの事から、如何程
苦辛なされたかは、なか／＼筆先や口先では盡すことが出来ませぬ、高祖承陽大師
の如きも、幻身を波濤に任かすと仰ふせられて、自分の身をも命をも振り捨て、
法門を傳へて救つてやりたいとお思召て、能く支那までお渡りになりましたやうな
次第であります。昔の人が火の中をわけても法を聞くべきに雨風雪は物の數か
はと申しましたが尤もな事てあります。何卒、祖師方の御苦辛は勿論、難値難遇
の互の身の上であることを深く省みて、盡大地解脱門とも云ふべき、此の廣大の
懺悔の門に入りて、一刻も早く無垢清淨の身を以て、國の爲め社會人類のた
め、報恩の行持をいたしたいものであります。

第九席 (淨信を論ず)

然あれば誠心を専らにして前佛に懺悔すべし、慙慙するとき前佛懺悔の功徳力、我
を拯ひて清淨ならしむ、此功徳能く無礙の淨信精進を生長せしむるなり、淨信一現する
とき自他同く轉ぜらるゝなり、其利益普ねく情非情に蒙ふらしむ。

サテ、此お聖語は、『修證義』の第八節にお示し下されたのでありますが、何時も申し
ます通り、佛教信者、わけて當宗の信者たるものは、懺悔滅罪が佛道初入の法門で、
まことに肝要であります。然らば、その懺悔は如何にいたすべきや、或教のやうに牧
師の前に白狀するのであるか、または、小乗戒などのやうに、人前懺悔と申して、現
在我れと同じ人間仲間の人々に向て罪滅ぼしの白狀をするのであるかと云ふに、
今我が祖師門下の懺悔は、そんな仕方ではない、「誠心を専らにして前佛に懺悔すべし」
とのお示して、誠心と申して少しも虚偽り無い心を發して一心不乱に佛前に向つて懺
悔するのであります。前佛とありますのは即ち佛前と云ふ意味であります。かやう
に懺悔する當所、衆罪は霜露の如く慧日能く消除すて、佛前に於て懺悔した功徳力は
實に廣大なものであります。別段に佛の力を假るてもなければ祖師のお助けを乞ふの
ては無いが、我れと我が懺悔の功徳て罪過が消えるので、譬へてみれば、玉の自から
光りを放つて塵を拂ふやうなものです。サ、かくの如くにして久しく隠れて現はれ
ざりし戒徳は無礙の淨信となり、發願行持の光りを放つことになり、一眸、此の
信と云ふことは、佛法の大海は信を以て能入となすとあり、先づ佛教信者
の尤も注意せなければならぬ事柄です、ソコ、佛教て精神の修養をなす所の階段を

五十二位と分ちますが、その一番最初の等級が、信てその中を十段に分ちまして十信と申します、それから十住十行十廻向十地等覺妙覺と最極の證果を得ることとござりまするが、その一番土臺となる所のものは何かと云へば、即ち信であります、誠に此の信といふことは、大切な入口であつて、此の信と云ふ一字の上に就いて後々の結果が現はれて来るので、此の信の満した時が成佛です、此を外のお宗旨と毛色を異にした真宗の上に取て申したならば如何と云ふに此の信の一字は往生極樂の正因となるので、極樂往生の爲には、唯此の信の一つが肝要で、外のことを顧みないと申します、自力聖道の法門から見ても、他力淨土の法門から見ても、此の信の一字が至極肝要であります、所が、今このお示してある淨信とは如何なるものであるかと云ふに、詳しく云へば清淨なる信心であります、所能即ち客觀と申して向ふて何か一物眼前に横はるものがあり、能即ち主觀と申して手前の我と云ふものがあつたならば、それは淨信とは申されませぬ、相對差別の見を忘れて絕對と理智冥合した所の信でなくては出来ないので、昔、時宗の宗祖であらせらるゝ一遍上人が、由良の法燈國師に參得をせられた時或は聖一國師であるとの説もある自分の見込を歌で「唱ふればわれも佛もなかりけりたゞ南無阿彌陀佛の聲のみぞして」と述べられました、法燈國師は此を許

さずして、それではまだ聲が残りに居ると斥けられたから、上人は更に「唱ふればわれも佛もなかりけりたゞ南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛」と述べられてと云ふとてあります、實にこの通りてなければなりません、こゝに至りますと、南無阿彌陀佛と云ふも、南無釋迦牟尼佛と云ふも、畢竟一枚の紙の表裏に過ぎないのであります、この所を一段手近く吾れくお互の方で申しますれば淨信と申しますから、高祖様は、「凡そ信現成の處は佛祖現成の處なり」ともお示しなされました、此の淨信が現成いたしますると、嫌でも精進が起つて参ります、精進と申せば高祖のお示しに「諸の善法に於て勤修して間斷なきがゆへに、精進と云ふ、精は雜らず進は退かず」とありますから、發願行持の有様を仰ふせられたのであります、發願とは、詳しく申せば、四弘誓願と申して、廣大なる利他の願望で行持とは、士農工商その職に盡し、上下貴賤侮らず傲らずその分に安んじ、社會人類の高尙なる利福を圖るのでありますから、これが眞實の宗教的生活で、平生の坐作進退語默動靜が悉く信念の現れとなるのであります、此時は自と云ひ他と云ひ、有情と云ひ非情と云ふ隔りはない、自と云ふのは一體他に對した名稱で、有情と云ふのは且らく非情に對して名けたもの、無差別平等の淨信の上には、かやうな閑名目はありません、よし名目はあり差別はあつても、千差萬

別の現象のそのまゝが都盧一平等の實在でありますから、恰かも、寄せては返へず大海の雄波雌波のそのまゝが水で、水を離れて波なく、波を離れて水はありませぬやうなものです、されば、自分の起しました一念の信心も、一行の善も、自他とか情非情とかの懸隔を離れた上のごとでありますから、一念の上に宇宙萬物を盡し一行の中に天地法界を攝めることが出来て、自分は勿論、他の有情も非情も轉ぜられ、その廣大なる利益は一切萬物に普及いたすのであります、此の道理を佛道極妙の法則と申します、

上の道理を一應譬へて申しますと、此の淨信と云ふものは、猶ほ太陽みたやうなものであります、太陽は憎愛の念慮もなければ、自他の區別もない、そこてありますから、一旦光を放ちますときには、太陽の方で甲は照しても乙は照すまい、或は人間は照しても禽獸は照すまいと云ふやうなケチの考えは無いのであります、さやうな考えはすべて離れて光りを放つて居りますから、一切萬物皆なその恩澤に浴することが出来ます、今此の淨信もその通りで、此れは恩人であるとか、彼れは怨人であるとか、此れは助けても彼れは助くるまいと云ふ様な狭い考えは一切無いので、佛性そのまゝの光りを放つて居りますから、その功德を宇宙法界に及ぼすことが出来ます、

しからば、これを實際に行ひたる所の人は誰であるかと申しますと、明治維新の當時、勝安房伯の行られたるときとは、先づ此に近いことであらうと思ひます、御承知の通り勝伯は徳川幕府最後の黒柱でありまして、徳川一家の興廢は勿論、我が國の安危もその一舉一動にあると云つても宜しい、極重要な地位に居られました、そこで若し當時勝伯が大義名分の如何も考えず、一國の安危盛衰をも無視し、只一時の私心に驅られ、三百年來政權を私したる所の徳川家を載いて、飽迄戦争をやられたならば如何てせう、江戸百萬の生靈は炮烟彈雨の底に葬むるは無論のこと、その勝利は何れにあるにもせよ、外國の干渉は踵を廻らさずして到り、二千五百年來の金匱無缺の國牒も、或は忌はしき事を惹き起したかも知れませぬ、所が、勝伯は一時世間の毀譽褒貶に恐れて大義名分を無視する人ではありませんから、徳川家が三百年來政權を私したことの恐れ多いことを悔い、殊に當時我が國の状態は、勝伯が越前藩を介して、京都の新政府の參與に呈した書に遠くは印度の破れ近くは支那の長毛官兵是非曲直を鳴らして同屬相喰西洋諸國其虛に乗ず、今や皇國殆んど同徹に陥らんとすとあります通りでしたから、歸順の正道を以て、小は徳川家の安全を圖り、大は國家を危機一髪の間で救ひ出し、帝國進運の基といたされたのだけ、政治上の事柄でありますか

ら、一應は縁遠い話のやうでありますけれども、忠君愛國の至誠より出てたるもので、そのまゝが淨信のあらはれと云つて宜いのです、
 其他、楠正成父子の如き、その時代境遇が異なりますから、その行爲の形式は異なり
 ますけれども、是れまた淨信のあらはれです、若し楠氏にして、利慾を欲し一時の利
 害の上より見ましたならば、身を足利尊氏の下に寄する方が利益であることは明白な
 ことであり、然るに一身の利慾や、一時の利害のために節を改めず、七度人間に
 生れて逆賊を滅ぼさんとまで云はれたやうな生死一貫の忠誠は、時移り物換りする
 けれども、千代に八千代に我が帝國のあらん限り、國民の龜鑑となりて居らるゝ所は、
 我が日本國民は、千代に八千代に細石の巖となりて苔のむすまで、楠公の淨信に轉せ
 られて居るのであります、まことに淨信の勢力は偉大なものではありませぬか、
 要する所、淨信と申せば懺悔の心に催し起されたる悪を止め善を行する偉大なる勢力
 でありまして、それが即ち佛性戒徳の光明でありますから、お互に佛祖の御訓に依
 りまして、此の佛性を發揮し戒徳をますます輝かして、社會の進運と自他の幸福を造
 めたいものであります、是れ實に人間として價値ある生涯でありまして、また當宗信
 者の本分と云ふものであります、

第十席 (懺悔の大旨)

其大旨は願くは我れ過去の惡業多く重なりて障道の因縁ありとも、佛道に因りて得
 道せりし諸佛諸祖我を懇みて業累を解脱せしめ學道障り無からしめ、其功德法門普
 ねく無盡法界に充滿彌給せらん哀みを我に分布すべし、佛祖の往昔は吾等なり吾等
 が當來は佛祖ならん、

サテ、當來の懺悔と云ふものは、理懺と申して道理の上で、ハツカリ合點することも
 必要であるが、決してそればかりではいけない、必ず此を儀式の上に掛けなければな
 らぬことは、深く承知せねばなりません、そこで、今吾れくが實際に廻光返照をし
 て佛前に懺悔するときには發願をするのが肝要であります、如何に發願するかと申せば、
 お互に佛の道を奉ずる時には、種々の事情が起つて、修行を障ゆることがある、此れ
 は理窟の上のお話よりも、少しでも實地修行に取り掛かれたる所の人は覺へのある所
 であります、此の障礙のために折角の志も挫けることがありますから、此等の障り
 の無いやうに佛祖の加被力を乞ふのであります、此の佛とか祖師とか申しますのは、
 お互の先輩のお方である、その先輩の御盡力によりて後輩たるお互が平素の希望を達

するのであります、先達後輩の脈絡と云ふことは何れの社会にも必要なことでありまして、後進は先進者の誘掖によりまして、修行を進め、また自分の力を伸べることが出来るし、先進は後進者の相續によりまして、ます／＼その道を永久に傳ふることが出来ます、しかし、先進後進と申したからとて、本来能力に優劣があると云ふのでありませぬけれども、先進の方は先きにそれ丈の智識を得るし、後進は漸くこれから力を得やうとするのですから、それ丈が相違するのです、お互看來れば本来の面目の上では、生佛不二でありますから、佛や祖師方と申しても我れ／＼凡夫と申しても異なりはないのですけれども、高祖のお示しにも「この法は、人人の分上にゆたかにそなはれりといへども、いまだ修せざるにはあらはれず、證せざるにはうるとなし」とある通りで、一步此所を解し誤りますと途方もない邪見に陥ひりますから、佛教信者は此所に充分注意をいたさなければなりません、サ、かやうに先達たる佛祖の力によりまして修道の障礙を除き、更に進んで、受戒入位は勿論のと、發願行持の出来するやうに成り、またその發願行持等から顯はれる功德法門が、普ねく無盡法界と申して數限りも知れない世界中に充滿と充ち滿ち、彌綸と限から限まで行きわたるやうに助けを願ふのであります、此の心掛は佛教信者たるものが片時も忘れてはなりません

事柄で、若し我れ／＼が佛教を信仰し修行するに、此れは自分の身の爲めであると云ふとをのみ心頭に置いたならば、如何なる修行をいたしましても、それは至極ツマツマ事だ、佛敎信者の面目を害ふものであります、當宗は固より大乘とか小乗とかのけじめは飛び超へてありますけれども、かやうな名目を用ひるとしたならば、無論大乘ですが、此の大乘と云ふ語は平素能く合點して置かねばなりません、大と申すのは廣大の義、乗と申すのは乗りもの、そこで大乘とは廣大なる乗りものと云ふ義になる、今日で云つてみると、人力車や自転車の様なものではない、貴賤男女を問はず、老若賢愚を論せず、あらゆる人を乗せて、しかも速に行くのですから、先づ汽車みたやうなものです、佛敎でも自分のみの利益を圖るものは小乗と申して、小さい乗りもの先づ人力車か自転車みたやうなもの、此と反對に大乘と申す大い乗りものは自分は兎も角他の多くの人を乗せると云ふので、高祖様は此の極廣大なる立脚地から、功德法門が普ねく無盡法界と申して數限りも知れない世界中に充滿彌綸させたいとの願を起せと仰ふせられました、かく發願した上は、一言一行が無盡法界のためです、日々行する所の小さいやうな事柄も、宇宙法界と一致することになります、こゝに至ると、生佛不二とか、凡聖一枚とか云ふのは、道理や理窟の上の話では無くして、極親しい

實地の事柄となりませぬ、この所を佛作とも佛行とも申します、最後の懺悔の佛祖の往昔は吾等なり吾等が當來は佛祖ならんとのお示しも、此所迄ゆきませんでは何の用にもなりませぬ、人は誰しも自ら先づ悔つて人から侮られるので、自分で自分の身を深く考え、懺悔すべき悪業があるならば速に懺悔し、本來佛祖と異りのない眞面目を保たなくてはなりません。

十四五年前てしたか、「書生々々と輕蔑するな、今の參議さんは昔書生」と、云ふ歌が流行りましたが、此は實際のことです、書生で流浪して居る間は、まことにツマラヌやうですが、自暴自棄をせないで次第々に修養を積み行つたならば、一國の宰相とも世界の偉人ともなることが出來ます、元來大臣とか宰相とかエライやうですが、やはり書生がだん／＼成り上つたのです、前に申しました先進後進の異があるに過ぎないので、イヤ、大臣宰相の一時の高位高官では無い、生死輪廻の淺間敷い凡夫が、つさせぬ命とくまなき光りを有する即ち壽命無量光明無量身の身の上となることが出來ます、しかしながら、多くの書生が只だ大言壯語を事として居るのみでは、遂には壯士の親方位で却つて世間の厄介物となるより外は無いやうに、吾れ／＼も高尚の道理を振り廻はす許りでは、世間のツボラ書生と同様であります、佛教は何時申す通り

實行が肝要で中にも當宗の如きは、外の宗派よりは實行宗と云はるゝ位でありますから、特に此のお心掛が必要で、

私は、此事に就いて少し話したいことがあります、それは、亞米利加のアアラハム、リンコルンのとです、リンコルンは、十九世紀の曉即ち千八百九年の春に生れましたが、その家は百姓でしかしも大の貧乏でありましたから、早や八歳の時は、父と共に山の奥に芝刈りなどに出て、父の仕事を助けた位でありました、かやうな貧しき家庭ではありましたが、父は剛毅正直でしかも愉快な氣質の人で、母はチヨット才氣のある而かも物の哀れに感じ易い性質でありました、そこで貧乏ながらも子供の教育には注意されましたやうであるが、殊に隣家の父老さんからリンコルンの話を聞いて大いに感じたと云ふことです、そのワシントンと話と云ふのは、ワシントンが小兒の時分に、櫻樹を斬りました時分に、父に叱られるゝことは思ひましても、虚言を吐くのは、尙ほ悪むいと考へ、正直に自分が樹を斬りましたことを白状しました事やら、また、ワシントンが十八九歳の時に、子供の川に溺るゝのを見て、直ちに衣を脱いで川に投じ、激しい流れを涉り、遂に瀧壺に陥りて、已に自分の生命も危ふかりしにも拘はらず、その子供を助け上げ、此を、その母親に届けました時に、其の母親が

涙ながらワシントンの手を取りて、「オー、青年よ、神は必ず大任を後日御身に授け給ふべし」と云つて喜び感謝したことやらです、かくいたして次第に精神を修養をいたしましたから、一般の青年と異なりたる美い品性を得ましたが、貧乏は依然として貧乏です、そこで種々と苦學をいたしまして随分學問も進歩しましたけれども、まだ世間に出て、一家を経営する譯にゆかない、或る時のとですが、例の貧乏で致方がないから、田舎で自分の住つて居る近傍の豪農らしい處を廻りまして、何卒自分を儲ふて呉れまいかと頼みます、所が、リンコルンは勉強のために労働するのですから、通學の時間を貰ふと云ふ次第で、雇主の方から云へば餘り利益でもないものですから大抵は幹よく謝絶すると云ふ状態でした、然るに世間には随分奇篤の人もあるもので、アームストロングと云ふ情け深い豪農が、リンコルンを儲ふことになりました、リンコルンは非常に喜び、約束の時間丈は、他の労働人よりも一層忠實に働き、傍ら勉強をいたすものですから、主人のアームストロングも遂に感心をして、或時にリンコルンに申し渡しまするには、吾れ汝の志を嘉し且つ汝の忠實心に酬いんが爲め自今以後は更に労働を爲すに及ばず、吾家を汝の家と思ひ吾が身を汝の父と思へ吾も亦汝を子の如く思ふと、非常に親切なる同情を得ましたから、リンコルンはそれより専心に勉強をして

辨護士となり間もなくイリノ州會の議員となりまして、いよく國家の問題に盡瘁する身となりました、此時リンコルンは漸く年廿四五歳でありました、此れよりリンコルンの運命は旭日の昇るが如く次第に幸運に向ひまして、卅歳にならぬ内に早や未來の大統領を以て擬せらるゝやうになりました、しかし、月に蓬雲花に嵐で幸運かと思ふと、一方には悪魔が窺つて居るのは世間一般の状態で、リンコルンの前にはドクラスと云ふ大雄辯家て議論も達者であるし、學問もリンコルンより勝れ、金もあり徒黨もあると云ふ大敵が現はれまして、イリノ州の議員は無論大統領の候補者となつて、リンコルンの向ふを張りました、此の時代は彼の有名なる奴隷廢止の大問題の當時で、リンコルンは共和黨より擧げられて奴隷廢止の主義を叫び、ドクラスは合衆黨より擧げられて奴隷維持を主張しましたが、此の大議論は實にリンコルンとドクラスとの大議論であるのではない、實に米國合衆全體二分の議論で、十九世紀中大爭亂の議論でありました、人間は平生は種々な假面を被つて居りますから、その人は真面目は容易に分らないが、何かの大事件が到來すると隠すに隠すことが出來なくて、始めてその人の價値が分るものですが、リンコルンは如何なる態度を取りましたらうか、リンコルンは無論前に申した通り、奴隷廢止の主義を以て堂々と戦ひ、ドクラスを打破

りて大統領の月桂冠はリンコルンの上に降りました、實にリンコルン功名の絶頂とも申しませうが、彼の大議論は合衆國を二分して直ちに四年の大戦争を惹き起し、南にはリー將軍、北方にはグラント將軍と云ふやうな豪傑があつて、智囊を絞力盡しての大戦争ですから、家は焼け、田畑は荒れ、寡婦は寒に叫び、孤兒は飢に泣き、所謂兄弟妻子離散して、屍を戦場に曝らすと云ふ人生の一大惨状であつたが、畢竟南方が大敗して、將軍のリーは降り、敵の統領デビスは逃げ、北方大萬歳となりました、元來戦争は罪惡です、戦争は僅かの利害得失の問題のために起すべきものでないのですけれども人間天賦の權利に關する人道問題のためには已むを得ないです、奴隸問題は一時の利害得失と云ふ計算上の問題ではなくして、實に人道問題です、リンコルンは幼少の時分に、蝮蛇の足を一本折つて、其の跡を曳いて歩くのを見て、一時間許りも泣いた程の人ですから、利害なんかの問題のために戦争はいたしませぬ、只それ人間天賦の權利の問題ですから、涙を吞んで戦争をしました、が、それは救はんがためです、殺さんがためてはありませんでした、それですから、第二回の大統領に挙げらるゝ時分に、随分驚嚇の手紙が来ましたし、暗殺せらるゝ前日も、或人からその企てがあると云ふとを知らせて呉れましたが、その時リンコルンは嗚呼吾れは已に一大事業を

爲し遂げた、吾れは此の爲めに生き此の爲に死すべし、此れて終始あるものとなる、吾れが第二の大統領に挙げられず、靜かに閑地に就くならば、是れ寔に安全の策である、併し今にして退くは恰かも峻坂に馬車馬を取り換が如くである、吾れは麓まで到着せざるを得ない、吾が事業は尙ほ少し剩れり、思ふに吾が麓に到着する時には、吾が一生の事業は終るであらう、此度の戦で北方は遂に勝たのである、故に恨む所は無い、南方を財を費し、生命を賭し、奴僕を奪はれて、而して遂に敗北に歸した、吾れは此れが爲めに彼等の腹癪となりて死せざるを得ないのであらう、吾れ若し暗殺せらるれば、双方の填合これにて付くであらう、吾れは今にして退くべからず、是非とも事の終りを結はさるべからずと云つて遂に狂氣染みたる俳優ブリスの爲めに殺られました、實にリンコルンの如きは、其幼少の時代と云ひ、青年の時代と云ひ、壯年時代と云ひ、何れの時代にも、高潔にして而かも慈愛に富める心情行動は、確に模範とすべき人物であります、語を換へて申せば大乘的行爲の人であると申して宜しい、そこでリンコルンの爲したる事柄は、その當時の人間の花であつたのみではなくして、今日までその色香は世界各國の人の胸の中に薫して感化を及ぼして居ります、佛教信者は、動ずれば、隱遁主義に流れて、人類のために、社會のために活動すること嫌ふものが出來

る、これはその弊でありますから、高祖のお示しにある、功德法門を普ねく無盡法界に充滿彌綸せしめたいと云ふ偉大なる考を以て、此の生渥を送られねばなりません、一時の功名心や些々たる利害の念に動されて、よし高位高官に昇りましても、それは、畢竟、一時の虚榮に過ぎないのでありますから、何卒平素その心得が肝要だと考えま

第十一席 (懺悔の儀式)

我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋痴、從身口意之所生、一切我今皆懺悔、是の如く懺悔すれば必ず佛祖の冥助あるなり、心念身儀發露白佛すべし、發露の力罪根をして銷殞せしむるなり、

サテ、此のお聖語は「修證義」の第十節にお示し下されましたので、當宗懺悔のいたし方であります、一言に懺悔と申しますけれども、その儀式に種々ござります、「儀規」の上にも、「二儀兩懺ありと雖も先佛の護持したまふ處曇祖の傳來したまふ」云々とあります通り、二儀と申して大乘の儀式小乗の儀式と分れ、兩懺と申して理の上の懺悔事の上の懺悔とあります、大乘小乗と申すことは、毎々申します所ですが、大

乗は自利利他圓滿の廣大の法門、小乗は自調一方の狹小の法門であります、かやうに相異がありますから、すべての上で、大乘は此心地の上に重きを置き、小乗の方は、威儀作法の上に重きを置くことと云ふ次第でありますから、同じく懺悔や戒法の事を説きまするにも多少相異するのであります、所が、當宗では何れに依るかと申しまするに、先佛の護持なされ曇祖の傳來せられたる宗門獨特の法に依ります、その法は先づ心に誠心を起し、次には口に此の懺悔の文を誦し、身には禮拜恭敬をいたしまするので、即ち身口意三業の罪過を懺悔するに身口意三業を以ていたしまするのであります、そこで今口誦いたします所の懺悔の文と云ふのは、一體如何なる道理であるかと申しまするに、吾れく互の罪過はまことに種々無量で數限りもないのですが、その根本はと尋ねますると、貪と瞋と痴との三毒に由るのであります、此の三毒は互本來の面目の上の塵垢であります、しからは、その本來の面目とも云ふ所のものは如何なるものであるかと云ふに、譬へてみれば、先づ一面の鏡みたやうなものであります、鏡の本質と云ふものは、光ると云ふのですから、胡來れば胡現じ漢來れば漢現するで、西洋人でも東洋人でも、文明人でも野蠻人でも、擇り嫌ひは無い、終日照して一塵をも留めない、然るにお互の心は本質より云へば此の通りで、一年三百六十日萬事萬物

に觸れて、鏡の物を照すがやうにあるべき筈であるのに、何時の間にか煩惱と云ふ垢が出来ましたために、天地萬物すべての物柄事柄の眞の相を映すことが出来なくなりまして、物に遇ひ事に觸るゝことに、憎いと云ふ一念は早や瞋で、惜しいとか、欲しいとか、様々の煩惱が付き纏ふて来る、憎いと云ふ一念は早や瞋で、惜しい欲しいと云ふ一念は是れ貪であります、サ、此の貪と云ひ瞋と云ふものは、畢竟何より起るかと思しするに、それは愚痴から起るのである、愚痴は何かと云ふに、天地萬物總ての道理が解らないのが愚痴であります、吾れ／＼互が五官に觸るゝ所のもの、皆な是れ因縁所生と申して因縁に由つて現はれて居る、その因縁に苦樂善惡があれば、果報にも善惡苦樂がある、本當に得心が往けば、皆な向ふに任せる事が出来る、花は花に任せて紅に、柳は柳に任せて緑である、それを強ひて自分の量見に引き附けて、己れの氣に入つた、氣に入らないと云つて、降る雨にもイマイ、マシイと疥癬を起し、鳴く蛙にも官の爲めにするか私のためにするかと、飛んでも無い問題を持出して、始終怒りに怒りて遂ひに或人の歌にある「腹たちし時はこの世も後の世も人をも我も忘れつ」と云ふやうになる、惜しい欲しいの一念の煩惱は次第に増長して、見るもの聞くものにつけ、自分のものになしたいと云ふ念慮ばかりで、親子兄弟夫婦の間も、冷かな間柄

となつて、「欲ふかき人の心とよる雪は積るにつけて道を忘る」と云ふやうに、道義も人情も、薩張眼に着けぬやうになる、此の貪瞋痴を三毒と申して、吾れ／＼本來の性徳を害ふものであると云ふが、實に尤なことてあります、中にも痴と云ふものが、根本土臺である、彼の太田錦城と申せば近世の大學者であつたが、その語にも、「さて佛法にはこの二を忿怒、利欲を三つとして、貪瞋痴の三毒と名けたり、貪は欲なり、瞋は怒なり、只痴の一を加へたる事最も妙なり、欲怒は愚痴より生ずるなり」とありまして、痴の一字は利欲忿怒を生ずる基であります、されば、その痴と云はるゝものは如何なるものであるかと詳しく究めてみますると、「禪門」の中には、「聰明利根分別不得正慧邪心取理名爲愚痴」と云ひまた或人は、「迷倒不了撥無因果故曰愚痴須知著我計斷常並執性實三皆迷倒」と申されました、愚痴と云へは如何にも一文不知の翁媪さんの様に聞ゆけれども、決してさうでは無い、百萬卷の東西の書を讀み盡しても因果の何たることを知らざるものは、やはり愚痴の衆生である、此に反して、一文不知の翁媪さんでも、深く因果の道理を信じて居るものは、愚痴では無い、此所は佛教信者の深く注意をいたさなければならぬ所てあります、此様な恐ろしい三毒が根本となりて、身口意の上に種々無量の罪惡を起したのであります、今佛祖方の御訓誡に依

で、身口意の三業の上に淨信を現はして佛に向つて懺悔をいたす、此の刹那、旭日一たび天に冲すると、きは一切の迷闇悉く去るが如く、積りに積りし罪過も、心念身儀發露白佛の當所に於て鎖煩と申して除き去ることが出來ます、此の御訓誡の通りに、一人より二人、二人より三人と次第に止惡作善と申して、今迄罪惡を造りし身口意が反對に善事をなすやうになりましたならば、此の社會は如何に奇麗になりませう、されば、自分々々が此の罪過を造らぬ様にして行くは無難のことですが、同時にまた人類同胞と云ふ觀念、同一佛子と云ふ御訓誡により、努めて他人の罪惡を見ても、故るきは悔ひ新らしきは造らぬ様に勸誘せなければなりません、是れは佛教信者として、社會の一員として必ず努めなければなりません、今日、我國の犯罪の概畧を統計に徴してみますれば、明治卅年の調査に依れば、靜謐を害する罪一萬八千六百四十一、信用を害する罪四千四百十、健康を害する罪四百六十七、風俗を害する罪五萬一千〇二十九、身體に對する罪一萬一千百〇八、財産に對する罪八萬八千七百二十五、謀殺の因由を調ぶるに、貪慾が因となつたのは男十四人女十八人、姦通が因となつたのは男二十人女三人、家内不和親族利益上の争ひが因となつたのは男百四十六人女二百〇三人、失愛嫉妬放蕩が因となりしもの男八十七人女八人、怨

恨報仇が因となつたのは男百四十七人女六人、種々の因由の混合したのが男三十三人女十六人、因由の不詳なのが男十人女十一人です、随分夥しいものではありませんか、悪くべき惡心から行つた事もありませんが、中にはその境遇事情が同情を寄する程のことでも尠くないのであります、近來は此等に關する研究もなかく、進歩して、フェーリは刑事社會學の著述をなし、ルソーは「エミール」を著はして、頗る緻密になりましたけれども、理論が精細になつたからとて犯罪者は容易に減することは出來ない、また法律が細密になつたからとて社會の改善は容易に期しがたい、教育も効果はあるけれども相對と相對との間に於けるもので、根本的ではありませぬ、畢竟する所は、絶對界即ち真理とか佛とかと云ふ處に立脚地を据え、而して相對差別の社會を觀察し教導すると云ふ宗教の力に依りて改善せなければ、到底効果は舉りませぬ、國に大小強弱があり、人に貴賤貧富はありますけれども、コルベールの云つたやうに一國の大小は國の大小に由るものにあらずして其國民の品性如何にあるのであります、移して以て個人の價値もこの標準に従て判ずることが出來ると思ひます、即ち人の價値はその貴賤貧富に由るにあらずして品性の如何にありと云ふのです、此の品性の根本修養は惡を慚善に進むの止惡作善の宗教的意識にあるのですから、此點に御注意を

つて、此の勝縁を空しくせず、佛々祖々單傳の儀式に依て、日一日も早く懺悔滅罪の實を擧げられんことを希望いたします。

(一般の注意) 懺悔滅罪の一章は監獄教誨などには必要なので、監獄教誨は其罪を悔ひ改めしむるのが目的でござりまするが、單に其罪惡の深いことをのみいふのは、却て惡感情を彼等に引き起さしむるものであるから成る可く囚人に同情を表して、彼等の罪惡の止むなきものなるを許し、さてそれから改過遷善の道を説くがよい、泥棒にも七分の理ありで彼等も何等かの理由を持てゐるのであるから、それを許さぬ時は教誨の功を失するものである。

これは監獄教誨に就ていふたのであるが、一般の人々を教化するには、其罪ある身なることを知らしむるがよい、一般の人々は自ら罪惡なしと信じて惡事を爲しながら惡事にあらずと信じてゐるのであるから先づ彼等に迷妄の夢を破らしむるの必要があるのである、こゝに掲げた説教は主として青年を相手としたのであるから多少むづかしいかも知れぬが、それは婦人や老人の爲めには、後の十戒説教の所でも説くから、それを参考してもらひたい、凡て本章に對する譬喩もそれを参照してもらふとよい。

和歌并に金言

我かこゝろ池水にこそ似たりけれ濁りすむこと定めなくして

源空上人

濁るなと世をこそ祈れ底清き三井の清水を汲みそめしより

仁譽法親王

ながき世の心のやみもしるべせよ猶ほのこりたる法のともし火

後醍醐院御製

なにごとく報ひの罪はあるものを身をすてこそほとけとはなれ

空也上人

あしかりし難波のみつらのうらの名も聞えぬかたに消ぎぞわかるい

頓阿法師

年の中に積たる罪はかきくらし降る白雪と共に消えなん

紀貫之

一年のはかなき夢はさめぬらん三世の佛の體のひびきに

藤原良經

油断こそ大敵なりと心得て堅固にまもれ己が心を

俚歌

説教に心の花はひらけてもその實となる人は稀なり

全

正法念經に曰く、異人惡を作すにあらず、異人報を受くるにあらず、自業自ら果を得る、衆生皆此の如し、

心地觀經に曰く、若し能く如法に懺悔すれば、あらゆる煩惱悉く皆な除く、猶ほ劫火の世間を壊り、須彌の巨海を焼き盡くすが如し、懺悔能く煩惱の薪を焼き、懺悔能く天路に往生す、懺悔能く四禪の樂を得、懺悔、寶摩尼珠を雨ふらし、懺悔能く

金剛壽を延し、懺悔能く常樂の宮に入り、懺悔能く三界の獄を出て、懺悔能く善提の華を開き、懺悔、佛の大圓鏡を得、懺悔能く寶所に至る、増一阿含經に曰く、極惡の行をなすも過を悔ゆれば轉た微薄なり、日に悔て懈怠なくんば、罪根永く抜くべし、

普賢觀經に曰く、若し懺悔せんと欲せば端坐して實想を念んぜよ、衆罪は霜露の如く惠日能く消除す、淮南子に曰く、君子の過に猶ほ日月の蝕するが如し、何ぞ明に害あらむ、小人の可は猶ほ狗の吠吠へ鼻の夜見ゆるか如し、何ぞ善に益あらむ、(譬喩并に因縁) 自ら佛性の光明あることを知らぬから迷ひに迷ふてをるので、それを知れば懺悔の心は自然に起るのである、或る盲目が夜行きをするに提灯をつけ、かくれよといふから、主人が貴様は盲目ぢやから提灯があつても同じことではないかといふと、それでも目明が行當りますからといふに成程と主人承知して提灯をつけてやりました、ソコで盲目は意氣揚々として歩み出しましたが、しばらく行くと人に行當りました、盲目はこゝだと得意然と目明のくせに盲目につきあつたといふことがあるか、貴様は此提灯が見えぬかと、いふ其男「馬鹿をいへ、提灯が消えてをるのを知らぬかといふたといふことがありますが、もとく佛性の光りを持つて

をつたが途中で消えたのも知らずに得意然と歩いてをるのが、われくち互くござりまする、早く此提灯の火をつけて笑はれぬやうにせねばならぬ、昔し江戸に一人の男がありましたして其親が酒癖があつて亂暴をするものですから、人に迷惑であるといふてあらうとか、あるまいことか其親を打殺しました、此男無教育で、それが罪惡であるといふことを知りませぬから隣りの婆さんに、今ま私は親爺を殺してしまつた、これから御葬ひをせねばならぬと平氣にいふてをります、それを聞いて隣りの婆さん吃驚して「それは大變じや、町奉行へ連れて行かれるぞ」といふと「私の親を私が殺したのぢやから別に差支はないといふてをります」と、其事直に代官所へ聞こえまして此男は終に捕はれとなり、御奉行様の前で調べられますると「どうか早く還して下さい、御葬を出さねばなりません」といふから、奉行が殺しました、其方親を殺すといふは大罪であるぞ、それは他人様のを殺せば大罪でござりませうが私のでありますといふて親を殺したのが大罪であるといふことを知りませぬ、ソコで奉行も教なきは禽獸に近し憐れなことであると思ふて、直に刑を行ひません七學校の門番をさせてをきました、門前の小僧習はぬ經を讀むて、終

に其大罪であるといふことを知りて懺悔したといふことがあります、高津拍樹老師に参した或る人、懺悔の心を發して「夢さめて見れば恥かし寝小便」とやつた、高丈和尚はこれを聞いて「恥かしとまだ夢さめぬ寝ぼけ坊」と叱られた、恥かしといふ心があつてはならぬ、懺悔するとそのまゝに佛同躰の位に入らねばならぬ、支那の三祖僧璨、二祖惠可に問て曰く、請ふ和尚罪を懺したまへ、二祖曰く、罪を持ち來れ汝が爲めに懺せん、三祖良久うして云く罪を覺むるに不可得なり、二祖曰く我く汝が爲めに罪を懺し畢んぬ、三祖大悟して云く、今日始めて知る罪性内にあらず、外にあらず、中天にあらざることをと、これが滅罪の眼目であります、宗門の人はこの宗門の好追例を愛してはなりません、法句譬喻經に曰く、天帝釋、天上の報盡きて先世の惡業により將に善生道に墮せんとす、時に驚怖して一念發心し罪過を悔て佛門に懺悔し三歸を受く、而も命終して驢馬の胎中に托すと雖、前生懺悔の功德によつて懷胎の驢馬忽然死して胎兒は復た天に生せり」云々

第十二席 (曹洞宗の戒法)

受戒入位

サテ、今日我國に傳來して居ります所の佛教、十三宗三十餘派と宗を別にし派を分ちて居りまするが、その宗その派で各特色と云ふものがある、晴れわたる彌生の空、百花爛熳と咲き亂れ都ぞ春の錦なりけりと云ふて何れ劣らぬ、桃紅李白であるけれども、やはり桃の花には桃の花の特色、李の花には李の花の特色がある、それで、花を愛づるの人は、その花その花の特色に惚れ込んで愛して居るやうなもので、各宗各派同一佛教ではあるけれども、既に宗を別にし派を異にする以上は、各その特色がある、今我が曹洞宗の御法門は、如何なる特色を有して居るのかと云ふに、それは外ではない此の受戒入位であります、しからば、その受戒入位と云ふのは、如何なる事であるかと云ふに、すなはち佛々祖々單傳の妙戒を受けて佛様の心仲間入をするのであります、チヨット、他宗の方を見てみますると、真宗では佛の本願を信するのが入位の正因で、日蓮宗では南無妙法蓮華經の題目を唱ふるので入位が出来ると申します、少し方角の違つた真言宗の方では如何であるかと云ふに本誓と云ふことを主といたします、誓とは誓願とも熟字しまして畢竟する所本願も同じことで是れ／＼したいと誓願いたすのであります、真言宗の専門の方で申立ますると、金剛界胎藏界の兩界の曼陀羅三

十七尊など、随分六か敷いことがあるが、實を云へば天地間ありとあらゆる一切萬物一として本誓の無いものは無い、水と云ふものは、必ず無限の空間を通じ無限の時間を徹して、何所へ行つても物を濡ほすと云ふのが水の本誓である、火と云ふものは上は三十三天より下は地獄の底まで焼くと云ふのが火の本誓であります、其他、草木の上で云つてみたならば、花は紅なるのが本誓ですから、雨の過ぐるにまかせて紅ますます色を添へ、柳は綠なるのが本誓ですから、風にもまるゝに随ひて綠いよゝく深しであります、一の家屋で云へば、柱は柱の本誓本願があるし、梁は梁の本誓本願があります、しからば、無限の空間と無限の時と、しかも一切萬物と融會したる所の佛の本誓本願は如何なるものであるかと云ふに、阿彌陀如來は四十八願と云ひ、藥師如來は十二願と云ひ、その佛その佛で千差萬別でありますけれども、究竟の本願と云へば、一切衆生を轉迷開悟と申して、皆自分のやうにしたいといふのであります、此所と淨土門の語では本願と云ひ、眞言宗では本誓と云ひ、當宗では佛戒と云ふのであります、本願と云ひ本誓と云ふときは、ソ、イ、したいと誓ひ願ふのであるから思ふた状態であるが、佛戒と云ふときは、思ふたことを行ふ状態になる、一層親しい語であります、戒は規則の義で必ずソ、イ、行はなければならぬので、水が必ず物を濡しつゝ行く働きが水

の佛戒で、火の物を焼くのが火の佛戒であります、かやうに當宗では、佛願を頼むとか本誓をするとかとは云はないで、佛戒を受けると云ふのですが、ソ、イ、云ふ以上は、只思ふばかりではない、此を實地に行ふて行くことが佛戒であります、しかし、佛戒とは云ふものゝ過去の諸佛が會て書かれたことも、説かれたこともなく、釋迦牟尼佛が特別に拵えたのでも無い、梵網經の中でも盧舍那佛が戒法を誦するとのみあります、これはたゞ自然に具はつたものに就いて記憶を呼び起すだけのことであります、それを佛戒と云ふのは、三世諸佛同道に斯くの如く行はなければならぬ戒法であるから此を佛戒と云ひ、それを我れゝが受けたる時は菩薩戒と云ふ名を付けるので其は此方から云ふのである、戒の体より云へば佛戒、受けたる人の方より云へば菩薩戒、更に何れも此の戒の中に攝する所からは大戒と云ひ、禪宗の佛々祖々單傳し相承し來た所から云へば禪戒と云ひます、此の通りに禪戒佛戒菩薩大戒とありますけれども、その物は一つであります、即ち宇宙平等の眞理が差別の一切萬物の上に働いて行くときの状態を云ふのであります、古人が戒源は無始無終であるが且らく信發起の時を戒源と云ふと申されましたが、實にその通りであります、そこで、此の戒は語を換へて申しますれば佛性と云ふことが出来るのであります、その佛性は何であるかと云ふに慈

悲心孝順心の外はありませぬ、己れより下に向つてあ、可憐なものであると云ふ心の動くのは慈悲心で、己れより上に向つて随順して行くのは孝順心であります、善と云へば漠然として居りますが、手近く云ひ現はせば慈悲心孝順心の發動を云ふのであります、佛様や祖師方の爲された所の善行は千差萬別でありますけれども、約めて申せば此の慈悲心孝順心であります、その戒を分つに就いては、由來佛教には小乘大乘とありますが、その小乗の方では、比丘二百五十戒比丘尼五百戒沙彌沙彌尼十戒在家戒に五戒八戒十善戒の差別があり、大乘の方では三歸三聚十重禁戒の十六條戒及び四十八輕戒と申しますが、當宗では西天東土傳來しました所の十六條戒に依りまして、此れて出家も在家も押通して行ふのであります、

謹て按ずるに高祖承陽大師の御出家と云ひ御修行と云ひ御一生涯の事柄は、皆是れ戒の現れてあります、初め大師が幼心にも世の無常を感じなほまた母親の御遺言に依り出家をなされ、進んで海路遙かに宋の國にお渡りなされ、天童の山、徑山の峰、山又山、谷又谷、道のためには不惜身命で御修行なされ、漸くに一大事を悟りなされ御歸朝の上は、その枝を繁くせんと欲せば先づその根に培はざるべからずと云ふ道理で、深く越前志比の谷に分け入りたまふて、お弟子方の御教育や篤志の人を御化導なされ

ました次第は、今更申すまでもないやうですが、今は特に大師が時の執權北條時頼を御化導なされたる一端を擧げませう、

時はこれ、壽永四年の春の嵐に平家榮華の夢破れて、世は白旗の風に靡く源氏の世となりましたけれども、廻り廻るは世の慣ひで源氏三代にして亡び、政權は陪臣北條氏に歸し、名を捨て實を取るの政策は着々功を奏しました、中にも北條時頼は賢明の姿を以て質實の政を執りましたが、當時承陽大師は深く越路の雲を踏み分けて、一般の布教よりも寧ろ法を弘め人を救ふに堪ふべき人物を養成することに努めて居られました、

たが、寶治元年七月、時頼は態々使者を大師の下に遣はし、御教化を乞ひました、そこで、大師はその真情に嘉みましたまひまして、その年の八月三日に越前の御山を發して鎌倉へ赴かせられました、時頼は大師を迎へて、自邸に館し法門を問ひましたから、種々御教導なされ特に前に申しました戒法をお授けなされ、御自身の諱の一字を與へて道崇と名けさせられました、そののみならず大師は此の菩薩戒の眞髓たる慈悲心孝順心の旨趣に基き君臣の大義を説き示されましたからして、時頼も大に感ずる所がありまして、次第に皇室に對する事柄も従前と異なるやうになり、下に對しては自ら天下を行脚して親しく人民の痛苦を察したと云ふやうに、政治家たる本分を盡しました、

此等のことは、今日より見ますれば別段の事にも感じませんが、深く當時の事情を察しますれば、餘程心中に感激する所がなくては行れることでは無いのであります、これ偏に大師大教化の感化と申す外はありませぬ、この事柄は朝廷でも夙に御承知のことであつたと見えまして、先帝孝明天皇は大師に佛性傳東國師の謚號を贈らせられました、その時の勅書の中にも「相門降貴武夫銷勇」と仰せられました、此れは即ち時頼御教化の事柄であります、なほまた今上皇帝よりは、明治十二年十一月に承陽大師と謚せられ、今年六百五十年の大遠忌には、陛下の御親筆なる「承陽」の勅額を下されました、されば當宗の信者たるものは佛祖單傳の戒法の真髓たる所の慈悲心孝順心、語を換へて申せば孝順心とは忠と孝、慈悲心と申せば博愛であるから、能く誤解の無いやうにます、此の戒牒を發揮して、君のため國のため將た社會のために盡されたいものであります、世間では動もすると佛教特に此の禪宗などは、全然、茶人や詩人の翫弄品みたやうに心得、社會に活動する人には、必要の無いもの、やうに考えて居る人がありますが、それは一時の弊を認めて却つてそれが真相であると誤解して居るのでありますから、戒體の何物たるかを明にし、なほまた大師の御生涯に照し、御親切なる御訓誡に考えて、一刻も早く受戒入位をいたされ、日々の行動の上に

戒牒の光明を放つやうに御信心の程を希望いたします、

第十三席 (佛教の根本思想)

次には深く佛法僧の三寶を敬ひ奉るべし、生を易へ身を易へても、三寶を供養し奉らんこと願ふべし、西天東土佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なり、

大凡世にありとあらゆる宗教は、何れの宗教といへども、皆それ／＼に信仰の對象となるものがないものはありませぬ、基督教で申せばゴット、神道で申せば天神七代地神五代の諸の神々と云ふやうな状態であります、されば、今我佛教、とりわけ佛祖單傳の當宗では何を信仰の對象として供養し恭敬するかと申しますに、外ではない佛法僧の三寶であります、供養とか恭敬とか申しますれば、何か山海の珍味でも列べて馳走をする様に聞えますが、決して左様な意味では無い、能く／＼此の三寶の道理を心得てこれを實踐躬行するのが供養し恭敬するのであります、昔、太田錦城と云ふ學者は、國を治めるには鐵砲が必要、家を齊へるには女房が必要、身を修めるには佛法が必要であるから、鐵砲女房佛法は治國齊家修身の三寶ちやと申しましたが、まことにその通りであります、世界各国競争の世の中鐵砲なくしては國は治らず、一家を

持して世渡りをしてゆくには女房と云ふものがなくてはならず、さてまた身を修め心を養うてゆくには是非此の佛法といふものに依らねばならぬ、併し世間には鐵砲や女房の必要を知つて居る人は多いが、此の佛法の必要を知つて居る人は少い、如何に精巧な鐵砲があり、賢良な細君があつても、その鐵砲を持つ人に佛法の道理が解らず、細君の心の奥に佛の光りが輝いて居ないと、眞實に國を治め家を齊へることは出来ないのであります、その所謂佛法とはこゝに申す三寶であります、我國の大聖人と云はれた聖徳太子は流石に此の道理を御承知あつたからして「十七憲法」の中に「篤敬三寶三寶者佛法僧也、則四生之終歸萬國之極宗、何世何人非貴是法、人鮮尤惡能教從之、其不歸三寶何以直枉」と仰ふせられて、小にしては一個人として身を修め心を養うの上より、大にしては國を治め人を導くにいたるまで、此の三寶に依るべきことを定めさせられました、サテしからは三寶とは如何なる道理のものであるかと云ふに、此れに三種の別あることを知らねばなりません、先づ住持三寶と申しますのは、佛と云ふのは吾れ／＼が朝な夕なに禮拜する所の金佛や石佛木佛を云ふのであります、法と申しますれば、教法のことで、四十九年横説堅説せられました所の大小頓圓藏通半滿等の八萬四千の教法でありまして、今日に傳つて居るのは、梵語、パリー語、支那

語、西藏語、滿洲語、蒙古語等ありまして、それ／＼で多少の相異はありますが、語の方で申しますと、八千五百三十四卷程あります、尤も支那日本撰述の諸經論末疏をも含む次に僧と申しますと今日圓頂緇衣の僧侶方であります、第二に現前三寶と云ふ上から申しますと、佛と云ふのは、二千五百年の昔、中印度迦毘羅國摩訶那太子所の國王淨飯と云ふお方を父とし、摩耶夫人と申すお方を母として御出現なされ、廿九歳にして出家をなされ、三十にして成道、それより四十九年の間傳道に従事なされ、遂にも入滅なされました即ち歴史上の釋迦牟尼佛であります、法と云ふのは、如来が暖い口からも説きなされた所の八萬四千の教法、僧と云ふのは、當時直接に釋迦牟尼佛より教を受けられました所の阿難とか舍利弗とか云ふ地方／＼であります、所が此の中で一言御注意かた／＼申上げて置きたい所の事があります、それは、唯だ佛と云へば教主、法と云へば教理、僧と云へば弟子と心得られました時には、耶穌教にも、回教にも、波斯教にも、儒教にも道教にも、此の三つはあります、即ち耶穌教で申しますと教主はイエスキリストで、教理は新舊兩約全書、お弟子はローマやヨハネ、回教教主はマホメットで、教理はコーラン經、波斯教の教主はゾロアスター、教理はゼントアベスタ經、儒教の教主は孔子、教理は四書五經、道教の教主は老

子、教理は道徳經といふ風に、それに各弟子があつて今日に傳はつて居るのでありますから、これらの諸宗教と佛教とが如何に違つて居るかと云ふことが分らぬ、それを話し申すには、是非此教理即ち法の上のことを話し申さねばならぬが、こゝに困つたことには、佛教は他の宗教のやうに一冊二冊の書物で、その教理が盡きてしまつて居るものでは無く、先きにもいふ通り八萬四千の法門、八千五百の經論で、なか／＼一朝一夕には話し申すことが出来ぬが、今その大要を申せば、佛教の他の宗教と異つてをすることを示すに三つの印しがある、これを三法印と申して昔から佛教が外道と異つてをすることを示す印になつてをります、此の三法師といふのは、第一が諸行无常印、第二が諸法无我印、第三が涅槃寂靜印でござります、第一の諸行无常印といふのは此の世にありとあらゆる一切のもの、何一つとして遷流轉變せぬものは無い、昨日の我は今日の我にあらず、明日の我も亦今日の我にあらず、時々刻々に遷り代つてしばらくもとゞまらぬことを説たのは、實に我が佛教の特色で、希臘の哲學者では、ヘラクリタスと云ふ人が、此の無常の道理を説た人でありますが、その他にはあまり多く見當りませんで、皆此の遷流無常の世の中を常住不變のものゝやうに執着して居りましたが、近世學問が開けて参りまするに従て、此の世の中は決して無住不變の

ものでは無い、我れ／＼の住んで居る地球も、われ／＼の目に見て居る花の色も、耳に聽いて居る鳥の聲も、皆遷流して地球も植物も動物も皆な過去何千年の間に轉々化々して今日の状態となり、かくいふて居るわれ／＼も亦一瞬／＼に變つてゆくので、しばらくも止まつて居ることは無い、嘗に此世の化縁盡きて死なねばならぬばかりでなく、「面影のうつらで年の積れかし假令命に限りありとも」で、命に限あるは是非がないとした所で、人生の無常は、朝の紅顔夕の白骨とならねばならぬ、「明日ありと思ふ心の仇櫻夜半に嵐の吹かぬものか」この今生の生縁盡くるを一期の無常と云ひ、念々刹那に生滅するのを刹那无常というて、此二つの無常は時を選ばず、吹いて来るものでござります、それを何時迄も變らぬ世の中に變らぬ我が身と處して行くやうに思ふてをるのは大きな間違であると、釋尊が示してくだされたのであります、第二の諸法無我印と云ふのは、法は軌持の義で、宇宙間一切の萬物は皆な因果の規則によつて消滅して居るもので、別に常一主宰の主人と云ふものは無い、外の宗教では、此の天地には因果の規則に従はず、超然としてこれを支配する常一主宰の神があるなどと説てをるものがあるが、我が佛教はさやうなものがあることは認めない、天地も萬物も悉く因果の法則に従つてゆくもので、此の地球もわれ／＼人間も皆な此の因果の

規則によつて、或は生じ或は滅するので因果を離れて生滅なく、生滅を離れて因果はないと説て、天地間別に常一主宰の我があるとは認めぬので、これを今日最も進歩した科學や哲學に考て見ても亦その通りで、天地創造の神や、天地支配の神があるといふやうなことは何人も承知するものは無い、唯因果の規則によつて生滅して行くといふ道理はいよ／＼學者の間に重んぜらるゝことになりました、さてまたわれ／＼人間に向ても佛法は天我と説くので、外の宗教のやうに、われ／＼人間には靈魂と云ふて、何か一つの昭々靈々たるものがあると説くものでは無い、人間は四大の假和合によつて出来たので今日の學問でいへば、元素と元素との寄り集りて、此の元素を離れて人は無いのである、それに前にも申しました通り、宇宙萬象は念々刹那に生滅して因果を生み、果は因となつて相續して行く、その相續があまり早いものであるから、常人の眼には何か一物固定して居るやうに見えるので丁度滾々として流れる水は、暫時も同じものでは無いが何時も變らぬ、流水のやうに見え、熾々たる燈火は前滅後生前滅後生してをるのであるが、常住不斷の燈火があるやうに見えるのと同じこととて、靈魂といふて定まつたものがあるのでは無く、因果相續してをるのであると云ふのが佛法の大法でありますから、此點は大いに他の宗教と異りて居ります、此の諸行無常や

諸法无我の道理を悟れば、我が身を愛着するといふ心が無くなる、我が身を愛着する心がなくなれば、惜しい欲しい可愛い惜しいの煩惱はなくなる、この境界を涅槃寂靜といふので、涅槃とは梵語で譯して寂滅といふので、生死の苦を脱し永く三界流轉を離れたすがたであります、この境界に到るのが佛教の目的で、諸行無常の道理を知りて常想を除き、諸法无我の道理を悟りて我見を除けば、こゝに涅槃寂滅の眞理に住することが出来るのです、併し、以上述べました、諸行無常、諸法无我、涅槃寂靜の三つは、小乗の極印で、小乗佛教ではこれまでしか説きませぬが、大乘になると、諸法實相の道理を説て、諸行の無常なるがそのまゝに常住の姿、諸法の无我なるがそのまゝに眞我自在の姿であると申しまして、涅槃とか悟りとかいふものを、此の無常や無我の諸行諸法の外に求むるでなく、煩惱はそのまゝに菩提、生死に流轉してをる無常は吹く説法度生の聲で、此世このまゝにサトリの姿で、山の高きも水の長さも、鳥のかゝ／＼と鳴くのも、雀のチュウ／＼と囀るのも、皆な盡十方法界にひろがつてをる佛の相で、佛といふのは、天竺の語で佛陀耶、支那に譯して覺者と申します、覺とはサトリと訓じまして、夢の覺めたといふ意味の文字であります、我見や常見の迷の夢

を見てをるから活潑々地に此の宇宙にあらはれをるサトリの姿が見えぬので、此の迷ひの夢が覺むれば、則ちこのありのまゝして覺の姿が見えるのです、その佛の姿は、無限の空間を通じて盡十方世界に瀰漫し、無限の時間を貫きて三世を通じて居ります、實に光明遍照十方世界で、佛の姿のあらはれてをらぬ所はありません、それにわれわれが無始劫來の煩惱のために、此の光明を認むることが出来ぬのであります、古歌に「法の身の月はわが身を照せども無明の雲の見せぬなりけり」とあります通り、佛の光明三世十方に通じて居る、これが即ち宇宙の本體であります、この本體の活動してをる相が即ち法で、天竺では達摩耶で前さにもいふ通り、此の法の字は軌持の義でありますから、宇宙活動の理法はさまりきつて少しも動かすことの出来ぬものです、彼の鳥は必ずカ、ア、ク、雀は必ずチ、ユ、ウ、ク、春の次ぎは必ず夏、夏の次ぎに必ず秋、秋の次ぎは必ず冬で少しも此の順序を違へず、地球の引力は何物と雖、引き寄せぬものはなく、天體の運動時を違へたことはない、これが宇宙差別の當相です、此間には因果の大法も行はれ、無常无我の理も現するので、チャンと定まつて居る、宇宙の姿が即ち法の現はれてそのまた森羅萬象區々別々のものが互ひに、和合して行くのが僧の姿です、僧と申すのは、天竺にて僧伽耶と申して和合の意味であります、土と土とが

和合して山となり、水と水とが和合して川となり、絲と絲と和合して衣服となり、柱や梁や敷居や鴨居が和合して家となつてをる、これが僧の姿であります、此の如く佛法僧を説くのを一體三寶といふのであります、以上申しました所で、略三種の三寶のことは承知が出来たであらうと考へますが、更に一步を進めて申しますと、此の三種一法々々の上に於て談することが出来ます、そこで此の三寶は宇宙の事理を盡したると同時に直に佛教の要領を提げた語です、しからばかやうに高尚なる道理を恭敬し供養することは、如何にせば宜しきかと云ふに、此所が當宗信者の注意すべき必要の點であります、若しも口の先さばかりに高尚な道理を振り廻はすのみであつたらば、近世の哲學者と五十歩百歩であります、所が佛教特に當宗では、此の高尚な道理を吾れくが親しく日用の上に應用して人を利し社會を救ふて行くのが肝要です、此れが當宗で申す三聚淨戒であります、詳しいとは更に席を改めて申しませうが、兎も角、上に述べました通り、三寶に三種があるが、その三種の三寶は直に是れ宇宙の當相佛教の要領で、此の親しく身口意の三業の上に現はして行くのが、高祖の御精神當宗信者の特色であります、

譬へて申せば、三寶を供養し恭敬することは、恰かも、子が父母に孝養にいたすやう

なものであります、父母と云ひ子と申せば、別物のやうでありますけれども、實は同一血肉であります、吾れ／＼と三寶との關係も此の通り、衆生と云ひ三寶と云へば別物の様にありますけれども、衆生を離れて三寶なく、三寶を離れて衆生はありませぬ、同一法性であります、されば、三寶を供養し恭敬すると云ふのも、子が親に對して、たゞ親の心に逆はぬ様に能くその心を受け繼いで行けば、それが直に孝行であるやうに、吾れ／＼が朝な夕なに三寶の精神に逆はぬやうにして行けば、それが供養であり恭敬であります、若し子たるものが、親に孝行をすると云ふのは、山海の珍味を供するのみであると考えて、親の精神を汲み取りてこれを行ふと云ふのを忘れたならば、それは決して眞の孝行とは申されませぬ、その如く當宗の信者たるものが、三寶供養と云ふことは、たゞに珍らしい香華を供ふることや、何か世間と風異りのことをするのみが、正しい道であるとしたならば、それは眞實の佛教信者と云ふことは出来ませぬ、佛教の道理を能く世間法の上に用ゐて、更にその佛法の臭味もなくやつたのが、眞に佛教を奉ずるものであります、味噌の味噌臭きは上味噌にあらず、佛教信者として佛教臭きは未だ眞の佛教信者ではありませぬ、何卒此の點を能く御了解あつて、生々世々に此の三寶を供養し恭敬せられんことを希望いたします。

第十四席 (正信と迷信)

若し薄福少徳の衆生は三寶の名字猶ほ聞き奉らざるなり、何に況んや歸依し奉ることを得んや、徒らに所逼を怖れて山神鬼神等に歸依し、或は外道の制多に歸依すること勿れ、彼は其歸依に因りて衆苦を解脱すること無し、早く佛法僧の三寶に歸依し奉りて衆苦を解脱するのみに非ず菩提を成就すべし、

サテ、吾れ／＼も互佛教信者たるものは、迷信を捨て正信に歸すると云ふことが肝要であります、受けがたき人身である遇ひがたき佛法であるといふことは、毎々申しまする所てありますが、一應は承知をして居ても、動もすると何か僅の障害のために信すべからざるものを信することになりまして、此の一大事業を托すべき佛法の方には心を傾けぬものが随分澤山にあります、此の信すべからざるものを信するのが迷信と云ふのであります、所が、迷信と申しますれば、如何なるものが迷信であるかと云ふ事柄が問題になつて居りますが、此に就ては一寸分類をして申しますと、先づ第一に天然崇拜、これは随分古い宗教でありまして、古代の人民は多くは此の信仰でありました、我國にても天然物である所の日月星辰を神として崇拜するは勿論、また變化す

る天然の現象、風雨、雷電、水火等を崇拜するのがありました。そこで、山は大山祇神、海は大綿津見神、雨は高雷神、雷は火雷の神、暴風家を倒すは級長戸邊神の怒りであると言ふやうに考えたのであります。第二には、動植物崇拜、動物を神とし植物を神として崇拜するは、昔も今も随分流行する所でありまして、或は蛇を神とし、或は鱉を神とし、或は狐を神とし、或は熊を神とし、或は槍を神とし、或は銀杏を神とし、或は菩提樹を神といたします。我國では中國地方は狐崇拜が盛んでありますが、狐の居ないと云ふ四國には犬神崇拜が盛んであります。第三には鹿物崇拜、此は或る物品を神として崇拜するで、毛髪だとか羽鬣だとか貝殻だとかを神の宿る所とし、或は毛髪羽鬣そのものを神聖として崇拜するのであります。第四には生殖器崇拜、これは申すまでもない、男女の陰根を崇拜するのですが、かやうなものは、到底あるべき筈でない様ですが、決してそうではありませぬ、東北地方や九州地方の一部分には此れがあります。その他にもいろ／＼の崇拜がありますけれども、少くとも以上の崇拜は確に迷信と申して宜しい此等の信仰は畢竟その人の愚かなる所よりして、自分の不運や不幸があると、これは或神の祟であらうとか云ふ考えよりして、それに信仰をして、その怒りを解きたいとか、または神の力によりて、自分の不幸を除きたいとか云ふ考

えからして信ずるのであります。或は外道の制多に歸依するものがある、外道と申せば今日の耶穌教などです。制多とは塔とか廟であります。一昨此等の宗教の中には、多少の眞理を含んで居ないと云ふ譯ではありませんが、未だ眞理の全面を説き示した所のものでありませんから、やはり迷信の中に攝れず、高祖様は此等の迷信を排斥なされて、決して歸依してはいけない、よし歸依した所が到底衆苦と申して、人間社會の種々の苦みを解脱することは出来ないとのお示してあります。

是れは、高祖様が六百五十年前にお示しくだされた所ですが、それが六百五十年後の我國の社會に能く適中して居ります。我國は近頃文明であるとか、開化であるとか申して居りますが、我國人民の實際の信仰の有様は如何でせう、「悪しきを攘ふて助けたまへ天理王命」とか、「助けせきこむ一列すまして甘露臺」などと、理由もわからぬ謔言を唱へて踊り廻はつてをる人民はありますまいか、衛生々々と喚いて居ながら、病氣しても醫師の薬は用ゐさせずに腐た水を「神水」など、勿昧らしく賣り付くる教會はありますまいか、彼の所謂天理教會だとか、蓮門教會だとか云ふものは、即ちこれでありませぬか、かやうな宗教はその教理の上より信ずる價值のないのは無論のこと、我れ／＼日本國民の風俗や衛生の上からても充分排斥せなければならぬ宗教

であります。しからば、我れくの信すべき宗教、文明の國民が信頼すべき宗教はいかなるものでありませうか、かやうな宗教は少くとも左の五ヶ條の性質がなくては出来なだらうと考えます、それは、先づ第一に科學的でなければなりません、第二には道德的でなくてはなりません、第三には哲學的、第四には世界的、第五には理想的でなくては出来ませぬ、此の五條の資格は決して私の私見ではありませぬ、世界の重なる學者の皆一致する所であります、此の條件を以て、所有宗教を調べてみますると、大抵正邪が明かになります、先づ我國の神道などは、多少道德的の點はありますけれども、一種の祖先崇拜の儀式に過ぎませんから、無論哲學的でもなければ世界的でもありません、天理教會や蓮門教會などは、此の五ヶ條ともに缺けて居ります、さらば、現今世界の二大宗教の一と云はる、基督教は如何であるかと申しますれば、世界的でもあるし、理想的でもあるし、道德的でもあります、惜しいことには、科學と衝突し哲學と相容れない宗教で、即ち科學的哲學的の二條件を缺いて居ります、かく調べてみますると、随分宗教もありませんけれども、此の五ヶ條に合するものは無いやうですが、最後に此の佛教は如何であるかと申しまするに、一言に佛教と申しましても、宗派で申せば、十三宗三十餘派、法門で申せば八萬四千と申す廣大の宗教で

ありますから、その宗その派で多少の相異はありますが、先づその共通して居る所を調べてみます、先づ最初に佛教は科學的であるか否かと申しまするに、佛教で三法印と云ふことを申しますが、これ科學的であると云ふことが云へるであらうと思ひます、三法印とは第一に諸行無常印、諸行とは萬法、無常とは生滅變遷ですから、宇宙間に於ける一切の萬法は皆な生滅變遷するものであると云ふのであります、ここに例を擧げてみますと、我れくの住んでをる此の地球は實に堅固であるやうにあるが、刹那に生滅して居るものであつて、成劫と申して一通り成り上り、それから住劫と申してしばらくの間、小い變遷生滅はあつても、大い變動がないそれから壞劫と申して破壊する、空劫と申して破壊して空となる、かやうに成住壞空々々々と常に生滅變遷して居る、此に例して一切ありとあらゆる萬法皆この通りであると云ふのですが、科學の方でも、近世の科學者の説によりますと、此の地球の本は星雲と申して彼の夏の夜に見えまする天の河、彼れは遠い所にある星の集つてをるのが膨げに見えるのであります、その天の河よりもまだこまかい雲のやうな火の塊でありましたが、此の星雲は大地のやうな固形のものではありませぬ、初めは無斯のやうな氣味でありましたが、後には液體となつて次第に固まりますのは、水蒸氣が水になり水が氷に

なるやうでございませぬ、さて固つてまゐりまするに就て、こゝに回轉を始めました、回つてをりまする中に熱が滅じ、熱が滅するに従て根本の塊から分裂して、こゝに地球となり、土星となり、天王星となり、水星となり、金星となり、木星となり、海王星と成たので是を八遊星と申し、その根本の塊を太陽と云ふのであります、過去がやうでありますから、未來も常住不變でをるのではありませぬ、そのほか人類の上にも動物の上にも就ても何れも生滅變遷を認めてをります、そこで佛敎の諸行無常の説は實驗と推理とを重んずる科學者によりて、その確實なるを保證せらるゝと云つて宜しいのであります、

第二に佛敎の諸法無我印は如何であるかと申しまするに、これは一切の諸法は因縁に依りて地水火風が假りに結合した丈の事であつて、常一主宰と申して常とは變遷のない常住、一てすから分割すべからざる者、主宰と申して主人宰相の威權を以て自由にするもの、此等の條件のある我なる個体的のものは無いといふのであります、これまた科學者の見る所と一致して居ります、動物と云ひ植物と云ひ、一切の法は六十餘元素の離合分散に過ぎない、されば此の元素の外に、何か一物個体的のものがあるといふことは許しませぬ、「引きよせて結べば衆の庵なりとくれはもとの野原なりけり」と

申しまするのには、佛敎の諸法無我の道理を詠んだのであります、また以て科學者の説に符合するのであります、むかしはか無常と無我とか申しますると佛敎特有の事であると思ひ、中には佛敎がいかに捏造したかのやうに申す人もありましたが、今日では科學者の證明を得て争はれない真理となつて居ります、そうしてこれのみではありませぬ、第三の涅槃寂靜印、是れまた今日の學理と能く符合して居ります、一轉涅槃とは不生不滅と云ふことであります、一寸前の諸行無常など、矛盾するやうでありますけれども決してそうではありませぬ、一切諸法は無常であるが無常そのまゝて常住て宇宙間一物として、無くなつてしまふといふものはありませぬ、此の一杯の茶碗の湯も、大地に乗てますれば無くなつたやうであります、決してそうではありませぬ、太陽の熱によつて水蒸氣となつて蒸發し、さてその蒸發した所のものが、空中の寒冷に遇うて雨となり、また雪となつて降る、降つてまたもとの水となるといふやうに、宇宙間のもの、その現象はいろ／＼に變わりまするが、無くなると云ふとはありませぬ、宇宙は實に無盡藏で不増不減不生不滅であります、科學者はこれを物質不滅勢力恒存と申しまして、凡そ此の世の中にある物、即ち物體は増したり減つたり出來たり無くなつたりしまするが、この物體を組織する物質といふものは、不増不減

不生不滅であると申します、そうしてまた、此の不増不減不生不滅の物質をして生滅し増減せしむるもの、これをエナルギー即ち勢力といふので、此の勢力は常に存して増減のないものであるといふて居ります、これ實に佛教の涅槃の道理を證明して居るものと云ふべきであります、かやうに比較して見ますと佛教は科學の證明によりてます、その基礎を堅固にいたすのであります、彼のゴッパが世界を造つたか一物其物を造つたかと云ふ教義とは、雲泥の差ではありませんか、これでほん佛教が科學的であると云ふことが解りましたらうと思ひます、第二の道徳的と云ふことは、此れは何れの宗教でも大抵説きまするけれども、その説き方に深淺廣狹があり、特にその國の國本と相容れない道徳を主張するものがあります、わが佛教では、われ／＼具有して居る本性即ち佛性とも云ふべき孝順心慈悲心を充分に發揮して行くのがその要領であります、その發揮してまゐりまする場合を大略四つに分ちまして此れを四恩と申して居ります、即ち父母の恩、國王の恩、三寶の恩、衆生の恩であります、詳しいことは、こゝに述べつくすことは出来ませんが、如何にわが佛教の道徳が、廣く且つ穩健であるかといふことが、名目のみにても知ることが出来ます、第三の哲學的であるといふことは、佛教の尤も得意とする所でありまして、西洋の宗教學者などが往々佛教を稱

して哲學的宗教など、申すのも無理はありませぬ、しからは、佛教は如何なる哲學的な所があるかと申しますと、極低い小乗教の俱舍論などてみますと、先づ唯物論であります、所が、一步進んで權大乘の唯識論などてみますと唯心論であります、猶ほまた進んで實大乘の教てみますとたゞに唯心とか唯物とか云ふやうに一方に偏せないのであります、何故かと申せば此の物と云ふのも心と云ふのも、此れは恰かも大海の上の波みたやうなもので、その本には物と心とを生ずる根本のものがあつて、此根本から物となり心となりて現はれたので、物も心も元來二つのものでない、同一不二の實體の中に含まれて居るのであると申しまして、その根本を眞如とか法性とか申しますのでありますから、これは包含的一元論と云ふべきものであらうと思ひます、さてまた、その根本の眞如とか法性とか云ふのと物とか心とかいふのとは本末とは云ふもの、譬へてみれば水と波とみたやうなもので水を離れて波なく、波を離れて水は無いのでありますからして、現象即實在論とも申すことが出来ます、かやうな状態でありますから極低い所の哲學思想から尤も進歩した所の哲學までが、皆佛教の中に包含されて居ります、實に佛教は一切の哲學史を縮寫して居ると申しても過言ではありませぬ、第四の世界的であると云ふ點は、わが國の神道などのやうものは、その國の歴史

を離れ、その民族を離れては成立することの出来ないのですが、佛教は三千大千世界を化益すといふのですから無論世界的であります、第五の理想的であるといふのは、佛教で婆娑即寂光土と申して、此の現實の世界に最善最美の國土を現出させやうとするのですから確に理想的であるといふことが出来ます、わが佛教、宗派の多い中には多少教義の低いのもありますけれども、實大乘、特にわが此の曹洞宗は、實に此の五ヶ條に適當して居ります高祖大師の早く佛法僧の三寶に歸依し奉りて衆苦を解脱するのみに非ず菩提を成就すべしと仰ふせられましたと言葉をたゞに、一宗一派の上にて我田引水のお語てはありませぬ、實に人間の心靈上の大安心大歸着の方向を示してくだされたのであります、しかるに、前にも申しましたやうに、今日なほ迷信を起しまするのは、譬へて申せば、雨風の吹きすさむ暗夜に笠を遠うてをるやうなものであります、世の中は苦の海、涙の谷、五十年の生涯悲風慘雨でなか／＼難儀ではあります、かやうな時によし笠一匹捕へ得たからとて、わが行くべき道を照すことは出来ない、ツマラヌ信仰を起して狐を崇拜するとか、天理運門に迷ふとか丈位のこととて到底人間の行路に安心を得ることは出来ませぬ、中には少し考えて提灯を持つのは、少しは巧妙ですけれども畢竟は無益であります、雨風のために吹き消さるゝのであります、基

基督教などで神を信ずるのは提灯を頼みにすると同様です、基督教の神は一切萬物を造つたと申しますが、實は人間の方で神を造つたので先づ提灯みたやうなものであります、かやうに笠を遂に行くとか、雨風の吹き荒む夜に提灯を持つよりも、人々持つて居る三寶の光りを以て照すが一等上策です、三寶の光りは火に入れて焼けず水に入れて濡れず、無始無終です、三寶と申せば、實は、人々心中に具有する同一の原理(僧)獨立の原理(法)調和の原理(僧)でありまして、一心の三方面であります、この三方面の光りが宇宙を照します所に、佛即ち釋迦牟尼佛があらはれ、法即ち五千餘卷の經卷が出来、僧即ち傳道の僧侶があらはれるのであります、此の三寶に歸依するときに、その歸依の功德の光明が人々自己に反射して來まして、自分の方の三寶の光りと、向ふの方の三寶の光りが一枚になりまして、こゝに始めて道の覺りを得まして、此の一身に具足する三寶の功能を以て己れを利し人を利することが出来る、此時こそ迷信の入るべき餘地もなく、除くべき衆苦もなく、つさせぬ命とかぎりなき光明とを得て、即心成佛の境界にいたるのであります、

第十五席 (一心の歸着)

其歸依三寶とは正に淨信を専らにして、或は如來現在世にもあれ、或は如來滅後に
もあれ、合掌し低頭して口に唱へて云く、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧と、
佛は大師なるか故に歸依す、法は良藥なるか故に歸依す、僧は勝友なるか故に歸依
す、佛弟子となること必ず三歸に依る、何れの戒を受るも必ず三歸を受けて其後諸
戒を受るなり、然あれば則ち三歸に依て得戒あるなり、

サテ、歸依とか三寶とか申しますことは、先づ佛教と名の付く所のものは、何れも申
立てません宗派はありませぬ、随つて信者の方でも今では口癖のやうになつて居りま
すが、しからば、その歸依と云ひ三寶と申しますことは如何なることであるかと申
しまするに、實際に心得た人が少ない、殊に當宗で申します所のものは、同じく歸
依三寶とは云ふものゝ、その心得方が幾分他宗とは異なつて居ります、高祖様が態々
お示しくださるゝのも、畢竟此等の點にあるかと存じます、一昧人間と云ふものは始
終何物かを求めるものであります、或は實利を求めるものがあり、或は名譽を求める
ものがあり、或は權威を求めるものあり、十人十色で種々様々であります、すてに
求むる所がある以上は是非此を得なければ安心が出来ない、サテその安心が出来ない
から四方八方に奔走をして此を得たいと煩悶いたします、所が、種々と煩悶した結果、

或は實利なり、名譽なり、權威なりを得たならば、それで安心することが出来るかと
申しまするに、決して安心は出来ない、實利を得ると、更に進んで名譽を得たくなり、
名譽を得ると猶ほまた進んで權威を得たいやうになります、人間生涯五十年の間、此
を望み彼れを求め、東に走り西に奔り、煩悶の中に此世を終るものが多い、考えてみ
れば淺間敷いものであります、古人の歌にも「うつり往くはじめはしも白雲のあや
しきものは心なりけり」とあります通り、自分で自分の心を振り返つてみますれば、
奇怪千萬でありますが、これは畢竟何故でありますか、それは外ではありませぬ、
その人の依り處と云ふものが無いからのことですから、我れくも互は一日も早く此
心の歸き所依り所を擇んで身を任せねばなりません、こゝになりますと、同じ佛教
とは申すものゝ、その宗その派で多少異つて居りますが、當宗では三寶に歸依せよ
と云ふのであります、三寶と申しますれば、毎々申します通り、佛法僧の三つで、
此れが吾れくの歸き處依り處と云ふのです、そうして、その歸依をいたしまするに
は淨信と云ふが肝要であります、淨信とは詳しく申せば清淨の信心と云ふことであり
まして、此が吾れく衆生と佛法僧の三寶とを一致せしむる所の引力であります、佛
法的大海は信を以て能入と云ひ、或は信は道の元功德の母と申しまするのも、尤なこ

とだと思ひます、真宗の方で申しましたならば、此信の一字が極樂の勝因であると説き、當宗の方で申せば、高祖様は佛果位にあらざれば信現成せずとも仰ふせられました、してみますると、寧ろ佛と云ふのは此信の全体が現はれた所を云つたやうに思はれます、信であつてみますれば虚偽（まごころ）はない即ち真であるし、すてに真であつてみれば、うつりかはるものではありませんから如てあります、そこで信と云ふことは語を換えて申せば、真如と云ふのであります、これを一層手近く申してみますと、幾える山、流れる水是れが信ではありますまいか、何れの所にも虚偽は認むることは出来ませぬ、一切萬事萬物が此の通りに参りますれば、此の娑婆（しあは）が直に寂光淨土（じやくかうじやうと）であります、惜いことには、忽然念起（ちつぜんねんき）の無明（むみやう）、一度起りましてより、することなすことが、皆な信の反對なる虚偽となりますからして、暗きより暗きに入り迷ひより迷ひに沈み、淺間敷い境遇となりましたのですから、一日も早く此の信を起して三寶に歸依せねばなりません、サテ、その歸依をへたしますには前に申す所の淨信を起すべきは無論ですが、此れと同時に身には合掌低頭いたし、口には南無歸依佛（なんむきいぶつ）、南無歸依法（なんむきいぽう）、南無歸依僧（なんむきいそう）と唱ふるのであります、此れで身口意三業相應して三寶に歸依いたしましたのです、所で、今南無歸依佛と申すが、それは大日如來であるか、阿彌陀如來であるか、

藥師如來であるかと云ふに、固より佛の上では佛々平等でありますけれども、諸佛とは釋迦牟尼佛なりとのお示しもある通り、尤も吾れ（われ）に因縁の所の釋迦牟尼佛に歸依するのであります、明皎（めいけう）なる一輪の月、影を千江萬水に映して、智徳圓滿（ちとくまんまん）の釋迦牟尼佛は、時に大日如來とも、阿彌陀如來とも現はれたまひます、「法華經（ほふくわきやう）」の中に「我が分身（ぶんしん）の無量の諸佛」とありますのは、この意です、此の釋迦牟尼佛は、極親しい關係があるのであります、即ち師弟の關係です、釋迦牟尼如來は宇宙の眞理を發見なされ大悲の眼を以て吾れ（われ）を御教導（ごたうどう）くだされるのであるから大導師（だうし）で、吾れ（われ）は釋迦牟尼佛の弟子であるのです、此を口に發表して南無歸依佛（なんむきいぶつ）と唱ふるのであります、次に南無歸依法とありますのは、法は良藥なるか故に歸依すと申して、お互は各々い顔面（がんめん）をして居りますけれども、皆な是れ一種の病人であります、食病（じきびやう）のものもあれば、臍病（せびやう）のものもある、また痴病（ちびやう）のものもある、中には三病俱發（さんびやくいぱつ）のものもある、イヤ大概の人は三病俱發（さんびやくいぱつ）の病者です、此の病氣を癒するものは何でせうか、物理學でせうか、天文學でせうか、心理學でせうか、或は純正哲學でせうか、將たまた法學でせうか、いかに科學萬能主義を唱へてみても、物理學や化學で到底癒すことは出来ませぬ、い

かに哲學萬能主義でも法律萬能主義では、やはり手は着き、せぬ、此の病氣に對しては是れとも如來の教法を用ゐるより外はないのです、佛自らも自分は醫者であると仰ふせられたるが、實にその通りであります、その次に歸依僧とは、すべて物事をするには、外に深く同情を寄せて保護して呉れる人がなくてはならないのです、殊に如來の法に歸依し佛の法に依つて行くには、その同行たる友人が必要で、かやうな友人は誰てありませう、これは即ち上は迦葉阿難より下は今日の僧侶の方々であります、かく申せば、中には今日の僧侶方の腐敗などを攻撃する人もありますけれども、自分々々の信念を堅める上には、一二の不品行の人があつても、何の妨げにもなりません、數多い僧侶の方々の中には、必ず學徳一世に高き人があることは申すまでも無いとてすから、それ等の人に依れば宜いのであります、ことに、この僧と申すとは、一段深く考えこみなければなりません、僧とは僧伽耶て和合の意であります、此の和合こそ宇宙の眞理であります、水水と和合してこゝに河があります、土土と和合してそこに山があります、人人と和合して國があります、此の所よりみますれば、聳える山、流れる水、皆な是れ僧のすがたである互の勝友でありますまいか、一言に歸依三寶と申してもその道理はまことに廣大ですが、要するに此が佛弟子となる根本基礎であつて、

此がシツカリ無い以上はすべての事は成り立ちませぬ、まだ戒法の方から申せば戒法には種々の個條もありますが、その基礎となる所のは、やはり、此の三歸であります

此れを譬へてみますと、こゝに一人の妙齡の處女があらまして、日用の威儀より茶湯生花琴ピアノ等の音楽にいたるまで、なか／＼巧者で、その上に、品性も能く修養して居つたのですが、兩親に早く離れるのが何よりの不幸で、三年五年一人暮しをして居る中に、兩親はなし未だ夫は定めず、されはとて親切に心配する人もないものから、何時しか、あだし男に誘はれて浮名を流し、が、たまく或人の親切な忠告で、今迄の罪惡を悔ひ改めましたから、世間の評判も善くなり、遂ひに或人の周旋で立派なる財産家に歸ぎ丁重なる結婚式を挙げ、昔の浮名を流かせし時代とは打つて異つて、賢母良妻として近所親類の龜鑑となつたやうなもので、吾れ／＼は本來を尋ねてみれば、決して賤しからぬ身分でありますけれども、一念念起の無明といへるあだし男に誘はれてよりツマラヌ身分となり下つたのです、しかるに幸なことに難値難遇の佛法に遇ひ、懺悔滅罪をいたし更に進んで三寶に歸依するのは、處女が自分の罪を悔ひ改めて良家に歸いたやうなものであります、處女の歸く處は所天の家ですが、吾れ／＼

の歸く所は三寶であります、すでに三寶に歸依しました以上は、日々の務の上に佛教信者たる行をいたすのでありますが、その事は、更に席を更へて申しませうが、歸依三寶のいかに肝要な法門であるかと云ふことを深く承知をいたして、すでに歸依せられたる方は、相續や大難でありますから、日々にわが身を省み、未だ歸依せない方は、一日も早く歸依をなされて、諸善萬行の基礎を築かれんとを希望いたします、

第十六席 (積功累徳)

此歸依佛法僧の功徳必ず感應道交するとき成就するなり、設ひ天上人間地獄鬼畜なりと雖も、感應道交すれば必ず歸依し奉るなり、已に歸依し奉るが如きは、生生世世在在處處に増長し、必ず積功累徳し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり、知るべし三歸の功徳、其れ最尊最上甚深不可思議なりといふこと、世尊已に證明しなす、衆生當に信受すべし、
サテ、歸依三寶のことは毎々申上げる所のことですが、こゝに御承知を願ひたいのは感應道交といふことであります、歸依三寶と申しても、歸依する所の吾れ〳〵と歸依せらるゝ所の三寶とが別々になつて居ては、それでは眞實の歸依三寶といふことは出

来ないのであります、此の間に感應道交と申すことが無くてはいけな、然らば、その感應道交とは如何なることであるかと申しまするに、感は奉召の義、應は赴接の義でありまして、感は互互の方に屬し應は三寶の方に屬するのであります、道交とは我等互の道と諸佛菩薩の道とが相交はるのであります、かやうに感應と云ひ道交と云ふ以上は物が二つ別々になつて居つては出來ない、實に一體無二であります、此れが眞實の歸依と云ふことが出來るので、此の一念歸依の功徳は時間の上で申せば生々世々とあるから僅か三十年や五十年のことでは無い、無限の時間である場所即空間の上で申しますると、在在處處とあるからして、僅に此處其處と狭い限界の上の話しては無い、無限の空間である、かやうに無限の時間と無限の空間とを貫通して、到處に於て功を積み徳を累ねて、阿耨多羅三藐三菩提即ち無上正遍知と云ふ佛祖の大道を成就するのであります、實に廣大な法門ではありませんか、しかし、かやうに申せば長い時間に修行をして大道の果を得るやうに聞えますが、此れは當宗で毎々申す所の修證不二の義で、無間の時間と無限の空間との上に於て、功を積み徳を累ねる外に、特別に阿耨多羅三藐三菩提と申す大道があるのではありませぬ、そこで功を積み徳を累ねると申しまして、何も佛に成りたいためではありませぬ、水の物を濡はすが如く、

火の物を焼くが如くて、只その本來の性徳を發揮するだけのことであり、水が物を濡ぼす上に於て、かくして自分は正一位とか正二位に叙せられたいとか、火が物を焼く上に於て、此の功勞に依りて年金を得やうとか云ふやうな考は毛頭有るべき筈は無い、人々の積功累徳もその通りであります、若し一念といへども、こゝに求める處があつたならば、それは有爲有漏の功徳であります、佛と我と一體無二になつた感應道交とか歸依三寶とか云ふ上の行持ではありませぬ、此點は呉れ／＼も御注意を願ひたいのであります、かやうな次第でありますからして、實に三歸の功徳は最尊と申さんければなりません、また最上と申さなければなりません、その最尊とか最上とか申しても、吾れ／＼思慮分別の及ぶ所ではありませぬ、不可思議と云ふより外は無いてあります、此のとは、釋尊が「希有校量功徳經」の中に、若し三千大千世界の中に滿る如來の數、稻麻竹葦の如くならんに、茲に人あり、此諸の如來を悉く供養し奉りて滿二千歳の間、飲食衣服臥具醫藥四事の奉納怠たらず、尙ほ其諸佛の滅後に於て各々七寶の塔を起し、復た香華種々の供養を以てせんに其福德實に多し、然れども人あり淳淨の心を以て佛法僧の三寶に歸依し奉りて得る所の功徳に此すれば百分の一にも及はずと申されました、また「優婆塞戒經」の中に、是の三歸依は乃是れ一功無量の

善法乃至阿耨多羅三藐三菩提の根本なりとあります、是れ實に明白なる如來の御證明であります、此の上は我れ／＼は此を信受奉行して一刻も早く、此の廣大無邊なる功徳を實現することに努めなければなりません、猶ほまた此の希有の事柄は管に人間ばかりではありませぬ、天上人間地獄鬼畜とのお示しもありますから、此の無邊の世界に接息して居るものは、皆な此の通りであります、仰げばいよ／＼高く、望めばます／＼廣いのは佛祖單傳の法門であります、

譬へて申しますると、彼の天に輝いて居る明皎々たる一輪の月は光りを法界に遍うして居ります、此の一輪の月は彼れは善人であるから照さう、此れは惡人であるから照すまいと云ふやうなことは無い、「なほからぬ心をかくす我がげにいとほて照らす月ぞはづかし」で、そんな差別はありませぬ、また貴賤もなければ貧富もない、金殿玉樓に琴を彈ずる貴婦人も照せば、九尺二間の裏長屋に世を啣つ賤の女も照らします、そこで誰しも月を賞したいといふ心さへあれば皆な月を賞することが出来ます、所が一度その月に對して見ますと、深草の元政上人が「なほ深く見てこそ已まね山里のさびしさ飽かぬ秋の夜の月」と詠まれたる通り、別段これと云ふことは無いけれども、何時まで見ても飽きることは無い、最初は自分が月を觀るのであつたのが、遂には、